心象は通常從屬的なるは事實なり。味覺心象は最も著しく現在五官知覺と聯合す。例へば、青き林檎或は醋を見て酸味の心象を生ずるが如し。さりながら此の如き場合に於て、味覺心象は大抵他の種類の感覺と大に混合するものなり。

已に述べたるが如く、大抵の人に於ては視覺心象最も著しき者なれ共、亦視覺心象以外の心象の最も顯著なる人あり。之に二種あり。(一)聽覺範類(Auditory Type)及び(二)運動範類、或は口語運動範類(Motor Type or Verbal-motor Type)即ち是なり。聽覺範類とは聽覺心象の最も著しき人にして、運動範類とは運動心象及び一部運動的一部聽覺的なる言語心象の最も著しき人なり。口語運動範類に入る人は、その數固より視覺範類(Visual Type)の人に比すれば甚だ少しなしと雖も、少なくも近時の教育狀況のものとに於て又中年に於ては、極めて普通なり。運動範類の人は存在事物に對して彼等のなさんとする運動の形に於て、或は事物を名稱し說明する言語の形に於て、世界を心象す。彼等は視覺範類の人に比すれば、事物の視覺的詳細を覺識把

心象と一般意識、現在感覺、運動作用及び運動傾向との關係

一般意識との關係

住すること甚だ拙なりと雖も、事物の空間的關係を詳細に意識する點に於ては、遙に巧妙なる視覺心象家に勝るものなり。從て運動或は言語に飜譯して事物の抽象的性質を說明すること甚だ巧なり。

五九、 未だ心的被敎化性の研究に至らずと雖も、今因みに心象と高等精神作用との關係を示し置かざるべからず。一切高等精神作用は或る現在瞬時に起るものにして、而かも單に感覺及び感情のみより成立するものにあらざる以上、必ず心象の分子を包含せざるべからず。一思想が精神上如何に重要なりとするも、又その範圍が如何に遠大にして、その意味が如何に廣漠なりとするも、現在思想としては、それは感官に現はるゝ對象若くは心象として現はるゝ對象より形成せられざるべからず。或瞬間の感覺及び心象はその瞬間の感情狀態と和合し、以て該瞬間の精神的材料を形成するものにして、如何に高尚なることを考へつゝある場合と雖も、又如何に鎖細なることを考へつゝある場合と雖も、同樣なり。此の故に、正しき心象の養成は心的訓練の最も重要なる方面なり。

現在感覺及び運動作用との關係

さりながら茲に注意すべきことは、心象は通常決して五官知覺若くは運動反應より獨立するものにあらざることこれなり。外界を知覺する通常の作用に於ては、感覺と心象とは最も密接に聯合融著す。例へば、鋭利なる刃物を見るときは、之に依りてなし得る切截作用を心象し、テニスのラケットを見るときは、之を使用する際になす運動を心象するが如し。又或る物語を讀むより生ずる一連の心象は、之を讀む際に目に入る印刷文字の印象に密接の關係を有す。現在の五官知覺より最も獨立せるが如き一連の心象、例へば火を熟視し或は暗黑中に冥想する場合に起る心象と雖も、尙ほ火に依りて、或は暗黑中に於ける網膜の興奮に依りて、或は有機感覺に依りて生ぜられたる五官印象と聯關す。此の故に、心象作用の訓練は、通常感官の適當なる訓練より分離すること能はず。蓋し、一般に心象は單に以前の感覺の殘したる結果の復活に原づくものなるのみならず、その復活といふことそれ自身が現在感覺と關係を有すればなり。此の關係に就ては後章心的被敎化性の章に於て說かんとす。通常の心象と通常の現在感覺との關係に注意せずして或る抽象的思索、或は宗敎的想像、或は一般に冥想を養成せんとする人は、此の見易きの理を忘却したるものなり。

運動傾向との關係

五官心象と外圍に對する運動反應との關係の忘却に至つては、愈々甚だしきものあり。此の關係は運動心象それ自身の場合に於て、特に明かなり。日常見慣るゝ物體、例へば筆、時計、小刀、辭書、鍵束等の目前に於て此等の物體が喚起する心象を檢査するときは、その內には多少明かなる運動心象あるを知るべし。即ち、この心象は此等物體が吾人の心に喚起する習慣的行動を吾人自身に思ひ浮ばしむるものなり。例へば、筆は字を書く爲めに之を握る動作の心象を喚起し、小刀は切截作用の心象を喚起するが如し。又何か或る物を見て、その物の名を思ひ起したき場合に、言語心象の起るは最も普通のことなり。此の如き心象は、やがて吾人が此の物の名を呼ぶといふ運動反應を實際に始むることを意味す。さりながら、或る物體に依りて起さるゝ心象は、必ずしも明瞭なる運動心象の形に於て、その物體が吾人に起さんとする行動に關係することを要せず。吾人の知れる湖水或は河流に

快走せる蒸汽船を見る時は、吾人が嘗て此の汽船に乘りて旅行したる際に經驗したる光景及び他の經驗の視覺心象を浮ぶべし。さりながら、此等の心象はそれ自身その汽船に乘じて再び航行せんとする意識上の現在傾向を意味するものにして、若し閑暇の身なりせば、此等の心象は旋て切符を買ひ船に乘るといふ實際の運動作用となることを得るものなり。且つ心象の大多數はその視覺心象なると運動心象なるとを問はず、未來の出來事の豫想に關係す。而して此等の豫想は概して或何等かの動作に依りて此の未來の出來事に備へんとする傾向と相伴ふものなり。要するに、通常の心象は悉く吾人の行爲と密接の關係を有す。從て行爲を離れて之を研究すること能はず。況んや心象に伴ふ中樞作用はそれ自身外圍に對する反應の一部分にして、相集りて體制をなせる心象の一團は、實際吾人行爲の一部分を構成するに於てをや。此方面の事實は心象の心理學的研究に於て屢々忘却せらるゝ所にして、教育家の多くは兒童心象作用の訓練を以て全く運動作用の訓練と別問題なるが如く考ふるを常とす。さりながら、健全なる兒童の心象は通常その遊戯、その演劇的擬人、その談話、及びその事物に對する質問の形に於て最もよく現はるゝものにして、心象作用の最も健全なる訓練は行爲の訓練と聯關して成就せらるべきものとす。

之に由りて此れを觀るに、『心象作用』(Imagination)なる語は、心象に現はるゝ精神作用の總和を名くる名稱として、最も都合よきものなり。心理學上『心象作用』なる語を用ふる場合には、決して實在せざる事物或は單に幻象的なる事物の妄想を意味するものにあらず。一切心象は過去五官經驗の結果なり。心象は何故にそれが起るが如き順序起るやは、心的被教化性の章に於て答へらるべき問題なりとす。一切心象の一般性質より考ふるに、吾人の心象は實物の甚だ不完全なる代表者にして、又甚だ幻象的なることあり と雖も、心象の價値はその心象の結果として生ぜらるゝ行爲の種類より定めらるべきものにして、事實の描寫としてのその價値より直接に定めらるべきものにあらず。よき心象とは正當なる意見、必要なる行爲、并に意識一般の快活滿足なる狀態を生ずる心象なり。

心象に關係する實際問題

心象作用の訓練に於ては、前に述べたるが如く、人に依りて心象の範類を異にするといふ事實に最も注意せざる可らず。若し學校教師にして一切生徒を皆視覺心象範類に入るものとして教育せんか、而して若し成功せりとせば、その成功は蓋し實際上視覺心象範類のものが多數なりしに依るものにして、心象の特殊範類、即ち視覺心象のみを缺ける生徒は恐らく此の如き教師より恐物視せられたるならん。小學教育の分課中には、兒童が之を把住するに適當なる心象の種類を選擇すると、せざるとに依り、その習得上に大影響を及ぼすものあり。特に綴字課に於て然りとす。適當なる心象の種類如何は、その生徒が視覺範類に屬するや、或は聽覺範類に屬するや、或は運動範類に屬するやに依りて定まる。蓋し此等の範類はその生徒が目に依りて最も易く綴字を學び得るや、或は耳に依りて最も易く之を學び得るや、或は舌の使用に依りて最も易く之を學び得るやを定むるものなればなり。若し生徒自身適當なる心象を選擇し得ざる場合には、教師がその生徒の屬する範類を發見するの勞を取り、之に從てその生徒の注意を指導せざるべからず。

感情

感情と知力及び意志との關係に關する舊說

第七章　感性

(は)　感情

六〇、今や進て精神生活中吾人に最も直接の關係を有し、且つ心理學上最も不明瞭なる方面の考察に入らんとす。所謂感情(Feeling)の方面、即ち是なり。『感情』なる語の通俗の慣用は頗る曖昧なるを以て、心理學者或は之を精神生活の『情的方面』(Affective aspect)と稱し、又『情』(Affection)なる語を以て精神生活の此の方面をいひ現はすことあり。吾人は前に精神生活の記號を論ずるに當て、已に此の種の意識方面に注意せしことあり。即ち、此の方面は五官經驗に原づく快苦に最も著しく、又一切情緒生活にも極めて著しきものにして、又吾人に現はるゝ意識狀態の現在價値を直接感知するに必要缺くべからざるものなり。

意識の此の方面が吾人の活動に密接の關係を有することは、固より云ふを俟たず。蓋し、快樂感情或は滿足感情の獲得并に苦痛狀態の避除は、共に吾人の行爲を決定する有力なる分子なればなり。有名なる傳來的分類法によれば、精神生活を知的生活、情的生活、及び意的生活の三部に分ち、感情生活を以て知的生活及び意的生活の中間に置くを常とす。即ち此の見解に從ふときは、知識は先づ事實を吾人に提供し、感情は此等事實の吾人に對する價値を定め、而して此の價値に依りて吾人の行動は決定せらるゝものなり。此の傳來的見解の眞義を有することは、固より疑を納るべきにあらず。さりながら、今意識の構造及び理法を概說するに當て、吾人は少しも此の傳來的敍述法を踏襲せざらんとす。

本研究に於ける感情の位置

吾人の見る所によれば、一切意識は悉く動作を伴ひ、或は必ず動作の傾向と相提携するものなり。從て、一切意識は悉く意志の表現なりと考ふることを得べし。何となれば、吾人の意識する所は精神上常にしかじかになさんとする吾人自身の傾向と相聯關するを以てなり。且又吾人の意識は、外圍によりて生ぜられたる興奮に對する吾人感性の表現なる限りに於て、必ず知的方面を有す。而して後に述ぶるが如く、吾人の意識は啻に有機體の

現狀に關係するのみならず、その得性にも關係す、換言すれば被敎化性の結果なるを以て、吾人意識の意的方面は亦必ず或點より知的方面ならざるべからず。感情は此の如く常に多少明かに知的にして又意的なる意識の一部分を構成するものなるが故に、之を以て比較的分劃したる意識の二象面(Phases)卽ち知的象面及び意的象面を連結する連鎖なりと考ふるは、蓋し妥當にあらざるべし。吾人をしていはしむれば、感情はそれが現はるる限りに於て、現在感性の一象面なり。感情と知力幷に意志との關係は、後に之を說明せん。今は唯外圍に對する現在意識的反應の一部分として、それが五官經驗に伴ふ限りに於て、之を考察せんとす。

元素的感情は元素的感覺の如く實驗に依りて廣く研究せらるゝこと能はず

六一、 精神元素論は吾人の取らざる所なれば、先づ元素的感情を排列し、然る後他の元素との關係上此等元素が如何に複合意識生活に入り來るやを說明するが如きは、吾人の玆に與り爲すべき限りにあらず。感情の內には固より心理學的實驗に依りて多少明確に孤立され得るものありと雖も、實驗心理學の現狀に徵するに、此の種の孤立は到底感覺の列擧が現在意識の感覺的方面の研究に資せしと同等の程度に於て、意識の情的方面の研究に資すること能はざるなり。何となれば、實驗に依りて孤立され得る感情は、情的生活の極小部分にして、感覺の場合に於けるが如く、普通の經驗に現はるゝあらゆる種類を包括し居らざればなり。且つ孤立といふも、單に匂、味、音等の單一感覺に聯關してのみ孤立にして、到底絕對的の孤立にあらざるなり。故に感情の說明及び分析に就ては、要するに唯此の極めて不完全なる實驗の結果に依るの外なし。

感情の「主觀的」性質

通常の意識はその統一內に吾人の意識する事實及び此等事實の有する價値、卽ち例へば、音響或は觸覺の快或は苦は、通常事物の吾人自身に對する關係に歸せらるゝものなり。余が如く思はるゝ價値を區別す。此の現在價値、卽ち例へば、音響或は觸覺の苦痛とは、余の皮膚に觸れ或は之を灸く物體の性質にあらずして、余の常にいひ慣るゝが如く、「そは余の苦痛にして、獨り余にのみ存す」。卽ち、余の感覺は之を起す外界事物に歸せらるべきものなるも、余の感情は余自身に屬するものゝ如し。感情と他の經驗との此の區別は、唯余の自我論に依り

てのみ、十分に是認せられ又說明せらるゝことを得。而して此の如き理論は感情の本質を十分に說明する手段として、心理學の始初に於て假定せらるべきものにあらず。さりながら、已に一度自我及び世界の相異を理解したる上は、吾人は感情を自我以外の世界に歸せんよりは、寧ろ之を特に自我に歸すべきなり。心理學者は多く此の主觀性を以て感情の本質を定義するを常とす。

感情を快不快とする分類

六二、 感情とは之を簡單に定義するときは、單に事物の價値(直接意識に現はるゝ限りに於ての)に對する現在感性に外ならず。感情は事物の倫理的價値、或は科學的價値、或はその他之に類する深遠なる價値を知らしむるものにあらず。唯、意識內容の現はるゝに從て、此の意識狀態或は意識狀態の複合の一見的現在價値を知らしむるものなり。此の故に、感情には如何なる方面ありや、或は如何なる種類の如何なる方面ありやといふ問題は、要するに吾人の意識狀態は如何なる方法に於て現在直接價値を有するが如く見ゆるやといふ問題に歸着すべし。此の問題に對する心理學教科書普通の解答は、吾人意識狀態の現在價値、即ち感情の現在種類は二個の相反せる範類に歸することを得といふにあり。而して或る現在瞬時に於ては、此等の何れかゝ優勢なるか、或は唯その一種のみが單獨に現はるゝものなりとす。感情の二範類とは所謂快苦或は快不快(Pleasure and Pain, the Agreeable and the Disagreeable, Pleasure and Displeasure, the Pleasant and the Unpleasant)是なり。

此の分類の困難

此等各種の內に更に細別ありや否や、例へば快の內にも互に相歸一すべからざる多數の種類ありや否やといふ問題に就ては、諸家の異說紛々たり。さりながら、有名なる學說は常に快不快以外、何等の根本的異種の存在を認めず。

此の說は先づ氣分、情緒、情熱の如き頗る複雜なる感情狀態に之を適用せんとするや、明かに困難を生ず。さりながら、最近心理學に於ては、前に述べたる精神元素論が、實驗心理學に依りて養成せられたる內省的分析習慣の效果と相俟ちて、大に此の快苦說を助長しつゝあり。即ち、吾人の情緒は綿密に之を研究するときは、大に感覺の要素を包含するものにして、複雜なる

此の困難に對する通常の辯明

情緒狀態の內には分析に依りて幾多の感覺元素を發見することを得べく。而して此等元素は通常の分析せられざる情緒の內にも存在するものなりとす。此の如き見解よりするときは、情緒は有機感覺元素よりなるものにして、此等元素が快苦範類の感情元素と密接複雜に結合してなれるものなり。例へば、憤怒の場合には、情緒に伴ふ有機的興奮に原づく複合感覺あり。即ち、咽喉の詰まる感覺、激烈なる心悸の感覺、憤怒を表はす運動より生ずる感覺等是なり。若し此の情緒より憤怒を起す事物の觀念及び此等諸種の有機感覺を抽象するときは、殘餘の部分は唯該狀態の現在價値を感知する方面、即ち單に快苦の方面のみとなるなり。憤怒は概して苦痛情緒なり。さりながら、その或る時期は比較的愉快なることあり。恐怖、愛情、喜悅、その他興奮せざる精神狀態に伴ふ比較的靜穩なる情緒に就ても、同樣の分析をなすことを得。此の如くして感情の根本的種類として殘るものは、唯快苦の二あるのみ。

上に述べたる感情分析論の補遺として、茲に聊か苦痛なる語の通俗的慣

苦痛なる語の意義

用の曖昧なることを辯し置かざるべからず。此の語は屢々元素的感覺の細說に於て述べたる感覺の一種を名くるに用ひらるゝことあり。又不愉快なる感情を云ひ現はすに用ひらるゝことあり。觀念上の悲哀の場合は勿論、直接の五官經驗に聯合する感情の場合に於ても、吾人は大抵何等の痛感を覺えざるなり。さりながら、腸の疾患及び火傷より起る苦痛は痛感と密接の關係を有す。色の不愉快なる配合、その他見苦しき裝飾美術は不快の念を生ずと雖も、此の場合の感覺は火傷、腸患を意識する場合の感覺とは全くその性質を異にす。純粹の視覺には決して痛感あることなし。さりながら、腸患、火傷と不愉快なる美術品とは、共に苦痛なる點に於て、即ち共に不快感情を吾人に與ふる點に於て、更に換言すれば、共に多少堪へ難き點に於て相一致す。之と同じく觀念上の悲哀も、不快は不快なれど、必ずしも痛感を伴はず。已に苦痛なる語の曖昧を指摘し、苦痛は不快感情を表はすものにして、痛感を意味するものにあらざることを確めたる以上、前に述べたる感情論に就て不必要なる誤解を起すことなかるべし。

快不快の相反

此の說の精神元素論的方面は玆に再び之を說くの要なし。唯玆に問題となるべきことは、吾人意識の現在價値は之を二種に分類することに依りて完全に說明し得らるゝや、又此の二種は快苦若くは快不快なる語に依りて十分その特質を描寫し得るや否やにあり。

六三、 上來說述する所に依り、感情は常に相反せる二群に分類せらるゝものなることを知るべし。さりながら、ジュリエットが袂別を呼で『此の如き快き悲痛』といひしが如く、吾人は果して同時に快不快を意識し得るや、即ち同時に樂しみ苦しみ、或は現在狀態を同時に快にして又不快なりと感ずることを得るや。これ人に依りて稍々その見解を異にする問題なり。さりながら、快感と不快感との間には明かなる相反あり。從て或るものを快と感ずることは、その時その場合に之を不快と感ずることゝ相容れざることは、何人も疑はざる所なり。換言すれば、快と苦は相反價値として互に相容れざるものなり。これ感覺に於て發見し能はざる特質にして、色は音と相反せず、又色及び音はよく觸覺及び運動の感覺と再立す。さりながら、快

快不快と行爲との關係

快不快と有機的條件との關係

は常に苦と戰ひ、快の勝つ所、苦必ず之に服し、苦の勝つ所、快必ず之に屈す。而して上に述べたる感情論に依るに、このことは感情の意志活動に對する關係に就ても同樣なり。即ち、快樂は吾人を誘引し、吾人は成るべく之を增大せしめんとす。之に反して、苦痛は吾人を反撥し、吾人は出來得る限りその原因を除去せんとす。此の如く二種の相反感情は活動の二相反傾向と結合し、而して感情に唯二種あるが如く、活動にも唯二種の相反活動あるのみ。或る事物に近づき、之を保持し、之を增大せしめんとする種類、及び或る事物より逃れ、或は之を亡滅せしめんとする種類是なり。一言以て蔽へば、吾人は快樂を願望し、苦痛を嫌惡す。

最後に此の感情論に依るに、快苦は夫々相反的有機的條件に聯合す。快感のある所には、生活力增進の種々の記號あり。此の場合には苦痛情緒の場合に見るを得ざる全生活の膨脹及び活氣あり。さりながら、苦痛情緒の場合には有機體は種々の方法に於て收凋畏縮せんとし、而して終に生活力低減の種々の記號を示めす。此の如くして、吾人の活動に關する事實幷に

感情を快不快のみとなす見解の困難追論

「混合」感情及びその複合

有機的條件に關する事實は共に感情生活の二元論を幇助せんとす。

六四、 さりながら、複合感情生活の幾多の事實を見るに、大に此の二元論の完備を疑はしむるに足るものあるは、爭ふべからざる事實なり。例へば、事物に對して同時に一種以上の價値を意識すれども、その價値たるや、到底快苦の語を以て十分に之を說明すること能はざるが如き場合あるは、吾人の屢々經驗する所なり。即ち、吾人は苦境にありと知りながら、而かも之を變してその苦痛を逃れんと欲せざる一種の感情狀態にあることあり。例へば、すねたる子供が不快の念に苦しみながらも、而かも敢て慰藉を受くることを欲せざるが如き場合是なり。これ蓋し幾分か此の苦痛を樂しく感ずればなり。更に高尙なる例を擧ぐれば、悲哀に沈める人は己の心を轉せしめんとする他人の慰藉を拒むことあり。蓋し、如何なる歡樂を受け得るとするも、その歡樂より寧ろ悲痛哀哭するの優れるを覺ゆればなり。又體育家、軍人、道德家は何れも苦痛を厭へるに關らず、皆苦境を選ぶ點に於て相一致す。蓋し、彼等は或點より此の苦痛を樂しく感ずればなり。

混合感情の說明

若し感情の二元論に從ひて此等複合感情の實例を說明せんとせば、唯次の二法あるのみ。即ち、快及び苦は同時に混合することを得るものにして、その經驗の快樂分子が苦痛分子の存するに關らず、それに打ち勝つものなりと想像するか、若くは快と苦は交互に意識せらるゝものにして、或る瞬間に快と感ずるものを次の瞬間には不快と感ず、而してかの樂しき悲痛の場合には快感の方が苦痛よりも吾人の動作若くは注意を導く上に有力なるものなりと想像するかなり。

さりながら、所謂混合感情に對する此等の說明は、到底困難を免るべからず。先づ樂しき悲痛の快樂方面及び苦痛方面が交互に意識せらるゝものなりとなす說は、直ちに吾人の內省に矛盾するもの、如し。何となれば、悲哀錄并に此の如き經驗を有せる詩人、自傳家の自敍告白は、何れも混合感情を以て同一意識內に於ける反對感情の實際衝突なりとなす見解に有力の材料を與ふるを以てなり。此の衝突は極めて多方面の觀察者に依りて報告せらるゝ所にして、或は之を以て全く不可解となし、此の如きものは存在

すべからずとなす人すらあり。次に、たとへ諸種感情が同時に同一意識内に衝突し得とするも、其相反は唯意識の對象の快苦二方面間の相反のみに限るとは考へ難し。何となれば、此の種の衝突を報告する人は、常に己の好ましく思ふものが、同時に苦痛にして、又己の喜ぶ所のものが、同時に或點より蛇蝎視され、蔑視さるゝことありといふも、さりながら相反する感情の二方面が互に相消却すとなす人あらざるを以てなり。吾人は同時に諸方面より引き付けらるゝが如く意識すれども、意識事實が相消却する二方面を有することを意識することなし。吾人は寧ろ快苦二相反感情が同一の强さに於て同時に現はるゝ時は、相消却して、無に歸せんことを望む。さりながら、一般の報告は然らず。同時に現はれたる相反感情は較量すべからざるものにして、從て或る經驗が快なりといふ意味と、同時に之が不快なりといふ意味とは、全く別問題なり。此の故に『快』及び『苦』なる語は二種にあらずして、實際二種以上なる感情の傾向を蔽ふものなるを知るべし。

ヴントの三方向的分類法

六五、 最近心理學に於ては、實驗心理學の泰斗にして大哲學者たるウイルヘルムヴント (Wilhelm Wundt) は、その實驗場に於ける實驗的研究を基礎として、感情の範類に關する新說をなし、今尙感情の複合的事實に就て試査考覈の間にありといふ。蓋し暗瞻たる這個方面の解決に一大光明を與ふるに庶幾からんか。氏は精神元素論に從ひ、感情を以て幾多の相異なる元素的狀態より成るものなりとなす。即ち氏に從へば、感情は三種の相異なる方向に於て變化する複合物にして、各感情は此等三種の方向の一種若くは全三種に於ける位置に關して互に異なり。三種の方向とは (一)『快及び不快』1. Lust und Unlust (Pleasure-Displeasure series). (二)『興奮及び沈靜』2. Erregung und Beruhigung (Excitement-Depression series). (三)『緊張及び弛緩』3. Spannung und Lösung (Tension-Relief series) 是なり。感情の内には、此等三種の方向の内、殆どその一種より有せざるものなし。即ち、純粹に快不快のみにて、他の方向を有せざる感情あり。又單に緊張、弛緩のみにて、快、不快も興奮、沈靜もなき感情あり。さりながらヴントに從へば、感情の多くは、その極めて元素的なるものと雖も、同時に此等三種の性質の二種若くは全三種を有す。

二方向的分類法の假定

感情の三種の『方向』に關するヴントの立證は、固より未だ十分ならずと雖も、今此の立證を構成せる事實を考へ、又情緒錄が吾人に與ふる甚だ粗雜なる、さりながら極めて深刻なる立證を合せ稽ふるに、感情の二元論は到底此の種の現象の的確なる說明を吾人に與ふるものにあらざるが如し。さりながら、感覺と之に伴ふ感情とを內省的に分析すること困難なるを以て、感情を感覺より區別せんとする感情の說明にして、苟しくも二元論を超脫せんとするものは、現今何れも精神生活の二方面、卽ち感情と感覺とを混同するものなりとの反駁を免るゝこと能はず。蓋し、快不快は感情として何人も之を疑はざれども、快不快以外更に他の感情を立するときは、直ちに之を以て感覺なりと見做すを以てなり。

六六、さりながら、今情緒錄幷にヴントの實驗が、方法を異にして提供する事實に鑑み、之に適合すべき感情の解明を試むるは、敢て無用の業にあらざるべし。乃ち、余は感情は少なくも二個の劃然たる且つ比較的に相獨立せる方法に於て互に異なりてふ假定を立せんとす。或は終にヴントの三種說若くはそれ以上複雜なる說明の勝れるを知るに至るやも計るべからずと雖も、今は少なくも二個の方法に於て異なりとするを適當と認むるを以て、暫らく感情の說明に關する余の假定を比較的に獨立せる二個の『基線』(Dimension)に限らんとす。此等二個の基線は夫々その內に相反せる二個の性質を有す。

感情の相反傾向の二對(一)快、不快、(二)不安、安靜

先づ感情は快不快に關して異なり。卽ち、感情には快苦的基線あり。同時に感情は多少不安なるか或は安靜なるかに關して異なり。不安(Restlessness)及び安靜(Quiescente)は內省に依りて容易に觀察せられ得る一種の相反性質なれども、動もすれば運動を知覺せしむる運動感覺と混同せらるゝ恐あり。さりながら、不安の感情は運動の感覺にあらずして、經驗の價値の感、卽ちその經驗が一時的不滿(Dissatisfaction)の對象となりたる場合のその價値の感を意味するものなり。されど、安靜の感情は必ずしも『不滿』の反對なる『滿足』(Satisfaction)なる語に聯合せらるゝ感情をのみ意味するものにあらず。何となれば、『滿足』なる語の表はす安靜の感情は快樂の一種なり。然るに次に述ぶるが如く、安靜の感情は比較的に苦痛なることあれ

快不快の特質

ばなり。兎も角『安靜』なる語はよく奈の意味を表はすものなり。之より感情は此等二種の基線の何れかに關して變化するものにして、混合せざる相反感情に二對即ち四種あるが如く、諸種意識狀態に現はるゝ混合感情には、少なくも四種の重要なる種類あることを說明せんとす。

六七、 先づ快不快に就て更に考察せんに、快とは有機體が云はゞ建設せられ或は昌に振興せられ、以てその活力が一時增進する場合に起る感情にして、苦或は不快とは有機體が挫折し、活力が低減する場合に起る感情なり。即ち快不快は有機體全部の狀態を反映せんとするものなり。さりながら、活力の增減に聯關せる作用は、頗ぶる複雜にして、意識に表象せらるゝこと極めて不完全なれば、此等二種の感情は固より多少相混することあり。又快不快はそれが現在現はれて居るといふ限りに於て、意識狀態の方面或は性質をなすものにして、絕えず識野に進行しつゝある變化を助勢するといふことには關係なし。

之に反して、不安及び安靜は、特殊運動の意識には關係なきも、有機體の運動を變ぜんとする一般傾向の意識に關係する感情なり。此の故に、單に意識の上よりいふときは、此等の感情は意識狀態の變化的即ち一時的方面に關係せざるべからず（ヴントも之と同じく興奮、沈靜の感情、緊張、弛緩の感情を以て意識の一時的方面となす）。即ちやがて興味ある變化を生ずべき傾向に對しては、吾人は常に不安を以て之を見るものなり。從て期待、好奇心、恐怖、希望、猜疑の情は常に不安感情を以て着色せらる。之に反して、安靜の感情は吾人の興味を喚起すべき變化なき場合、或は起りつゝある變化に意識の向けられざる場合に起るものなり。從て過去を回想する時には、常に安靜の情を以てす。但し未來を考ふる場合は一般に然らず。『運命主義』（Fatalism）てふ複雜なる心情は、その過去に屬すると、未來に屬するとを問はず、一切事件を安靜の感情を以て見るものなり。此の故に、運命論者は未來を見ること、猶動かすべからざる過去を見ると同樣にして、その價値に於て些の相違を認めず。又安靜感情は將に睡に入らんとする時、幷に身體の永く衰弱せる場合に起り、之に反して不安感情は覺醒せる場合、若くは體力旺

盛にして此の活力を迅速有力に放射せんとする場合に起るものなり。通常自動注意と稱するもの、例へば微かなる音を傾聽する場合には、不安感情著しく、之に反して絶望して現在事物を觀察せる人の所謂受動狀態には、安靜感情著し。

不安及び安靜の感情は特殊の感覺を着色することを得べく、而して又一般に之を着色す。詳言すれば吾人は明かに感覺及びその意味を意識すると同時に、此の感覺は吾人を不安ならしむるものなりや、或は安靜ならしむるものなりやといふ、それの價値をも意識することを得。かの不安の感情を以て活動の際に吾人のなす運動の感覺なりとなすは、適當なる見解にあらざるが如し。吾人は現在經驗に不滿なる限に於て不安なり。從てその經驗を變ぜんとす。此の不滿の結果は概して運動の意識なり。而して此の運動の繼續せる間は、絶えず多少不滿にして、吾人の意識は不安の意識なり。さりながら、吾人は動きつゝありとの意識は感覺なり。吾人が絶えず不安に感じ、或は動かんと欲する、その意識がこゝにいふ感情なり。此の感情は現在狀態の價値を吾人に知らしむるものにして、不安の場合に於ては、吾人はこの價値を一時變ぜんと欲するなり。

安靜的不快と不安的不快

六八、 次に快不快の基線と安不安の基線との關係に就て考察せんに、通常、人のいふが如く、苦痛若くは不快の際には固より十分に『安靜』なること能はず。さりながら、一方に於て非常に吾人を不安ならしむる苦痛あると同時に、亦他方に於て比較的吾人を安靜ならしむる苦痛あり。肉體上の苦痛起るときは不安にして、吾人の感情は所謂反抗的感情を含有す。而して苦痛の去りたる後、尙維然明かに之を意識し、維然之を堪えがたく思ふことあり。即ち、不快感情は維然として明かなり。然るに、敢て此の境遇を變ぜんとせざることあり。これ即ち、受動的苦痛の狀態にあるものなり。又吾人は何事をもなすこと能はず、苦痛に對して何等の奮鬪心なしと、感ずることさへあり。これ苦痛と安靜感情との結合せる場合なり。此の如く不快感情と安靜感情との結合する場合の最もよき實例は、『絶望』(Despair)と稱する情緒是なり。又諸種の神經患者は苦痛と安靜との此の種の和合を告白し、

不安的快樂と安靜的快樂

之を以て全く不可解なりとなす。尙神經衰弱の不感期には此の種の幾多の實例あり。患者は非常に苦痛なれども、之に對して奮鬪せんとする何等の意識的傾向なしとなす。

次に快も亦不安的なることあり。此の場合には吾人は自己の有する所を好まざるにあらざれども、而かも此の境遇に慊らずして、不安に尙多くを求むるなり。快感の此の性質は活動的氣質及び精神狀態に於て最も著しく、これ詩人及び道德家の著作中に此の方面の觀察の多く散見せらるゝ所以なり。思ふに、此等の觀察は健全なる內省を基礎として、その上に建てられたるものなり。然るに、感情の二元論は到底完全に此等の意義を說明すること能はず。ゲーテのフハウスト（Goethe's Faust.）は惡魔と賭し、若し惡魔にして滿足なる快樂、卽ち之を得る瞬間に之を保持せんことを欲するが如き快樂を彼に與ふることを得ば、彼は惡魔に自己の心靈を委すべしと約せり。その約言に從ふに、フハウスト若し現在瞬時に對して『オ、瞬間ヨ止マレ汝ハ誠ニ麗ハシ、』といふ時あらば、これぞ此の目的の達せられたる記號なりし。而して實際惡魔はフハウストを導きてあらゆる五官快樂及び浮世の幸福を經驗せしめたり。されど、此等は皆無效にして、晚年に至り或る境遇の得達せらるゝまでは、遂にフハウストより此の報告を得ること能はざりき。フハウスト晚年のことはこゝに關係なきを以て之を述べず。

相反感情の二對と一般意識との關係

さりながら、心理學的見地よりいふときは、快樂は假令絕對的ならずとも、比較的完全なる安靜の感情と聯合することを得。此の場合に於ける快樂は滿足的快樂なり。その意識的態度はそれ以上、それ以外の何物をも求めざるにあり。此の如き狀態は到底完全に得達し得らるべきにあらず。されど、快樂に對する意識的欲求の理想的極限はこゝにあり。

六九、 快、不快及び安、不安の一般意識に對する關係は、夫々稍々趣を異にす。卽ち苦痛は頗る著しく且つ强く意識せらるゝことを得れども、快樂は苦痛の如く强く意識せらるゝこと殆ど稀なり。されど、快樂には決して强く明かに意識され能はざる性質あるにあらず。さりながら、不安は明かに安靜より强く意識せらるゝことを得るものなり。安靜の感情卽ち余が安

靜なる語を以ていひ現はさんとする感情の傾向は、固より意識に現はるゝことを得れども、大體よりいふときは、安靜は意識の存續する間、到底完全に現はるゝこと能はざるものなり。若し夫れ、安靜の感情は積極的感情にあらずして寧ろ不安の不在を意味すといはゞ、或は余の所說に悖らん。然れども、不安は如何に極端なる安靜よりも遙に積極的なる經驗なりといひたりとて、尙安靜の積極的性質を立すべき基礎なきにあらず。さりながら、不安が苦痛、或は不快と全く異なるものなること、上例に依りて明かなると同時に、安靜といふ經驗の積極的性質は、少なくも蓋然にして、快樂なる語に聯合せらるゝ性質とは全く異なるものゝ如し。

混合感情の四範類に關する詳說

一、安靜的快樂

七〇、 右に述べたる見地より考ふるに、感情の二對卽ち二基線の和合に依りて生ぜるらべき混合感情は少なくも四種あり。

第一、安靜的快樂、之は不滿に對し、普通滿足と稱せらるゝものに依りて最もよく說明せらるゝものなり。又安靜的快樂は現在瞬時の判斷力の及ぶ限りに於ては、吾人の有する感情の內、最も明かに滿足的なる感情なり。

二、不滿的快樂

さりながら、安靜は意識强度の減退と聯合する傾向を有するを以て、吾人を滿足せしむる快樂は一般に甚だ强き經驗にあらず、從て活動的人物より蔑視せらるゝを常とす。夫れ活動的人物は屢々かゝる經驗を有することなく、外部より觀察して之を以て道德上無氣力、不滿足なりとなすなり。例へば、ゲーテ及びそのフハウストの如き是なり。

第二、不滿的快樂、之は現在快樂の性質を有しながら、而も他方に於て明かに不滿的なるものなり。已に述べたるが如く、二元論は此の種の感情を置くべき一定の場所を定むること能はず。快樂は吾人の欲求する感情狀態にして、而かも之を得たりとせば、吾人は何故に之に滿足せざるか。吾人は決して不滿なるべき理由なきなり。さりながら、此の如き不滿は大抵の快樂に見る所にして、少しも珍らしからず、人性普通の經驗なり。フハウストいへることあり。

『されば願ひては得んことを急ぎ、
これを得ては更に願をおもふ』

と。吾人の見地よりするときは、かゝる混合感情は極めて自然的なり。快樂的不安感情は必ず快と共に不滿足を含有す。此の如き場合に於ける吾人の欲求は、之を觀念の語を以て定義するときは、異種の快に對する欲求なることあり。或は同種の快を增大せしめんとする欲求なることあり。或は時に現在快樂よりも寧ろ苦痛を取らんとする不滿なることあり。これ單に苦痛は不安感情が要求する活動力の使消に好機會を與ふるを以てなり。ワグネルのタンホイゼル(Wagner's Tannhäuser)はヴキーナスブルグより遁れんとする時、此の如き快樂と不安の和合を經驗しき。また

『余に對する人間世界の求望』

といへるブラウニング(Browning)のヒーローも同じく現在經驗しつゝある享樂に不滿なりき。

快樂及び不滿の此の和合は生物學上頗る重大なるものなり。何等の障礙なく自由に活動せる健全なる動物は、活力の昂進に伴ふ幾多の爽快なる意識狀態を經驗す。さりながら、外圍に對して絶えず嶄新なる調節を要す

三、苦痛的不安

るを以て、此の動物は單に快を感ずるのみならず、絶えず此の如き新調節を欲求する爲めには、その現在狀態の不完全なることを感ぜざるべからず。

第三、苦痛的不安、吾人は多くの感情に於て苦痛と不安の和合を見る。苦痛とは有機體が自らその精力を現在減消せしむる場合、若くは現在境遇が多少有機體に有害なる場合に起るものなり。即ち見るべし、不滿の苦痛に伴ふや極めて自然的なることを。さりながら、不滿は必ずしも苦痛に伴ふものにあらず、快樂にも伴ふことを得るを以て、吾人は苦痛に伴ふ不安と苦痛それ自身とを明かに區別せざるべからず。若し苦痛の原因たる有機的障礙が現存するも、それが激甚ならざる場合には、不安が苦痛を壓倒することあり。吾人の所說よりするときは、一切此の如き場合に於ては、現在感情は明かに二個の劃然たる方面を有す。即ち、現在苦痛の感情及び此の境遇を變ぜんとする不安傾向の感情是なり。感情の二元論は此の苦痛及び不安の連絡を必然的なりとし、その苦痛のみを現在狀態の性質即ち感情と見做し、不安は苦痛より遁れんが爲に吾人のなす運動の感覺なりとし、以て

兩者を區別せんとす。吾人をしていはしむれば、不安及び苦痛は共に感情の世界に入るべきものにして、兩者は互に相獨立せる別方面なりとす。

四、苦痛的安靜

第四、苦痛的安靜、或る場合には苦痛及び安靜の和合することあり。已に述べたるが如く、安靜は決して絶對的に如何なる變化をも欲せざる傾向を意味するものにあらず。意識の安靜的方面は積極的性質を有するものゝ如し。此の積極的性質はヴントの所謂沈靜の感情及び弛緩の感情と稱する經驗に依りて明かに說明せらる。比較的安靜なる感情が大なる苦痛と聯合し得ることは、絶望といふ情緒に依りて又絶望的悲痛或は肉體上の大苦痛を平然として受くることに依りて說明せらるべし。激甚にして永續する苦痛は、必ず安靜感情の著しき狀態を生ず。

比較的單一なる感情狀態

七一、以上は感情の二範類より生ぜらるべき可能的混合の四種なり。果して然らば、此等四種の混合感情の各に於て、之を構成せる感情の一方が優勢にして、他は殆ど消亡せるが如き場合あるは、決して想像し難きにあらず。その內快及び不快の優勢なる場合は、實驗に依りて特に明かなる所なり。實驗的に不意に被驗者の口に不快なる味覺刺戟を與ふるときは、暫時の間殆ど純粹の不快を感ずべし。又同じく快なる刺戟を與ふるときは、殆ど純粹の快を感ずべし。而して何れの場合に於ても、感情の他の基線は殆ど認められず。さりながら、概していふときは、此の如き不快の經驗にして甚だ强からざる場合には、被驗者が受動的なる限りに於て、一般に不安よりも寧ろ安靜感情の之に伴ふものなり。されど、不安及び安靜の感情は强度の大小に關らず、よく快不快より獨立して現はるゝことを得。而して特に所謂中性事物に對する自動的幷に受動的注意現象に於て然りとす。感情の二元論は快にもあらず又不快にもあらざる事物を稱して『中性事物』(Indifferent object)といふ。例へば、冷靜なる『知識』の對象、或は一般に極めて吾人に近親なる日常事物にして、吾人は之を意識するも、その快或は不快的性質は殆ど之を感ぜざるが如きもの是なり。吾人は此の如き事物に注意することあるべく、又實際絶えず之に注意しつゝあり。而して若し受動的に之に注意するときは、何等の努力なしに明確に之を意識し、若し幾分か努力して

純粹なる快不快

純粹なる安不安

安不安及び快不快と注意との關係

之に注意するときは、固より明確に之を意識すれど、此の場合には必ず之に對し或る現在的にして比較的に自動的なる關係を覺識す。吾人の見地よりするときは、中性事物に對する注意には、その受動的なると受動的ならざるとを問はず、必ず或る感情作用あり。而して受動的注意に於ける感情は安靜感情にして、自動的注意に於ける感情は不安感情なり。知的感與の心情、即ち問題に伴ひ知識欲を喚起せしむる感情は、不安の著しき感情にして、從て知力不完全にして完全なる知識を得る能はざる間は不滿を感ず。さりながら、此の如き場合に於て、吾人の注意は如何に自動的なるも、快及び不快の感情は殆ど之を認むること能はず。

固より普通の二元論の認むるが如く、吾人の自動的注意は亦快若くは不快なる事物に依りて喚起せらるゝことあり。即ち快幷に不快は共に吾人の自動注意を喚起する刺戟となることを得。然るに、元來注意、不注意の相異は大分感情の如何に依りて定まるものなり。若し快不快にして共に自動注意を喚起するものなりとせば、吾人をして不注意ならしむる感情は如何なる種類の感情なりや。これ普通の二元論の說明せざる所なり。吾人の見地よりするときは、自動注意は不安の感情を包含するものにして、安靜の感情は自動注意を停止せしむるものなり。快及び不快的事物が共に自動注意を喚起し得るは、此等は共に不安感情を起し得るを以てなり。自動注意が吾人の欲求する知識狀態を果成するときは、その結果は安靜の感情にして、此のものは自動注意を停止し、その結果として受動注意とは異なる不注意狀態を生ず。

上來說述せる意識作用の概觀

七二、 今や吾人は意識の諸方面中、特に現在の外圍に對する感性の諸方面を說述せり。吾人は前に意識の流を論ずるに當て、已に或る瞬間に現はるゝ諸狀態の一部に對する所謂現在注意(Attention)の主なる特徵の一を述べたりき。現在瞬時の狹隘なる識野に於て、或る狀態は强く明かに意識せらるれども、自餘の一切は不明瞭にして所謂意識の背景を構成するものなり。而して現在狀態はその背景にあると否らざるとを問はず、三個の主要なる種類に分つことを得。五官經驗、心象、及び感情是なり。此等の狀態は

分立せる事實の單なる集合にあらず。又決して特殊の練習若くは實驗の結果發見せらるゝが如き元素より成立するものにあらず。之に反して意識の現はるゝや常に必ず統一あり。此の統一内にはその時その所に區別せらるゝ差別あり。此の統一と差別とはあらゆる瞬間に於ける意識生活の分離すべからざる二方面なり。而かも兩者は相獨立し、之を歸一すること能はず。各瞬間に於ては唯その時その所に觀察せらるゝその統一とその差別とあるのみ。而してその瞬間に於ける意識の依て生ぜちるゝ條件を考ふるときは、吾人は意識生活の一方面を五官の現在活動に歸することを得。現在五官經驗と稱するもの是なり。同じく意識の條件を考ふるときは、直接的五官經驗より心象を區別することを得。最後に感情はその瞬間の直接意識に依りて他の經驗より區別せらる。さりながら、その分類は性質の散漫なると種々の瞬間に現はるゝ現はれ方の相異なるとに依りて、甚だ困難なり。上に述べたる分類は唯事實の複合を正當に解明せんとする一種の見解に過ぎず。或る點に關してはヴントの所說に從ふと雖も、稍

現在意識の分類は上に述べたる所に以て盡せりや

意識に於ける意志の位置

々氏の說を簡略せり。

以上現在意識に關する說述は已にその總てを解き盡し得たるや否や。これ當然茲に起るべき問題なりとす。蓋し、現在意識には感覺、心象、感情以外の他の種類、卽ち普通に所謂意志なるもの存せざるや、此の他の種類とは往々動性(Conation)とも稱せらるゝものにあらざるやは、尙未定の問題なればなり。

七三、 吾人は心理學的研究に於て意志の占むべき位置如何に就き數言を費し、以て此の問題に答へんとす。夫れ一切意識は必ず外圍に對する有機體の反應を伴ふものなり。感性にして少なくも此の感性を外部に表はさんとする傾向の存せざるものなし。尤も、已に述べたる如く、複雜なる禁止作用ありて此の外部表出を防遏することありと雖も、物理的にいふ時は、その禁止作用そのものは已に純然たる運動作用に外ならざるを以て、一切意識は刺戟に對する有機體の反應を伴ふものなりてふ法則は絕對的に確實なり。此等の反應は、之を客觀的に觀るときは、單に境遇に對する調節な

感覺、心象、感情と意志との關係

るのみならず、亦欲求の表出なりとも考ふることを得るを以て、一切意識は世界に對する吾人の態度の內的表示なりといふことを得べし。何を意識するも、余は必ず自己の欲求との關係上、そのものが如何なる價値を有するやを意識す。故に吾人の全意識は意志、詳言すれば世界に對する反應的態度の集合を含有すと斷ずることを得べし。

さりながら、世界に對する吾人の意識的反應は、之を分解するときは、事實上次の三種に歸することを得。即ち、事物の意識、此の事物に就て吾人のなす行動の意識、及び此等事物及び吾人行爲の現はるゝに當て感ずる快苦安不安の感情是なり。何が故に吾人は此の如く行動し、又何が故に此の如く感ずるやの問題は、後章被敎化性及び心的新生性の所に於て答へらるべき問題なり。さりながら、世界に對する現在態度の意識、換言すれば現在意志の意識中には、上に述べたる五官經驗、心象、及び感情以外何等の現在特質あるを見ず。『欲求』『焦望』『選擇』等その他凡そ簡單なる意志態度をいひ現はすに用ひらるゝ語は、皆五官經驗、心象、及び感情の三方面を有する意識作用

上述の分類は現在意識の一切要素なり

の名稱に外ならず。欲求、焦望、選擇等の條件を說明する場合にあらざるよりは、決して此等三種以外の何等の新方面を見ることなし。此等の條件に就ては、後に述ぶる所あるべし。さり乍ら、現在意識の關係する範圍內に於ては、或る事物を欲求するとは、その物のなき場合に苦痛を感じ、或は單にその物の心象のみ存在する場合に不安なることなり。或る事實に向て努力するとは、此の如き不安感情と該事物追求の爲になす行動の有機感覺に原づく緊張感覺との結合することなり。選擇をなすとは、一定事物に對して特殊の注意を拂ふ態度にして、此の場合に於ては、感情は不安狀態より漸次若くは急激に特殊の安靜狀態に變化するものなり。要するに、吾人は決して意識に於ける意志の存在を否定するものにあらざると同時に、吾人の全意識は如何なる瞬間の意識にてもその瞬間の意志の表示なりと考ふるものなり。元來意志なる語はもと意識生活の意義を倫理學的に或は內外の結果より考料して作り出されたるものにして、心理學上の術語にあらざるなり。心理學的見地より意志の現象を了解せんとせば、到底現在意識の研

究のみに依るべからず。必ず之を後章の所說に俟たざるべからず。最後に動性なる語は以上に述べざる現在意識の何等の方面を意味するものにあらず。

心的感性の研究は之を以て終れり。吾人は現在意識の研究より現在意識と以前の經驗幷に有機體の得性との關係の考察に入らんとす。

被教化性の證左は知識の爲に行幷に關係を有する事實を供給せらるるに依りて

第八章　被教化性の一般理法

七四、本書に於ては知的生活の研究を行爲に現はるゝ方面の研究より分離せざるを以て立論の方針とす。されば、被教化性(Docility)の說明に於ても、知識は如何にして得らるゝや、行爲の習慣は如何にして作らるゝやは、之を共に考察せざるべからず。外部より觀察するときは、有機體は現在の活動中に過去の經驗の結果、詳言すれば過去にその有機體に起りたる事柄の結果を表示するといふ能力によりて被教化性を證明し、內部意識の上よりいふときは、吾人の意識は何れの瞬間に於ても單に現在境遇に對する反應を意味するのみならず、現在經驗と過去經驗との關係をも示すてふ事實によりて被教化性は證明せらるべし。而して吾人の意識とは、何れの瞬間に於ても、現在事物の意識、此の事物に對して吾人の爲し或は爲さんとする行動の意識、及び此の事物に對して吾人の感ずる感情より成るものなるを以て、被教化性は常に次の三個の事實によりて等しく證明せらるべし。(一)事

物の現在知識は過去經驗の影響の跡を示すこと。(二)行爲の現在意識は過去行爲の意識に影響せらるゝこと。(三)現在感情は過去の感情によりて性質上の影響を受くること、是なり。凡そ此等の證左は絶えず意識に共在するものなるを以て、便宜上已むを得ざる場合の外、到底別々に論ぜらるべきものにあらず。而してその一に於て被敎化性を支配する一般理法は、三種の何れにも適用せらるべきを以て、先づ被敎化性を支配する最も一般なる理法を摘出し、然る後此の理法の特殊の應用を説明せんとす。

腦髓習慣の理法及びこれと意識作用との關係

七五、 前に腦髓の機能を論ずるに當て、吾人は物理的條件の方面より被敎化性の原理を説述したりき。即ち、腦髓機能は或程度迄その反復せらるゝ度數の重なるに從て、愈々易く遂行せらるゝに至るといふこと是なり。之を習慣の理法(Law of Habit)となす。今、此の理法を意識の語を以て説明するときは、次の如くいふことを得べし。即ち、已に起りし意識作用と同種の意識作用は或程度迄練習を積むに從て、愈々易く再生せらるゝことを得べく、又その再生せらるゝことと愈々多次なるに從て、反對意識作用を排除する力も愈々大となるといふこと是なり。例へば、外國語を話すこと愈々多ければ愈々易くなり、詩を吟誦することと愈々重なれば愈々易きを加ふるが如し。唯、こゝに注意を要することは、熟練の功は無限に加はるものにあらず、或程度に達すれば、それ以上熟達することなき一事是なり。

腦髓習慣の理法を意識現象に適用せんとするに當て深く留意すべきは、意識狀態の再生とは同種、即ち同範類なる意識狀態の再生を意味するものにして、與へられたる意識狀態そのものゝ再生を意味するものにあらざること是なり。腦髓機能の場合に於ては、同一腦髓機能の再生といふも敢て不可なきが如しと雖も、同一意識狀態即ち同一經驗の再生といふは、その當を得たるものにあらず。何となれば、吾人は決して再び同一意識流の內に入りて之を同一なりと感ずること能はざればなり。如何なる意識狀態と雖も、決して再生することなし。時を異にして再生するものは、唯同種同範類の意識狀態たるに過ぎざるなり。悲哀、觀念、視覺等、凡そ昨年、昨日、又は十分以前に於ける一切の經驗は、一度去て再び心理學者の所謂世界に現出す

ることなし。現在瞬時の悲哀、視覺、思想等は、唯その範類に於て以前の意識的經驗と類似するのみ。而して同一腦髓機能の再生する限りに於て相似の意識狀態も現はれ、以て以前此の腦髓機能に伴ひしと同範類の意識狀態を反復するものなり。これ腦髓習慣の理法を意識の語に飜譯するに當て加へらるべき制限なりとす。

新習慣形式の作用

七六、 習慣の理法が腦髓機能に及ぼす效果は極めて大なり。今先づ複合腦髓機能が經驗を重ぬる間に固定せらるゝに至る徑路に就て之を說述せんに、大要次の如し。腦髓機能は一般に先づ五官を通じて腦髓に傳達せらるゝ外來刺戟に依りて固定せらるゝ者なり。假りに此の外來刺戟はA B C Dなる感覺的要素を包含するとせよ。而して此等A B C Dは腦髓に於て夫々之に對應するa b c dなる反應を生ずとせよ。此のa b c dなる反應の性質は腦髓の遺傳的構造幷に此の刺戟をを受くる時までに得たる習慣卽ち既得習慣に依りて定まる者なり。若し此の刺戟が嶄新なる場合には、腦髓は通常之に對して多少慣性を呈す、換言すれば新らしき刺戟に對して一定の反應を爲すと遲し。此の慣性は刺戟が嶄新なるとの標徵なり。さりながら、此の刺戟にして度々起り、從てa d c bなる機能が度々反復せらるゝ場合には、此等機能は一般に愈々敏速に、愈々的確に、愈々容易に再生せらるゝに至る。而して多くの場合に於ては、腦髓機能は單に敏速を加ふるのみならず、度々再生せらるゝに從て、省略せらるゝものなり。始めて腦髓が嶄新なる刺戟に反應する場合には、その反應は極めて冗漫にして不必要なる要素を包含するものなり。多次經驗の結果は此等不要要素を削除し、反應をして愈々的確ならしむると同時に、愈々簡潔ならしむ。巧妙なる新習慣を獲得する場合を見よ。吾人は少しも意識的陶汰を用ひずして、漸次幾多の不要なる運動、幾多の拙技、剩術を省略するに非ずや。その何故に此の如き剩技が省略せらるゝやは、生理學上の順應の問題に關觸する複雜なる問題なりとす。さりながら、未熟なる運動は緩漫、冗長にして、習慣の獲得せらるゝ場合には、之が輕快簡潔となることは、何人もよく知る所なり。

省略

部分的作用の融合

習慣の理法が腦髓機能に及ぼす效果は之に止まらず。習慣を積むに從ひて、腦髓反應を構成せる元素的作用は互に相融合し、遂に習慣の固定せらるゝ場合には、もとの刺戟の一部分をのみ與ふれば、以て腦髓反應の全部を惹起し得るに至る。此の如くして、終に刺戟Aのみを與ふれば、以て腦髓反應abcdを組成せる元素的作用の全系を惹起し得るに至る。輕快の增進、必要なる省略、的確及び一刺戟よく全反應を生じ得るまでに元素的作用の融合すること等、凡そ此等は腦髓習慣の固定せらるゝに當て、常に目擊せらるゝ所の現象なり。運動に熟練し巧妙なる技術に熟達する場合を見よ。此の如き現象は蓋し枚擧に遑あらざるべし。

練習は同時的幷に繼時的機能を融合す

元素的機能の融合は複合習慣の獲得上極めて重要なるものにして、同時的腦髓機能に於ても、繼時的腦髓機能に於ても、行はるゝものなり。技藝に熟達するに當て、最初若し夫々適當なる刺戟に依りて隻手或は雙手の種々の指を導き、以て此等を同一運動に共働せしめたりとせば(例へば裁縫、編物、音樂の練習に於けるが如く)、此等を支配する腦髓機能は互に相融合し、遂に

聯合の理法とは習慣の理法の精神の方面よりいひたるものなり

極めて、簡單なる一刺戟のみにても以て全動作に必要なる一切の同時的運動、興奮を喚起し得るに至るものなり。例へば、音樂を學ぶに當て、最初種々の指は別々の刺戟に依りて導かれ、以て夫々諧音の演奏に必要なる行動をなすものなれど、熟達したる音樂家にありては、樂譜を一瞥するや、忽ち同時に動かすべき一切の指の位置を定め、誤りなく諧音を演奏するが如し。繼時的機能に於ても同樣にして、即ち一聯の動作より成る運動作用ありて、此等動作が習慣の結果相融合するときは、爾來此等動作の最初の一を喚起する刺戟さへあれば、此の動作そのものが次の動作を惹起する刺戟となり、此の如くして最初の刺戟及び之より生ずる運動作用、知覺作用、中樞作用以外、何等の前驅なくして動作の全系を完成することを得るに至るものなり。

七七、習慣の理法は、之を意識の上よりいふときは、所謂觀念聯合の理法(Law of Association)是なり。腦髓作用が習慣となりて反復せらるゝ場合には、之に伴ふ意識狀態は或程度まで常に相類似するものなり。その互に相類似する限りに於て、此等意識狀態は直接に習慣の理法を說明す。今假りに

同時的幷に繼時的聯合

腦髓機能a b c dが始めて起りたる場合に、意識狀態1 2 3 4が之に伴へりとせよ。此のa b c dなる腦髓機能が再生せらるゝ場合には、1 2 3 4に相似する1′ 2′ 3′ 4′なる意識狀態現はるべし。若し又a b c dが同時的機能にして、從て1 2 3 4が同一意識統一內に於ける同時的差別なる場合には、該機能の再生に伴ふ意識狀態1′ 2′ 3′ 4′も亦同一意識統一內に於ける同時的差別なり。從て意識狀態の聯合に就て次の理法を立することを得べし。卽ち、同時的又は繼時的に聯合せられたる意識作用の一個若くは數個に相似せる意識狀態が現はるゝ場合には、此の一個若くは數個に聯合せる自餘の意識作用に相似せる意識狀態も亦現はるゝものなりといふこと是なり。此の故に、例へば1 2に相似せる狀態1′ 2′現はるゝ場合には、3 4に相似せる狀態3′ 4′も亦現はるべし。恰も腦髓機能に同時的又は繼時的聯合の理法あるが如く、精神作用の間にも同時的幷に繼時的聯合の理法あり。此の如き精神聯合の實例幷に之と腦髓習慣との關係は、一聯の語を諳誦する場合に常に現はるゝ所にして、吾人が課業を復習する場合は卽ち繼時的聯合の原理を說明するものなり。又此の如き觀念聯合は、例へば鍵を鍵眼に入るゝ場合にも起るものにして、此の場合には鍵眼、鍵の形狀、及び位置等の觀念は同時的聯合をなすものなり。さりながら、精神聯合の事實は必ずしも絕えず腦髓習慣の事實と幷行するものにあらず。繼時的動作が極めて敏速となりたる場合、或は同時的運動機能が極めて密接に相融合したる場合には、意識狀態は最早一々此の複雜なる腦髓機能に伴はざるなり。卽ち、敏速なる繼時的動作に對して唯一個の意識狀態のみが伴ひ、複雜なる同時的機能に對して唯一個の觀念のみが伴ふことあり。例へば、書字に熟達したる人が自己の姓名を書く場合には、最早如何にして各字を書くやてふ意識は全く念頭に上らざるが如く、又音樂家が諧音を打つに當ては、唯如何に諧音を響かしむべきやてふ意識のみありて、最初彼が音樂を學ぶ際に注意したりし指の同時的調節に關する意識は、最早全くその跡を留めざるが如し。

腦髓習慣の事實と精神聯合の事實との不幷行

七八、 意識作用が一々腦髓機能に伴はざるは、正に愈々複雜なる心理作

精神作用が一々複雜なる腦髓作用を代表せざることの效果

類似聯合

用が果成せらるゝ所以にして、例へば吾人が唱歌を覺ふるが如きもその一例なり。此の場合には、言語に關係する腦髓作用と、樂曲に關係する腦髓作用とありて、此等兩作用は幾分か相孤立せるものなれど、唱歌を歌ひ得る時には、兩者は已に相融合す。已に兩機能は相融合し、而して樂曲と言語とは共に意識に表象せらるゝを以て、茲に樂曲と言語との精神的聯合を生ず。此の場合に於ては、精神的聯合は固より一々腦髓機能に伴はずと雖も、頗るよく腦髓事實を代表するものなり。然るに、今全く前後の關係を異にせる他の場合に於て、以前に聞きたる曲の前者とは異なれど、後者とは或點に於て、例へば曲調の二三に於て、或は和諧音に於て、或は韻律又は唱ひ方の如き極めて微細なる性質に於て、相類似する音曲を聞くことあり。此の如き場合に於て、僅に原曲と相似せる音曲卽ち後曲が、前曲幷に之に聯合せる言語を思ひ起さしむることあり。又此の如き『類似聯合』(Association by Similarity)は關係の尙一層疎遠なる場合にも起ることあり。例へば、今日他人の顏に現はれたる或表出を見て、昨日吾家にて聞きたる言葉を想ひ起すことあり。

類似聯合は習慣の理法に歸することを得

而してよく吟味すれば、此の表出は家族の一人の常になす表出にして、此の言葉は卽ち此の人の口より昨日出でたるものなることを知るが如き是なり。凡そ此の如き事例に於て、意識に表象せられたる聯合作用は、未だ曾て意識に共現せられざりし事實を聯結するものゝ如し。從て此の如き場合に於ては、意識的聯合は一見習慣の理法に從はざるが如く思惟せらる。

さりながら、一度意識狀態の條件たる腦髓機能に想到するときは、よく之を習慣の理法に歸說することを得べし。所謂『類似聯合』を喚起する新經驗は單に習慣的なるのみならず、他の習慣の內にも混入せる元素的機能を包含せる機能を喚起す。此の機能は、他の習慣の中に於て、更に他の同時的若くは繼時的機能と融合せるを以て、從て一切此等の習慣的機能を喚起す。而して此等習慣的機能の一度喚起せらるゝや、必ず意識作用を伴ふものにして、此の意識作用と之を喚起せしめたる意識作用との類似は、聯合のなされたる後始めて知らるゝものなり。此の如くして、今聞きたる音樂の內には嘗て吾人の聞きたる和音或は音韻あり。此の和音或は音韻の腦髓伴象

たる元素的腦髓機能は、曾て或歌曲を學びし際に起りたる腦髓機能の一部分なり。故に此の元素的機能は曾て之に融合したる機能、即ち習慣の全部を喚起し、茲に始めて前に學びし音曲幷に之に聯合せる言語を意識に再生す。他の例に就ても同樣に說明することを得。即ち見るべし、習慣は以前に一度も共現せざりし意識的事實を聯合せしめ得ることを。

聯合作用は精神元素を結合するものなりとの說

七九、されど、精神元素論者殊にヴントの一派は上に述べたる作用に就て說を爲して曰く、凡そ精神的聯合は總意識狀態相互の間に行はるゝものにあらずして、此等總狀態を構成せる元素的精神作用の間に行はるゝものなり、即ち或精神狀態中に存する元素的精神作用が同時的若くは繼時的聯合によりて他の精神狀態中に存する元素的精神作用を喚起し、以て兩者の聯合は行はるゝなり。此の如くして、未だ曾て意識に共現したることなき總意識狀態が、時に相互の精神元素間に行はるゝ聯合に依り、互に相聯合するが如く見ゆることあり。

此の說の批判

若し彼の荒唐無稽なる精神『元素』に代ふるに精神作用の條件たる元素的腦髓機能を以てするときは、習慣の理法に依りてよく精神聯合の現象を說明することを得べし。而してよく精神元素論の困難を脫することを得べし。此の見地よりするときは、各元素的腦髓機能例へばaは種々の複合習慣中の幾多の他の元素的腦髓機能と習慣的に融合することを得るものにして、aに伴ふ一なる意識狀態が現はるゝに當て、若し此の意識狀態がaの入れる他の腦髓習慣を喚起し得る場合には、此の腦髓習慣は之に伴ふ意識狀態を生ずるを以て、茲に一なる意識狀態と此の意識狀態との聯合を生ずるなり。此の故に、諸種意識狀態相互間の聯合は一般に極めて精微に行はるゝものにして習慣の理法の粗雜なる適用に依りて說明せらるゝが如き粗大なるものにあらず。

然るに、精神元素論の主張するが如く、純白意識狀態は幾多の分析的意識狀態より成るものとせば、此の分析的意識狀態を更に幾多の單一なる狀態、即ち元素的腦髓機能に對應する意識狀態に分析し、成る可く現在意識せる精神作用相互間の習慣的聯絡に語を假りて聯合を說明せんとするに至る。

聯合の種類に關する舊說

即ち、他人の顏の表出は現在意識中の聯合分子にして、之と家人の顏の表出との相似が、直ちに習慣的聯絡に依りて、昨日語られし言葉を暗示せりといはん。これ實にヴントの精神聯合說の基礎をなせる實驗的眞理なりとす。

八〇、 聯合作用は通常二種の形式に於て現はる。所謂接近聯合(Association by Contiguity)及び類似聯合(Association by Similarity)是なり。接近聯合とは、例へば鞍を見て馬を想ひ起し、或人を見て常にその人と同行せし人を想ひ起すが如きをいひ、類似聯合とは、已に屢々述べたる所にして、例へば畫像を見て人を想ひ起すが如きをいふ。聯合作用に關する舊說は往々此等二種の作用以外更に他の聯合作用を立することあり。例へば、對稱聯合(Association by Contrast)と稱し、結婚に依りて葬儀を想ひ起し、善人を見て惡人を想ひ起すが如き場合を論ずるものあり。さりながら、此等は畢竟接近聯合或は類似聯合に依りて說明せらるべきものなり。又因果聯合(Association by Cause and Effect)といひ、例へば外科醫療器械を見て手術を想ひ起し、雷雲を見て雨を想ひ起すが如き一種の聯合を區別するものあれど、これ亦單に接近聯合の一例たるに過ぎざるなり。凡そ此等の聯合形式は皆同一の根本作用、即ち習慣の理法の異例に外ならず。これ上來說述する所に依りて明かなる所なりとす。

聯合の一般理法は與へられたる場合に可能的聯合の何れが實際なるやを決定するはずなり。

八一、 以上は聯合の理法中、唯その必ず現はるべき傾向を述べたるのみにして、決して意識狀態の繼時的若くは同時的聯合を決定する條件を說き盡したるものにあらず。夫れ凡そ何れの瞬間に於ても、吾人の現在意識には必ず過去に於て種々の他の作用と聯結したる腦髓機能の伴ふものなり。從て此等諸作用の何れが實際に聯合せられ、腦髓或は外部行爲に於て優勢を占むるに至るやは問題なり。例へば、如何なる語を話すとするも、此語には必ず過去に於て幾多の他の機能と聯結したる腦髓機能の伴ふものなり。何となれば、吾人は種々の場合に此の語を用ひ、從て種々の他の機能と之を聯結したればなり。從て習慣の一般理法よりいふときは、此の語は之と密接に聯合せられたる或機能を喚起せざるべからず。而かも習慣の一般理法は他の如何なる機能、例へば他の如何なる語或は心象を伴ふ如何なる腦

聯合の道を決定する因子反復の度數

髓作用が起らざるべからざるやを決定するものにあらず。從て此の語の精神的聯合は時に依りて大に異なることあり。而かも其等は何れも皆聯合の一般理法に歸せらるゝことを得るものなり。例へば『晩鐘』なる語は如何なる語を想ひ起さしむるやといふに、若しグレーのエレジー(Gray's Elegy)を反復せんとするときなりせば、忽ち『別れ行く日の名殘を告げ』てふ句を聯想し、若し近代の詩片を回想するときなりせば『今宵鳴らさじ』てふ句を聯想するが如し。その他吾人の聯想は尙ほ如何樣にも變化することを得。

今或現在經驗の場合に於て、如何なる腦髓機能が最も優勢を占むるやを單に習慣の一般理法より預定せんとせば、唯最も屢々聯合せられたるものが優勢を占むるに至るといふの外なし。實際『晩鐘』なる語は、常に之に慣るゝ人の心に於て、何等かの必然的なる、換言すれば離るべからざる聯合を有せざるべからず。而して此の聯合は過去に於てその習慣が反復せられたる度數に依りて定まるものなり。他の條件を補足せざる限り、習慣の理法は聯合の優先に就て此以上何等の說明を與ふること能はず。

聯合の道を決定する因子鮮明

最近

八二、然らば、聯合の優先は反復の度數以外、如何なる條件に依りて定めらるゝものなりやといふに、先づ鮮明(Vividly)に經驗せられ聯結せられたる精神內容は聯合せられ易し。腦髓習慣の語を以て之をいふときは、著しく中樞條件を變化したる機能は永續し易く、又印象の深き爲め再生せられ易し。更に換言すれば、習慣的傾向の結合力は反復の度數に依りて定まるのみならず、その習慣の作らるゝ際に與へられたる中樞印象の强度に依りても定まるものなり。されば、深き印象を與ふる結合なれば、之を經驗することと一回にても、以て必然的聯合の習慣を固定することを得。さりながら、聯合の優先を定むる條件は、反復の度數と印象の强度とを以て終れりとせず。即ち、最近に(Recently)經驗せられし習慣的機能は、現在機能の方向を定むる上に與て力あり。暫らく外國語を話し居たるときは、長く止め居たる後始めて之を話す場合よりも、易く話すことを得るものなり。此の場合に於ては、吾人の現在聯合は一部分直く以前の聯合の性質に依りて決定せらるゝものなり。何事も暫らく爲せば、その後は易く進行するものなり。暗誦文の

朗讀に行詰まりたる場合に、その次の一語丈を告げらるゝも尙その後を續け能はざることあるも、己の忘れ居たる一句を助言せらるゝときは、その結果自餘の全文を完全に朗讀することを得ん。此の故に、現在聯合の路は、現在意識に現はるゝ精神狀態の聯合力に依りて定めらるゝのみならず、最近に意識に現はれたる精神狀態の聯合に依りても定めらるゝものなり。此の事實を腦髓機能の語を以て說明するときは、各腦髓機能は直ぐ次の機能の路を開くのみならず、或期間內に起る機能にも路を開くものなり。從て或瞬間に起り得る聯合の內、最近の聯合に依りて助けらるゝ聯合、最も優勢となるが如し。

聯合の道を決定する因子一般感情狀態

八三、 さりながら、聯合の路は以上の外、尙他の複雜なる諸作用に依りて定めらるゝものなり。例へば、その瞬間に於ける一般感情狀態の如き是なり。卽ち、甲の氣分の時には甲種の事物を思ひ起すものにして、換言すれば此の場合には甲種の聯合系が一切他の聯合系を超えて優勢を占むるものなり。氣分一度變ぜんか、聯合系も亦從て變ず。されば、ゼームスは情緒の攪亂、例へば船暈の場合に起るが如き情緒の攪亂が、聯合の進路に及ぼす影響を例證し、以て此の關係を說けり。さりながら、情緒そのものは腦髓の一般的條件が諸習慣系中の一を優選する上に何等の指導を與ふるものにあらず。

腦髓の現在態度

吾人は先に腦髓の『態度』と稱するものに就て述べたり。恰も相聯脈せる轉轍器の一大系統を有せる大停車場に於て、或場合には或一群の軌道のみ開かれ、他は皆閉鎖せらるゝが如く、腦髓は唯此の關係を無限に複雜ならしめたるものに外ならずして、卽ち或場合には唯或一聯の連枝錯綜せる機能にのみ聯合の通路は開かれ、他の聯系に屬する機能は皆腦髓の此の現在『態度』より除外せらるゝものなり。例へば、講義中は或一聯合系のみ優勢にして、此の聯合系は、教室中に起る出來事の爲多少は變化せらるゝことあれど、講義の終るまで決して全然變化せらるゝことなし。講義終らば、腦髓は忽ち他の『態度』をとり、講義中には易く出でし觀念の連續も、今は容易に之を想起すること能はざるに至る。而して此の腦髓『態度』は屢々氣分の變化に伴

腦髓態度と氣分との關係

外圍の腦髓態度に及ぼす影響

ふて變化するものにして、換言すれば腦髓『態度』の種類は氣分の種類に依りてよく代表せらるゝものなり。從て如何なる氣分のときには如何なる事項を最もよく考へ得るやを知ることを得。さりながら、又腦髓『態度』の狀態幷にその變化が氣分幷に氣分の變化に依りて能く代表せられざることあり。此の如き場合には、如何なる聯合の路が優先を占むるやを豫知すること能はず。唯結果より之を推知するの外なし。

外圍が腦髓『態度』に及ぼす影響は特に著しき者あり。或場所に於て或種の聯合を起したる事物或は觀念が、他の場所に於て現はるゝ場合には、前と全く異なる聯合を生ずべし。多數民衆の興奮せる場合に起る現象所謂『一揆』の現象)に於ては、聯合作用の異常は特に明らかなり。例へば、フートボールの仕合に於て負傷したるものありとせんか、若し通常の場合に於て婦人が人の負傷を見たるときは、忽ち優しき動作、同情、若くは恐怖の念を聯合すべき筈なるに、興奮せる場合には敵手の負傷を見て唯狂喜の念と敵軍の敗北を望む念とをのみ聯合するが如し。彼の佛蘭西革命に於ける民衆の興

聯合作用と神經衰弱

奮は、之をその心理作用よりいふときは、當時の社會狀態が生じたる腦髓習慣の變化にもとづく觀念及び行爲の異常的聯合より成るものなり。此の如き現象は大に聯合の一般理法の整準を攪亂せんとす。思ふに、此の如き瞬間に喚起せられたる習慣は、遠く幼時に作られたる腦髓傾向、或は平時に於ては深く背景に隱れつゝある活動に、十分なる基礎を有するものゝ如し。それ以上、吾人は之に就て何等の說明を與ふること能はざるなり。

最も多く聯合作用の範類を變化せしむる一般的腦髓條件中、急性神經衰弱の條件、幷に多くの點に於て之に等しき慢性神經衰弱の條件はその著しきものなり。獨逸の心理學者にして又精神病學者たるクレーペリン(Kraepelin)は、その實驗場に於て實驗的に此の種の作用を研究したりき。即ち急性神經衰弱に於ては、聯合は支離滅裂となり、恰も激烈なる神經錯亂に伴ふ譫妄に於て觀察せらるゝが如き狀を呈す。言語上の聯合に於ては、合理的聯合をなすべき場合に、韻律的、兩意的聯合をなし、算數上の聯合に於ては、數字を加ふるに要する習慣廢弛して屢々誤謬を生ず。此の如き現象は常人

の日常生活に於ても幾分か存するものなり。實驗場に於ける實驗は之を擴大し、通常ならば觀察され能はざる程のものをも、よく明示することを得。此の如くして、神經衰弱の現象と夢中狀態に於ける分裂現象との間には心理學上の聯絡あることを知るべし。

第九章　被教化性

(い)　知覺及び動作

立論の一般方針

八四、　習慣の一般理法は被教化性の全部を通じて到る處に表現せらる。さりながら、その結果は精神現象の範類に隨つて種々相異なり。而して此等諸種精神現象の何れの場合に於ても、過去の經驗が意識の現在狀態幷に動作の現在傾向を變化する方法如何を說明する現象あり。吾人は出來得る限り此等兩方面を幷述し以て說明の便宜上已むを得ざる場合の外は、知的生活卽ち事物の意識に關する方面と意的生活卽ち動作の意識に關する方面とを分たざらんことを期す。

知覺と行動との一般關係

八五、　外界事物が感官を刺戟するときは、此の感官及び之に對應する腦髓中樞部に複雜なる興奮を生ず。此の興奮は通常運動中樞に傳はりて運動を生ずる者にして、此の運動の最初は腦髓の遺傳性卽ち所謂本能に依り

てなさるゝものなり。さりながら、此の本能は度々起り來る種々の刺戟に依りて反復變化せられ、終に動作の獲得習慣となるに至る。而して之に伴ふ意識は、その簡單なる限りに於て、而して度々現はるゝ事物に對する直接調節の習慣に依りて決定せらるゝ限りに於て、之を此の事物の知覺(Perception)とゝふ。

嬰兒に就ての說明

今、比較的簡單なる例を擧げて之を說明せんに、既に『把握』時代に達したる初生兒は、光澤ある物體に着目し、之を握り、之を取り、且つ之を口に運ぶものなり。此の動作は視、觸兩樣の複雜なる五官刺戟に依りて決定せらるゝものにして、動作そのものは一聯の運動より成る。即ち、その內には物體に眼を集中する作用あり。之は各眼球を明視の位置に置き、且つ兩眼筋肉の共働に依りて視線を集一するとに依りてなさるゝものなり。此の如く、兩眼が恰も一個の器官の如く共働するは、夙に遺傳的傾向を練習したる結果なり。次に又物體を握る動作あり。之は初生後數月の間に徐々に發育する遺傳的傾向が、育化を受けて出來たる複雜なる運動作用なり。物體を見て次に之を握取する場合には、視覺印象は一聯の運動を經て觸覺印象の獲得に到達するものなり。小兒が手を伸ばして物體を握取せんとする場合を見るに、恰も彼は握取以前に之を握取したる場合に起る感覺如何を豫想する、換言すれば不安的熱望の情と共に心象を有するが如き觀あり。此の心象は以前に此の小兒が或物を握りたる場合に得たる觸覺經驗と相似のものなり。而して遂によく之を握取したる場合には、種々の感情及び恐らくは心象をも經て、之を口に入れたる際に得る意識に到達す。

此の如く、精神の外部表出に於ては一聯の運動あり。此等の運動は何れも遺傳的本能に過去の經驗が加はりて出來たる習慣を表出するものなり。此の外部表出の內面、即ち該兒童の心裡には、一部五官印象に依りて、一部聯合に依りて決定せらるゝ意識狀態の連續あり。是れ吾人の極めて容易く想像し得る所なり。即ち小兒が光澤ある物體を見る場合には、同時に或心象及び感情を聯合す。此の心象及び感情は曾て或物體を見且つ握りたる場合に經驗したるものと相似のものなり。此の同時聯合の初期より漸次

成人に於ける知覺と行動

把握の後期に進むに從て、小兒は順次に此の物の視覺、觸覺、味覺等を知覺す。さりながら、最初此の物體を見たる時、既に同時的聯合に依りて此の物に關する觸覺心象、筋肉運動心象、及び恐らくは味覺心象をも聯合するものにして、此の如くして旋がて意識の事實となるべきものを豫想し、且つ之を熱望するものなり。換言すれば、此の物の視覺は、小兒が此の物に心を引かれ且つ此の物が觸覺及び味覺の對象となるべきものなることを豫知する導火線となるものなり。而して之と同樣に、已に此の物に觸れ又此の物を味ひたるときは、此の知覺が導火線となりて更に他の心象を聯合し、此の心象の實現に向て進むものなり。蓋し、小兒は此の物體を棄てゝ他の事物に心を移す迄、決して之に就ての實驗を止むることなければなり。

此の假定的分析は恐らく兒童の心意に現はるゝものとして吾人の想像する所なり。蓋し、醒覺活動せる兒童は暫時自己の感覺せる事物の研究に著しき興味を示すものなればなり。

八六、 通常吾人が事物を知覺する場合には、兒童の示すが如き著しき感情なく、又感覺上の試驗をなすことも兒童の如く盛ならず。從て吾人の知覺は感官の刺戟さるゝ場合に直接意識に現はるゝ純然たる知的事實にして、感情及び運動の意識と混ぜらるゝこと、兒童の場合に比すれば、極めて少なきものなりと、思惟せらるゝ場合少なからず。さりながら、吾人知覺の今日ある所以を推究するときは、吾人の感官が今日或事物に關して吾人に示す所は、單に此の事物に就て吾人の知り或は知り得る知識の一小部分のみならず、把握時代に於ける複雜なる作用或はそれ以上更に複雜なる幾多の作用を經て獲得せられたる該事物の全意義をも包含するものなるを知るべし。或事物に關する吾人今日の知覺は、此の事物に關する過去經驗の略歷摘要ともいふべきものなり。吾人は種々の見地より、屢々此の物を握り、或は此の物に近づき、或は此の物を考察したるを以て、又此の物は屢々感官の運動を促がし、或は之を抑制したるを以て、又此の物は屢々安不安或は快不快の感情を喚起したるを以て、又吾人は屢々此の物に對する運動の結果を經驗したるを以て、凡そ此等一切の理由に依り、吾人今日の五官經驗は今

日それが有するが如き意義を有するに至りしなり。吾人は月、遠山の如き未だ曾て吾人の把握したることなき遠隔の事物を知覺することを得。月、遠山の如き事物は曾て吾人の把握したることなきものなりと雖も、而かも此等は過去に於て幾多の行動を吾人に喚起したることあり。而して吾人は一々その結果を經驗したり。又吾人の知覺する事物が嶄新なる場合には、之に類似せる事物が屢々吾人の運動を喚起したることあり。而して此等の運動は常に感情を伴なひ、又常に定まりたる結果を生じたり。凡そ此の如き經驗の結果が、今日此の事物の瞬間的知覺に於て、摘要略敍せらるゝなり。

されば、吾人が事物を知覺する場合には、吾人の意識には少なくも此の物の五官經驗が取り敢へず吾人の注意の上に强ふる所の內容あり。又吾人の意識には、一般に此の物が吾人に喚起する複雜なる運動傾向に對應する運動觀念あり。何となれば、知覺は感官の調節に伴ふものにして、此の調節は、假令微弱漠然たりとも、必ず意識に反射せらるればなり。且又、知覺されたる事物は、暫らく之に注意するときは、單に感官の調節運動のみならず、過去に於て此のものに對して爲したる種々の行動を多少漠然と想ひ起さしむるものなり。

知覺に伴ふ感情

暫らく小刀を眺むるときは、切截作用を想ひ、暫らく犬馬を熟視するときは、之を愛撫せんとするか、或は之を避けんとすべし。又步行中、邊石の前に横はるを見るときは、之に運動を調節し、課業時間或は講義の終鈴鳴るときは、その際なすべき事柄を意識すべし。而して又暫らく或事物に注意するときは、此の事物に對する動作の結果を想像するものなり。卽ち、銳利なる小刀を眺むるときは、單に切截作用を想ひ起すのみならず、その切れ味をも想ひ起し、重きものを見るときは、之を持ち上ぐる際に感ずる勞力を豫想し、又藥壜を見るときは、その不快なる味を想ひ起すが如し。

親昵の感情

八七、 又他の記憶如何に關らず、知覺されたる事物は、暫らく之に注意するときは、必ず少なくも一種の感情を喚起するものなり。若し此のものが親昵のものなれば親昵の感情を生ず。『親昵の感情』(Feeling of Familiarity) は

近來二三の心理學者に依りて大に論究せられたる所なり。此の感情は通常熟知せられたる事物の知覺に伴ふものにして、概して云へば安靜の感情なり。而して他の原因より起り來る不快感情なき限りは幾分か快なり。長く親昵なる事物に接せざる場合、例へば外國に居る場合には、故國のものの大に懷かしく思はるゝものなり。而して愈々歸國して故山を眼前に見るときは、通常ならば何等の感情をも起さゞるものも、歸國の歡びの繼續せる間は、極めて愉快に感ぜざらるゝものなり。此の感情は知覺の意識の他の特質が殆ど全く不明瞭なる場合に、極めて微かに知覺物を着色することの少なからず。又此の感情は、何時如何なる場合に此のものを見たるやを全く想ひ起すこと能はざる場合にも、現はるゝことあり。又此の感情は確かに吾人に親昵ならざるものに變態的に伴ひ、吾人をして何となく前に之を經驗したるが如き感を起さしむることあり。是れ或種の人士の屢々經驗し、困迷する所なり。その原因に就ては今尚不明に屬すと雖も、思ふに中樞の障礙に起原を有し、疲勞若くは神經衰弱の症候として多少の價値を有するものゝ如し。而して此の如き場合に於ては、親昵の感情は却て反對感情を生じ、同時に又屢々不安、煩悶の不快感情を生ずるものなり。

要するに、親昵の感情は通常固定的腦髓習慣の興奮に伴ふものにして、此等の習慣が實際に喚起せらるゝ容易さに關係を有するものゝ如し。此の如くして、知覺作用の此の意識方面は腦髓習慣と明瞭なる關係を有す。

八八、 吾人の所謂事物の知覺とは、以上の特性を有する腦髓作用なり。要は現在五官興奮が直ちに之と同樣なる過去經驗に依りて養成せられたる既設運動習慣の意識を聯合するにあり。此等の習慣は極めて多種なり。而して外物によりて喚起せられたる意識は、此等の習慣と極めて多樣なる關係を有す。此等の習慣は長時間を要し種々の複雜なる意識と聯合せられたる動作に依りて徐々に作られたるものなり。知覺は比較的に瞬間的のものにして同時聯合の實例なり。而して又比較的に單一なるものなり。然りと雖も、該事物に關する過去の運動習慣なくしては、到底なさるべきものにあらざるなり。若し暫く之に注意するときは、知覺は此等習慣の二三

知覺と行動との關係の實際的效果

の明かなる意識に移り、而して又之を實現するに至る。何となれば、或る事物に注意するときは、吾人は之に近づき、之を握り、之を指し、之を名稱する等、その他吾人の知覺は此の物に對して起るべき感情及び行爲の全系を包括する可能的意識の斷片に外ならざることを示すを以てなり。

上來說述せる所は、明かに實際上に應用せらるべし。即ち、知覺力を養成せんとせば、先づその行爲を訓練せざるべからず。何人と雖も行爲の訓練に依りて豫習されたる以上を見ること能はず。吾人は過去に於て之に反應することを學ばざりし何物をも觀察すること能はざるなり。知覺力の養成は、實業の修得と等しく、之を實踐に待つべきものなり。而して是れ實に製圖、實驗、作業等の如き一切技師が、近來知覺力養成の爲めに絕えず用ひらるゝ所以なり。技師、藝術家が斯業に關する事物を能く觀察するは、自ら其作業に熟練せるが故なり。而して未熟なる旅行家が、外國に於て得る所なく、唯困亂迷惑に苦しみて歸るは、如何に觀察すべきやを知らざるが爲めなり。

旅行團體の仲間に入りて自然の美、藝術の奇を探らんとする尋常の旅行者は、先づ旅行案內或は案內者に就てその說明を見聞し置くを常とす。これ心理的には或はそれにて十分なるべきも、凡そ此等の案內書及び案內者は唯三角塔或は絕壁の高さの尺數、或は此等の奇觀のありふれたる讚辭の如きお定まり文句を敎ふるのみなれば、該事物に對する他の觀察法を知らざる旅行者は、唯其處に行きたり、而してその形狀を見、そのお定まり文句を繰り返へせりといふ記憶以外、何等の得る所なかるべし。此の如き旅行者は唯己の携ふる所を持ち歸るのみ。思ふに、是れ知覺作用の基礎たる習慣に乏しきが爲めにして、此の習慣に乏しきときは、何人と雖も免れ得ざる所なり。旅行に依りて新習慣を作り、此の如くして漸次奇蹟をありの儘によく觀察し得るは、獨り十分なる時日を有する旅行者のよくする所なり。

第十章　被教化性

(ろ)　類化作用

類化、分化及び被教化性の社會的方面

第一、類化

八九、 習慣の一般理法が、一切高等知的作用幷に意的作用の基礎として、之を支配する方法に就ては、更に詳說する所なかるべからず。而して之が爲には習慣の編制せらるゝ方法、幷に此の如き編制を決定する內外條件の、三方面を考察せざるべからず。今第一の方面は次の如く云ひ現はすことを得べし。即ち、新習慣は舊習慣に類化(Assimilate)せらるゝ傾向ありと。此の原理の結果は、意識界に於ける一切の新事件は聯合の作用に依りて已に起りたる舊意識的事件に類化せらるゝ傾向あり、といふにあり。更に特殊なる結果は、吾人の知的生活とは舊觀念の語を以て新與件を解釋すること に外ならず、てふ事實に現はる。又之と幷行せる特殊の結果は、新行爲はなるべく舊習慣を變ぜずしてその上になされんとする傾向あり、といふ事實に現はる。個人生活幷に社會生活に於ける保守主義は總て此の原理を說明するものなり。

第二、分化

高等なる知的生活幷に意的生活の第二の方面は、次の如くいふことを得べし。即ち、精神の發達するに從ひ吾人の行爲は單純齊一より絕えず分化(Differentiation)に向ふ傾向ありと。此分化は前に述べたる類化と衝突するものにあらずして、之に平行するものなり。又同時に、同一理由に依り、吾人の意識は發達するに從ひ、愈々分析せられ、愈々差別せらるゝ傾向あり。精神生活を研究するに從ひ、純白なる意識變じて分析的意識狀態の之に代はるものなることは、已に屢々說明せる所なり。心理學の存在そのものは實に精神の發達に伴ふ此分化の極端なる實例なり。さりながら、精神の分化は獨り心理學者にのみ存するものにあらず。精神の高等なる發達ある所、必ず此の作用あり。固より此の作用は先に腦髓習慣の一般理法を說くに當て述べたる融合の理法と衝突するものにして、又之に依りてその發達を制限せらるゝものなり。何となれば、腦髓機能が習慣的となるときは、元素的

第三、被敎性の社會的方面

作用の融合に依りて極めて迅速となり、爲に意識作用は最早一々之に伴はざるに至るを以てなり。さりながら、意識作用の之に伴ふ範圍内に於て、各人の意識は絶えず分化する傾向あり。

高等意識作用の第三の方面は到底眇たる心理學概論の能く說き盡し得べき限にあらず。されど、亦全く之を觀過すること能はざるなり。人類の高等なる習慣幷に之に伴ふ意識は主として社會的影響に依りて決定せらるゝものにして、吾人の行動は他人の行動の模倣なるか、然らざれば之に對する反抗の精神に出づる者なり。從て此の第三の原理は次の如くいふことを得べし。即ち、吾人の重要なる意識活動幷に意識狀態は、皆社會的條件のもとに起り、社會上の重要なる刺戟に對する反應にして、又社會的に有效なる人格の構成に導くものなりと。此の原理の大意は後章に於て之を明かにせん。

以下右の順序に從ひて此等三種の原理を講述し、以てその如何に高等精神生活を影響するものなるやを示さんとす。而して本章に於ては頭書の題目に從ひて、先づ類化作用を說き、然る後、章を追ふて他の二題目に移らんとす。

新習慣の舊習慣に類化するは習慣の理法の結果なり

九〇、 先に習慣の一般理法を述ぶるに當て、吾人は刺戟ABCDが腦髓を影響する場合を想像せり。又此等の刺戟に對する腦髓反應は夫々abcdなる形を取ることを想像せり。而して此等abcdは習慣の結果互に相聯合し、遂に前の刺戟の一部分のみを與ふれば以て此等機能の全系を喚起し得ることを指摘せり。今、已に高等に發達せる腦髓に新らしき刺戟來れりとせば如何。此の場合に起る腦髓機能は何れも過去の習慣に依りて夫々他の諸機能と聯合融着せるものなり。即ち、新らしき刺戟に依りて起されたる機能をabcdなりとせば、aは過去習慣に依りてa′a″等と融合し、bはb′b″等と融合し、その他cdに就ても同樣に考ふることを得べし。而してabcdなる結合は、新刺戟によりて生ぜられたる新結合にして、此の結合の現はるゝや、必ず夫々abcdに聯合せる舊結合を幷起するものなり。さりながら、此等舊結合は一般に此の新結合即ち新習慣に反抗してそ

の形成を妨害せんとす。何となれば、舊結合、例へばa a′の起さんとする動作は、新結合a b c dの起さんとする動作と大に異なればなり。

例へば、今或結合に於て數語を聞きたりとせよ。此の新刺戟は吾人の腦裡に新らしき習慣、即ちその通りに反復する一種の力を確立せんとす。さりながら、此等の語は夫々他の習慣的聯合を有す。若し此等聯合の何れかにして此の瞬間に自己の聯合を實現する迄に有力なるものありとせば、それ丈けにて已に新習慣の形成を妨害するや明かなり。一般に若し親昵なる事物が已に或る結合に於て吾人に知られ居る場合には、之を新らしき結合に於て記憶せんとは、それが爲め却て一層困難なるものなり。又或熟知せる動作を新らしき順序に於て反復せしめらるゝ場合、例へばアルファベットを終より逆に曰はせらるゝが如き場合には、新習慣は一々舊習慣の固執に依りて妨害反抗せらるゝを覺ゆべし。尚此の如き困難の複雜なる事例は始めて市中に移住したる田舍人及び外國に行きたる旅行者の困惑煩悩に於て明かなり。何となれば、凡そ此の如き場合に於ては、新らしき印象は常に舊習慣を喚起し、以て外圍に對する調節に必要なる新習慣の獲得を妨害するを以てなり。

新習慣と舊習慣との關係は右に述べたるが如くなるを以て、已に高等に發達したる有機體に新刺戟來るときは、茲に此等新印象と舊習慣との間に一種の調停作用起るものゝ如し。新印象は鮮明なるを以て、その新習慣及び新調節を形成せんとする力頗る大なり。さりながら、舊習慣の固執は絶えず之に關渉して新習慣の固定を妨げんとす。而して若し新習慣の固定せらるゝ場合には、舊習慣は漸次之に影響を及ぼして、或は新機能に舊行爲法を加へ、或は新行爲法の或特質を除却する等、要するに新得機能を既得機能に類化するものなり。

類化作用の精神的方面

九一、 此の作用の意識上に於ける效果は頗る深大なり。新觀念は、それがよく既得觀念に類化せらるゝ場合にあらざれば、獲得せらるゝこと能はず。新思考法はその作らるゝや、舊思考法との類化に依りて幾分かその嶄新性を失ふものなり。此の故に吾人の知的生活并に意的生活の全部に亙

りて廣く行はるゝ作用は、舊事實の語を以て新事實を解釋すること、舊行爲の形式に新行爲を化すること、及び新習慣の形成或は新思想の承認に頑强なる抵抗をなすことの三種なりとす。此第三の方面、即ち新習慣の形成に對する頑强なる抵抗は、年齢及び訓練の增すに從て愈々增進するものなり。

腦髓習慣の保守の理法が意識生活の構成に對する此の關係は、先に聯合の理法を述ぶるに當て概說したる所と同樣なり。即ち、意識は一般に一々複雜なる習慣的腦髓作用に伴はずと雖も、意識狀態間の結合は必ず又腦髓作用間の結合に依りて代表せらるゝ者なり。故に新らしき腦髓習慣が舊習慣に類化せらるゝといふ傾向は、比較的に嶄新なる精神狀態幷に結合が舊精神狀態幷に結合に類似するといふ傾向に依りて代表せらるゝなり。

精神的類化の說明

九二、 意識生活に於て類化の理法を說明する事實は極めて多數なり。而してこれ實際的敎育上敎師に取りて頗る重要なるものなり。今茲に二三の實例を擧げて之を說明せんとす。

感官に入り來る嶄新なる事物は、先づ吾人の注意を喚起し、而して吾人が幾分か之を認識し得る瞬間に、始めて定まりたる意識の對象となるものなり。若し暫らく嶄新なる事物が喚起する感情を離れて論ずるときは、新らしき經驗はそれが類化せられざる限りは注意に上ることなし。是れ已に知覺の說明に於て述べたる所なり。而して新經驗の類化には十分なる準備を要す。故に若し生徒をして或嶄新なる事物を解せしめんとせば、比較的に珍らしく感ぜしむると同時に、比較的に親しく感ぜしむることを要す。然らざれば生徒は之に注意すること能はずして、五官は徒らに類化せられざる事物の影を寫すに過ぎず。尤も、經驗が非常に强度なる場合、若くは强き感情を喚起する場合は、此の限りにあらずと雖も、此の如き經驗は實際の敎授上に用ひらるゝこと極めて少なきものなるを以て、類化の理法は敎師の特に明瞭に考察せざるべからざる所なり。吾人が世界に於て見る所のものは、一般に見る準備の出來たるものなり。

ヘルバルト派の「統覺」

ヘルバルト(Herbart)派の心理學者は過去の經驗に新與件を類化することに依りて知識を得る此の作用を稱して統覺(Apperception)とゝふ。一切の

學問は皆統覺作用にして統覺なき知覺は不可能なりてふ主張は、實にヘルバルト派心理學者が教育的應用心理學に及ぼしたる重なる效果の一なりとす。

精神的類化の説明（續き）

九三、 心的類化の原則は獨り直接的知覺の現象に適用せらるゝのみならず、習慣的心象の形成にも適用せらるゝものなり。凡そ過去經驗の詳細が唯一度起りたるものにして慣習的事實の反復にあらざる限りは、吾人はそれに就て唯極めて不完全なる心象を有し得るのみ。此の故に、過去生活の記憶は個々の事件の順序正しき且つ精細緻密なる反復といはんよりは、寧ろその主要なる行爲、經驗、感情の再生といふべきなり。而して如何なる範圍までその然るやは、世人通常之を知らず。蓋し、吾人は往々過去の經驗に就て多少精確に事實の正しき順序に從ひてその記憶を再生し得るを以て、之を以て記憶の常態なりと思惟するを以てなり。さりながら、實際上吾人が正確に記憶し、明細にその心象を作り得る過去の事件は、過去生活の極小部分に過ぎず。讀者試に筆を執て昨年の一箇月中に起りし事件をおりのまゝにその正しき順序に從ひて記述せんとせば、誠に思半に過ぐるものあらん。經驗の詳細に關する吾人の記憶の此の缺陷が、何故に普通覺識せられざるやの一の理由は、吾人の容易に再生し得る事件は、已に度々記憶に上りたるものにして、從て吾人は之を物語り或は之に關する詳細の心象を意識に思ひ浮ぶる習慣を固定したるにあり。さりながら、凡そ此の如き場合に於ては、概括的習慣が大に個々の事件のありのまゝなる記憶に代はるものなり。されば、吾人は固より幼時或は昨年の光景を極めて明らかに再生することを得と雖も、その幾回之を再生したるやは、之を想ひ起すこと能はざるなり。蓋し、實際上今日吾人の有する個々の事件の記憶は、何等かの方法に於て之を描寫することの漸次に獲得せられたる習慣の結果なればなり。而して此の等習慣の形成せらるゝや、類化の理法に從ふものなり。感興深き過去の事件の回想は常に或る種の行爲法を反復し又新作用を舊作用に類化せんとする吾人の傾向に從ひて起るものなり。此の故に、遠き過去の事件の記憶は、固より一樣ならざれど、大抵組織的に習慣に依りて虚

過去の記憶は類化作用なり

記憶の錯誤

錯誤的記憶の群說

裝せらるゝものなり。吾人は過去の事件そのものよりも寧ろ之を再生想起する方法を記憶するものなり。此の事は英雄豪傑の懷舊談をその當時の記錄に比較するときは、極めて明かに知らるべし。

九四、 過去生活に關し吾人の最も精確に記憶する所のものは、度々起りし經驗なり。即ち、吾人は自己の兄弟は如何なる人物なりや、又兄弟と談話する時は如何なる感あるやをよく記憶す。さり乍ら、その幾回又如何なる場合に彼に會ひたるやを覺えず。若し比較的明かに彼に會ひたる二三の場合を記憶することありとせば、是れ類化作用により此の場合に關する心象若くは物語を度々同樣に反復する習慣を固定したるを以てなり。吾人は吾家への歸路をよく記憶す。されど、幾回之を通過せしやを記憶せず。

記憶の缺陷とその類化の理法に從ふものなることは、屢々老人が幼少時代の『昔の冬』に就いて語る有名なる事實に依りて模範的に說明せらるべし。彼は曰く、今日の冬は吾が幼少時代の冬と異なり。吾が幼少時代には雪は十一月より降り、翌年三月頃迄絕えず積れりき。吾人は殆ど絕間なく橇を驅り、特にクリスマスに於て最も昌に之を御せり。港灣は常に氷を以て覆はれ、氷滑は殆ど絕えずよく行はれたり。然るに、今や天候常に定まらず。氷雪は屢々解け、乘橇、氷滑決して安全に行はれず。港灣も亦殆ど決して氷結することなし。要するに氣候變ぜりと。

此の如き報告が氣象學上の記錄に依りて確證せられざることは、少しも彼の介意する所にあらず。彼の記憶は彼自身のものなり。事實は事實なり。而して彼は氣象學を以て明かに不確實なりといふ。彼は寧ろ此の事に就ては極めて明瞭なる自己の記憶に信賴せんとす。さりながら、此の如き『昔の冬』の記憶は心理學的現象にして、氣象學的現象にあらざることを忘るべからず。人間の記憶は到底天候の如き變易定まりなき現象を順序正しく精確に把住すること能はず。唯その一般的特徵を記憶し得るのみ。而して多年の後に於て特に然りとす。試に思へ、吾人は近き先月の精密なる天候の變化に就て幾程の記憶を有するや。吾人は天候等に關しては單にその一般的特徵をも精確に記憶より語ること能はざるなり。蓋し、その

精細なる記錄に依るの外、吾人は平均溫度を表象し、雪量を表象する腦髓習慣を有せざればなり。之に反して、吾人の把住する所、特に少年時代に就て把住する所は、少年時代の冬が吾人に作りし比較的興味深き且重要なる習慣の記憶なり。殘留心象は過去を追想する際に比較的鮮明に再生せらるゝ習慣と直接に聯合せられたる心象に類化せらるゝものなり。而して少年時代の最も重要なる習慣は大雪烈寒と密切に聯合するものにして、此の如き天候は時としては冬の初め、時としては冬の終りに起り、且つ休暇中には特に自己に重要なるものなりしを以て、遂に如上の記憶を作るに至りしなり。此の故に、老人の再生する所は、感興深かりし冬の習慣と此等習慣に附帶せる心象との概集なり。此れ等の習慣は彼の意識に『昔の冬』てふ一種の範疇を作りたるも、彼が記憶するが如き冬は決して實在せざりしなり。少年時代の冬の乾燥なる事實は幸に彼の記憶を去れりき。さりながら、今や彼は目前此の乾燥なる事實の詳細を經驗するを以て、茲にかの『昔の冬』の記憶に類化せらるゝこと能はざる現在事實の存在を認め、遂に氣候の變化を斷ずるに至りし也。『うしと見し世』を戀ひ、『おりし昔』を偲ぶ等、その他固定せられたる記憶習慣に基礎を置て過去を賞揚するは皆之と同理なり。

類化作用は意識と經驗との關係の唯一の方面にあらず

九五、 此の種の類化作用が廣く行はるゝに關らず、吾人は外圍に依りて吾人に喚起せられたる頑强なる活動に依り既得習慣と著しく相反せる新習慣を設立することを得。類化の作用は、固より腦髓機能の極めて重要なる方面なりと雖も、而かも唯その一方面たるに過ぎず。且、先に聯合の一般理法に聯關して述べたる事實、即ち吾人は發達の如何なる時期に於ても既に幾多の發達したる腦髓習慣を有するものにして、此等舊習慣は互に相爭ふ傾向を有すてふ事實に徵するも、新習慣の設立せられ得る餘地十分に存すといふべし。即ち、今一新習慣の形成せられんとするに當て、已に之をaなる舊腦髓習慣に類化せんとする豫性あり、而して又同時に之をbなる舊腦髓習慣に類化せんとする豫性あり、而かも此等a b兩機能は互に相兩立せず、從て互に相禁止せんとする傾向を有すとせば、此の新機能は先にa b

なる舊習慣を有せざる腦髓に於てそれか設立せらるゝよりも、更によく設立せらるゝことを得べし。此の如く、諸種類化作用の間に反對傾向ありて互に相禁止し、而かも之と同時に此の新習慣の設立に積極的效果を與ふるに足る既得習慣が尙ほ十分に存する場合には、通常新習慣の敵たる類化作用が却て間接に新習慣を扶助することゝなるものなり。

之を例へば、未熟なる旅行者は外國に於て緊要なる觀察を爲すこと少なし。何となれば、彼は唯己に興味ある範圍內に於て自己の見る所を既に了解せる事物に類化し、而してその類化せざる所は更に之を顧みざればなり。之に反して、已に歐洲、北亞米利加、亞細亞の諸國を歷視したる旅行家が、他の國例へば南亞米利加若くは亞弗利加の一國に行きたりとせんか。此の如き旅行家は固より他人と同じく類化作用に依りて見學す。さりながら、彼は未熟なる旅行者が見學するよりも多くを見學す。而して類化すると同時に直に新知見を開く。蓋し、これ一部は次の事情に依るものにして、卽ち彼が此の國に於て見る所は、忽ち以前視察したる諸國の狀態を想ひ起さしむ。さりながら、此等の追想像はその二個を取るも互に相反立するものなり。若し此等兩者が明かに意識に上る場合には、その結果たる對照に依りて助けられ、若し兩者が相禁止する場合には、新事實の印象は更に明確なることを得。要するに、今例へばCを見て之をA幷にBに類化せんとす。然るに、A及びBは相反作用にして互にその類化を禁止せんとする場合には、恰も此の相反の結果一層明かにCの特性を覺識することを得。此の場合に於て類化作用は最早決して無礙平坦ならず。新經驗が舊經驗に『融合』する範圍內に於てのみ新經驗を統覺するといふ、さる單純なるものにあらず。甚だしき抵抗を受くるものとす。さりながら、此の抵抗障礙は適々以て新習慣及び新心象の明確なる獲得に至大の好機會を與ふるものなり。

此に由りて之を觀るに、類化作用は決して知識を獲得する作用、知覺若くは記憶を編制する作用の全部にあらず。單に類化せらるゝ新事物は、固より知覺せらるれども、此の知覺は決してその根本的嶄新性の知覺にあらず。新習慣及び新觀念を獲得する爲め、換言すれば知識を發達せしむる爲めに

類化作用と思推作用との關係

は、類化作用は、一般に強盛なると共に障礙せられざるべからず、又舊習慣は新習慣を扶助すると共に舊習慣相互の間に相反なかるべからず。恰も類似の知覺が相異の知覺に依りて扶助せらるゝが如く、知識の獲得は決して類化作用のみに依りて遂げらるべき者にあらず。類化作用は必ず容易に類化され能はざる刺戟の存在に依りて扶けられざるべからず、從て又此新刺戟の影響に依りて幾分か舊習慣を變形する活動を包含せざるべからず。

九六、 類化作用は單に知覺及び記憶の作用に於て行はるゝのみならず、知的生活の最も高等なる程度に於ても亦現はる。即ち、一切の思惟作用(Thinking)は悉く類化作用を包含するものなり。新事物に當惑し、難問題に苦しむは、是れ未だ此の新經驗を舊行爲法に類化することを知らざるが爲なり。されど、熟考して此の當惑の晴るゝは、新事實を舊原則に類化することを知りたるが爲なり、換言すれば舊行爲法を殆どその儘新境遇に調節することを知りたるが爲なり。又問題の解かるゝは最初吾人を苦しめし困難の消失するが爲なり、換言すれば舊經驗の記憶より之に對する答案を案出し、以て遂に之を類化したるが爲なり。尤も、此種の類化作用は後章心的新生性の所に於て考察せらるべき習慣の變化と相伴ふことあり。さりながら、一切の思惟作用は少なくもその一面に於て類化作用なり。又一切の思惟作用に特有なる作用、即ち通常事實の『說明』(Explantion)と稱せらるゝ作用に就ても同樣に考ふることを得べし。或事實を『說明』するとは、此の事實を統括する原則を示すにあり。さりながら、此の原則が實際此の事實の說明となる爲には、此の原則は既知の原則ならざるべからず。而して吾人は簡單なる形式に於て此の原則を表現する所の行爲幷に記憶の習慣を形成したるを以て、既知の原則は已に吾人の意識にあり。未だ吾人が此の事實を說明し能はざる以前に於ては、此の事實は固より他の五官刺戟と同じく吾人の反應を喚起すと雖も、而かも何等の定まりたる反應を設立することなし。若し之を說明する原則を發見するときは、此の原則を例證する既設習慣に新事實を類化し、以て之を說明するに至るものなり。

事實の『說明』

通常意識に現はるゝ推理作用(Reasoning Process)も亦心理學的にいふときは、

推理作用

は、一種の類化作用を包含す。吾人は以前の結果との關係上或結果が眞理なることを發見する限りに於て推理するなり。推理作用の『斷案』は前提より來るものなり。何となれば、吾人は已に『前提』の眞なることを信じ、而して若し此等の前提にして眞なりとせば、進でかく斷定し得ることを認知するものなればなり。推理の際に行はるゝ心理作用は、斷案の現はす動作を前提の現はす動作の習慣に類化する作用を包含す。心理學者は固より何故に斷案が必然的に前提より來るかてふ論理學上の問題に關觸すべきにあらず。さりながら、推理の場合に於ける心理作用は、斷案の現はす新行爲法を前提の現はす舊行爲法に類化するといふ類化作用の性質を帶ぶるものなることは、少なくも心理學者に興味あることなるべし。此の如き類化作用は決して完全なるものにあらず。新行爲はその如何に舊行爲と類似するものと雖も、必ず幾分か之と異なるものなることは、已に指摘したる所なり。推理作用の高等なる方面は後章に於て之を研究せん。茲には唯推理作用は、固より類化作用のみにあらずと雖も、必ず類化作用を包含するものなることを說述し置かん。

此の如く、類化作用は意識の最も高等なる程度に於ても、又その最も下等なる程度に於ても現はる。さりながら、此の作用は決してその際意識に起る作用の全部をなすものにあらず。何となれば、新事物を舊事物に類化する場合には、必ず又新聯合關係の設立あればなり。此の作用は常に意識に起る作用の一方面をなすものなり。何となれば、訓練せられたる有機體は決して全然新らしきことをなすこと能はず、而して比較的に新らしき習慣は既設習慣の變化を包含するものなればなり。

精神の發達に伴ふ分化作用の一般性質

第十一章　被教化性

(は)　分化作用

九七、 先に意識の統一を說くに當りて、此の統一の內には常に之と離るべからざる差別あることを述べたり。而して此の差別は二種の方法に於て現はるゝことを指摘せり。同時的差別(例へば、數多の文字を一時に見る場合の如き)及び繼時的差別(例へば、太鼓の音時計の秒音の如き單一なる音列を心理的現在瞬時內に聞く場合の如き)即ち是なり。又吾人は意識の發達するに從ひ、愈々高等に分析せられたる精神狀態を有するに至ることも之を述べたり。例へば、非音樂家は諧音を聞いて之をその素音に分析することを能はずと雖も、音樂家は能く之を分析覺知するが如し。茲に注意すべきは、此の分析力の增進は同時的差別の分析に於て特に著しく現はるゝものなることと是なり。若し諸音の素音か別々に繼時的に與へらるゝ場合には、その速度の適度なる以上、何人と雖もよく之を差別することを得べし。音樂家は同時的なる諸音の差別を覺識するものなり。尤も、繼時的差別を覺識する力も、意識狀態の如何に依りて大に異なるものにして、吾人は習慣の結果大に此の力を增進せしむることを得。さりながら、同時的差別を知覺し之を繼時的差別に關係せしむる力の增進するは、精神發達の特に著しき標徵なりといふことを得べし。精神の未熟なる人に於ては、意識に現はされたる事實の集合は雜然たる渾一をなすに過ぎずと雖も、精神の發達したる人に於ては、同時に現はされたる事實の集合は明かに分化せらるゝものなり。尤も、同時的事實の識別力といふも、識野の狹隘なるが爲大に制限せらるゝものにして、吾人は一時に唯三四の事實を識別し得るに過ぎず。さりながら、此の範圍內に於て繼時的ならざる事實の識別力を養成することを得。而して此の狹き範圍內に於ても、度々之を反復するときは、吾人の意識は遂に吾人に現はるゝ諸種の事實を識別するといふ性質を得るに至るものなり。成育したる意識に現はるゝ此の種の識別力は、大抵皆練習の

結果獲得せられたるものなり。意識の分化論とは實に此の練習の效果に關する說述に外ならず。而して此の練習の結果、意識の同時的幷に繼時的差別は密接に相聯結せらるゝに至る。

同時的意識は繼時的差別の意識より來る

九八、 全く未熟なる意識に世界が如何に映ずるやは、吾人唯之を推測するの外なし。さりながら、初生兒が諸種の現在事實を明かに識別することは能はざるは、何人も疑はざる所なり。又諸音の分析の如き高等なる識別力の發達は、概ね練習の結果に依るものなることも、吾人の疑はざる所なり。然らば、此の練習とは抑も如何なる性質のものなりや。ゼームス其他輓近心理學者の一般に唱導する所に從へば、同時的事實の識別は概ねその以前の繼時的事實の識別より來るものなり。此の理法は決して絕對的なりといふことを得ず。即ち、同時的事實の識別は繼時的事實の豫經驗を離れて存在すると能はずとはいひ難し。さりながら、一般に繼時的事實の識別がその後の同時的事實の識別に極めて重大なる影響を與ふるものなることは、疑を容れざるなり。例へば、諸音の素音を豫め連續的に速く聞き置くときは、此の諸音を同時に聞きたる場合に、よく此等の素音を識別することを得べし。又赤の種々の色合を繼續的に見、更に又單に飽和(無色光に似る度合)の點に於てのみ異なる諸種の赤色を連續的に見たる後、或種の赤色を見るときは、その色合と飽和とを明かに識別することを得べし。又相酷似せる二人の人(例へば雙子の如き)を別々に時を異にして見知りたるときは、此の兩人を同時に見る場合に、更によくその相異を識別することを得べし。何人にても酷似せる二物を十分に比較せんと欲せば、繼時的に先づその一を驗し、然る後他の一を驗するものにして、此の如くして兩者を相竝ぶるときは、愈々明瞭にその相異を識別することを得るものなり。凡そ此等の事實は、諸物の相異は概ねその繼起する場合に知らるゝものにして、之に依りて吾人は同時的相異を識別する力を獲得し、或は大に之を增進せしむるものなることを證す。

此の作用は生涯を通じて行はるゝものなり。繼時的差別は同時的差別を說明する手段として、絕えず用ひられつゝあり。繼起する意識的事實の

連續は、外界の共在的差別を説明する手段として、絶えず使用せられつゝあり。繼時的差別に依りて同時的差別を説明するてふ此の傾向は、人性に最も深く根底を有する傾向の一なり。此の傾向は吾人の絶えず主張し來りし意識と運動との關係に關係を有す。吾人の行動は先づ繼時的經驗として意識に入り、その入り來るに從ひて漸次差別せらるゝものなり。差別の此の繼時的觀察の結果、或特定の行動を止め居るときにも、吾人は此の行動が繼時的に示したる差別を同時的に意識することを得。從て吾人の世界は諸種の共在的、同時的事實に分化されて意識せらるゝに至る。さりながら、最初は吾人行爲の各段を繼時的に意識することに依りて、吾人は此等の事實を知るものなり。故に共在的事實世界の明瞭なる觀念は繼時的事實の知覺より來るものなり。假令全く然らずとするも、少なくも大體此の如くいふことを得べし。

空間意識に就ての説明

九九、 共在の世界が繼時的行動の經驗に依りて分化せらるゝに至ることを適切に説明する第一の事例は、吾人が物理世界に歸與する所の空間的性質なりとす。余は空間に於ける二物を見て之を共在物と見做し、又多少明かに同時に現はるゝものとして之を觀察す。さりながら、此等二物を識別し、その位置を比較し、その空間的關係を知るに至るは、初めその一物に目を注ぎ、然る後他の一物に目を注ぎ、或は初めその一物に觸れ然る後他の一物に觸るゝてふ繼時的行動に依りて、一々之を經驗したる結果なり。換言すれば、余は視覺及び觸覺の無數の繼時的行動に依りて、又繼時的になす無數の運動に依りて、絶えず空間を探測しつゝあり。而して之と同時に此等無數の繼時的行動に依りて絶えず同時に現はれたる空間的現象を識別し、共在物として之を一定の關係に置く力を修得しつゝあり。此の作用は極めて複雜なる作用なりと雖も、その範類に於ては前に述べたる一般範類、即ち繼時的差別に依りて同時的差別を知覺するといふ作用に歸するものなり。

繼時的運動に依りて空間を探測する此の作用は、覺醒生活の間、決して止むことなし。空間的關係を觀察するに當りて絶えず動きつゝある眼、絶え

教育は分化作用の實例なり

ず變化しつゝある態度は、繼時間經驗の語に於て絶えず新たに空間的關係を說明しつゝあることの證左なり。されど、茲に最も吾人に興味あることは、吾人は共在的、同時的事實を說明する爲めに絶えず繼時的識別を用ふるといふこと是なり。外界物理界は共在物の世界なり。而して吾人はありの儘に此等を說明せんことを欲す。さりながら、此の共在をよく了解せんとせば、先づ行動の語に於て此等共在物を云はゞ戲曲化せざるべからず。空間世界の觀察に用ひらるゝ繼時的識別の動作が、如何に多數にして又如何に精巧なるやは、最近實驗心理學の益々闡明する所なり。畫を見るや、吾人は常に眼の運動に依りて此の畫の共在せる諸部の關係を判斷し、外界事物を熟視するや、必ず眼を繼時的にその各部に集注することに依りて此のものゝ輪廓を知覺す。

一〇〇、新らしき識別力の獲得に於て繼時作用が同時作用に影響することを說明する第二の重要なる事例は、敎育の全過程卽ち是なり。何等かの複雜なる關係を包藏せる新事項を學ばんとせば、先づ適當に排列せられたる繼時的行動の長き連續、例へば五官知覺、心象の喚起、言語の反復、製圖、實驗等、其の他無數の行動を順次に經由せざるべからず。然る後、吾人は此等の繼時的行動に依りて順次に意識せられたる結果を『一時に觀測する』力を獲得する者なり。此の一時に觀測する作用は、同時的意識狀態の高等なる分化を包含す。而して同時的意識狀態の此の分化は行動の反復と之に伴ふ識別力の增進とに原づいて漸次に發達するものにして、繼時的行動に熟達すること愈々大なるに從ひ、同時的事實間の關係を知覺する力も愈々增進するものなり。此の如く、吾人行爲の結果は、恰も高嶺に達したる旅行者が自己の遍歷したる國を(若し自らこの國或は之に類似の國を遍歷したるにあらざれば、下瞰するも殆ど何等の意味なしと雖も)よく願望料察するが如く、云はゞ上方より一時に觀測せらるゝものなり。固より吾人の識野は常に狹隘なりと雖も、意識事實間の同時的關係を觀測する力は、吾人行爲の略歷をその瞬間に覺識する吾人の力に原づくものなり。

敎授に於て戲曲的要素

戲曲的要素が一切の敎授に於て有する樞位に就いて、茲に一の重要なる

の實際重要なること

實際上の結果あり。即ち、口述は記述より有效なりといふこと是なり。蓋し、前者は明かに已に吾人の熟知せる範類の繼時的行動を心象の形に於て反復する力に訴ふるに反し、後者は明劃なれども同時的なる心象群の形成を寧ろ吾人に促がすを以てなり。固より稍々成熟せる意識に訴ふる場合には、口述記述共に同時的心象及び繼時的心象を意識に現出せしむと雖も、而かも口述は最も容易なる識別、即ち繼時的事實の識別に多く注意を向けしむるの利益あり。

判斷及び一般に思惟作用は分化の作用なり

一〇一、同時に現はされたる事物、心象、及び關係を繼時的行動の語を以て說明するといふ傾向の尙一つの著しき事例は、判斷の全過程、從て思惟の全作用、即ち是なり。例へば、茲に一輪の薔薇あり。而して此の薔薇は色、香、其他種々の性質を有することを判斷せんとする場合には、此等の諸性質は同時に薔薇に現はるゝものなり。而して余は薔薇の此の同時的復合性質を自己及び他人に明識せしめんと欲す。さりながら、之が爲めには余は繼時的注意作用に依りて先づその一性質を明覺し、次に他の一性質を明覺し、斯の如くして此等の諸性質を余の心意に分化せざるべからず。已に繼時的注意作用に依り、此の如く薔薇の諸性質を識別したるときは、吾人は再び此等の諸性質を同時的に此の薔薇に於て認識することを得。諸性質が共在するといふことは、繼時的行動に依りて之を知り又之を表出す。唯、此等諸行動を終りたる後に於て、余は再び薔薇の統一内に一時に差別を知覺するものなり。此の如くして、吾人の判斷には常に二樣の意識作用あり。所謂分析(Analysis)及び綜合(Synthesis)是なり。分析とは、薔薇の諸性質を命名し、之に注意する作用にして、繼時的行動に依りてなさるゝものなり。之に依りて、余は諸性質の名稱及びその他の聯合觀念を心中に識別す。綜合とは此等諸性質を單に繼時的事實として意識するのみならず、薔薇に共在する同時的事實として意識し得る瞬間になさるゝものなり。綜合は分析の結果なり。さりながら、判斷は此等兩作用の成就せられたる後ならでは完成せらるゝことなし。單に分析を爲すのみにては、唯種々の精神狀態を繼時的に與ふるのみにして、此等は決して一薔薇の諸方面としての知識を吾人

分析及び綜合

に與ふることなし。此の知識を得る爲には、必らず綜合を爲さざるべからず。然りと雖も、綜合は亦、分析を措て爲さるゝものにあらず。一切判斷作用は繼時的行動の語を以て同時的性質を有する事物の統一を再建する作用を包含す。或は判斷を以て、自己の繼時的觀念を總括することに依りて、事物の觀念を再建する模倣作用(Imitative Process)なりともいふことを得べし。さりながら、此の如き模倣は、それが事物に存在する諸性質を吾人の語に於て表現するといふことを、吾人が認めたる後ならでは、吾人に對して完全なる意味を有するに至らず。而して此の認識は卽ち吾人の判斷が繼時的行動に依りて說明したる事物の諸性質が同時に綜合せらるゝといふ事實の認識なり。又圖解的に事物の性質を研究するに當りては、常に繼時的作用がその事物に現はるゝ同時的性質を意識せしむるものにして、その方法前に述べたる判斷作用と同樣なり。

實際的效果

一〇二、此に由りて之を觀るに、意識の分化は主として如上の戲曲的作用に依りて起るものにして、心理學者が心理作用を研究して、比較的に分析せられざる純白意識狀態を分析せられたる意識狀態に代ふるに至るも、全く此の方法に依るものなり。その他、事物の同時的關係を明かにし、比較をなし、科學的綜合をなし、事物全體の概念を得る等、一として此方法に依らざるはなし。之に依りて精神訓練上の注意を次の如く摘要することを得べし。卽ち、繼時的行動の適當なる排列に依りて意識の分化を組織すべし。此の如き繼時的行動なくして同時的事實の何等の價値ある知識を得る能はざることを記憶すべしと。此の故に、教育の全過程は戲曲的作用なり。行爲に依りて眞理を說明し、繼時的に宇宙の諸部分に反應することに依りて宇宙を了解し、差別を經て統一に達し、分析に依りて綜合を得る作用なり。

注意作用は分化作用の一方面なり

一〇三、分化作用は前に意識の統一を說くに當て述べたる一聯の現象を伴ふものなり(三四參照)。此の現象は感情と被敎化性との最も重要なる關係を明かにするものにして、吾人は之を名けて注意作用(The Process of Attention)といふ。

已に述べたるが如く、吾人の發達したる意識は、前景と背景とを有す。又

『意識の幹流は最早明確に區別され能はざる幾多の內容より成る』と雖ども『意識流の表面には』『明確に』區別され得る二個乃至四個の精神狀態を有す。

今茲に一時的精神狀態が劃然明覺せらるゝに至る作用を逃ぶる必要あり。凡そ吾人が現在狀態と過去狀態との關係上、意識的に利得するといふ限りに於て、吾人の精神狀態は被敎化性の表現なり。さりながら、吾人が現在の精神狀態に對し直接に滿足或は不滿を感ずるといふ限りに於て、吾人の精神狀態は感情の對象なり。而して實際吾人は屢々、與へられたる現在狀態が過去の狀態と或種の關係を有するといふ事實(例へば、嶄新であるとか、親昵であるとか、難解であるとか、平易であるとか、過去の習慣と明瞭なる關係を有するとか、新らしき調節を要するとかいふ事實)に滿不滿を感ずるものなり。さりながら、此の如くして吾人の經驗は感情と新らしき而かも重要なる關係を有するに至る。夫れ或經驗が意識の習慣を鑄造するといふ限りに於て、此の經驗は知的價値を有すと稱せらる。此の價値は、一時的

精神狀態として此の經驗が有する內容の現在感情(例へば快、不快)に對する價値以外に、此の經驗が有する所の價値なり。さりながら、實際吾人は此の知的價値を直接に表現する一時的感情を有することを得。勿論、此の感情は屢々知的價値を誤認することあり。此の感情はこれを『興味の感情』(Feeling of Interest)といふ。興味の感情は主として安、不安の性質を帶ぶ。吾人が尋ね、求め、而して知識を期待するといふ限りに於て、それは不安なり。又此の如き興味の念が滿足せらるゝといふ限りに於て、それは安靜なり。さりながら、此の感情は自己をして屢々之と同瞬間の他の感情と激しく相爭はしむる所の奇怪不變なる一性質を有す。非常に苦悶懊惱せしむる難問題は、吾人固より深く之を嫌惡すと雖も、而かも之に對して甚大なる興味を感ずることあり。蓋し其原因或は本質を了解するまで之れに凝意せんことを欲すればなり。此の興味の感情が大に滿足的なるときは、吾人は親昵なる或は了解せる事實として、此の經驗の爲に此の經驗に凝意することを得。此の故に、幼兒は自己の知れる話の反復せらるゝことを好み、又好で親

昵なる事物の畫、例へば人物の畫を幾枚も幾枚も續け樣に見、之れを見る毎に昂然『人』『人』と叫ぶ。此の場合に於ては、唯親昵といふことが滿足を與ふるなり。さりながら、此の興味の感情が大に不滿的なる場合(卽ち苦悶困惑する場合)に於ても、此の知的興味を滿足せしむる(換言すれば、不滿を減ずる)唯一の方法は、矢張それと過去經驗との關係が變ずるまで(例へば、それが親昵となるか或は了解せらるゝまで)之れに凝意するにあり。茲に興味の感情卽ち『知的感情』(Intellectual feeling)に就いて面白きことは、その滿足の場合なると不滿の場合なるとを問はず、滿足を維持し不滿を減ずる唯一の方法は、常に其間經驗として此の經驗に凝意するにあること是なり。何となれば、今定義したるが如く、興味は精神狀態そのものの內に偶然包含せらるゝ感情(例へば快、不快)に關する滿不滿にあらずして、之と他の狀態或は自己の習慣との關係に關する滿不滿なればなり。此の故に、知的興味の狀態に於ては、吾人は疑問し、分析し、比較する等、凡そ此の事物を他の事物に關係せしめんとする、あらゆる動作をなす。吾人は如何に之を處理すべきやを知らんことを求めつゝあるか、或は如何に之を處理すべきやを知れりてふことを喜びつゝあるかなり。

注意の定義

注意とは此の如き知的興味を滿足せしめんとする精神狀態及び物理活動を包含する作用をいふ、換言すれば注意とは經驗として見たる場合の經驗の現在興味を增進する作用なり。或事物に注意するときは、之を認識或は了解せんとするか、或は已になしたる認識或は了解に滿足し從て之に凝意するかの何れかなり。而して之を認識或は了解せんとする努力に伴ふ不安感情が、その瞬間に現はるゝ諸感情中に優勢を占むるか或は兎も角顯著なる場合には、之を『自動』注意といひ、之に反して注意の他の現象は悉く存在し、唯感情の點に於て安靜感情が優勢なる場合には、之を『受動』注意といふ。

自動注意
受動注意

注意はその對象を意識に明確ならしむ

注意の成功する場合、卽ち興味の感情が增進せらるゝ場合には、此の興味の對象は心中に一層明瞭となるに至る、詳言すれば一層的確となり、一層背景の上に『彫出』せらるゝに至る。是れ茲に定義したる一時的、現在的、知的

興味の增進より生ぜらるゝ一の確實なる結果なり。吾人の注意する所は、精神狀態としては、或はその內容の不分明なることもあらん。されど、經驗としては甚だ重要となるに至る。卽ち、之と伴行する種々の內容より一層よく區分せられ、聯合觀念を喚起する力一層强大となり、既に幾分か知られ居るときは一層容易に認識せられ、又既成習慣を變ぜしめんとする力も一層增大するに至る。注意は定義に依り勿論感情を包含す。さりながら、此等の感情はその性質上感情としても知的價値を有す。而して注意は一切重要なる知的作用の必須條件なり。

注意の難易

吾人の現在的興味が人爲的、不自然的なること少なきに從て、その滿足は愈々容易にして、又その結果も愈々大なり。從て唯注意せざるべからずと抽象的に考ふるが爲めにのみ或事物に注意するといふことは、到底永續し得べきものにあらず。吾人は此の興味を幾分か自發的に有せざるべからず。然らざれば吾人は到底之が滿足を望むこと能はざるなり。故にそれ自身已に吾人を引き付くる性質を有するものは、一般に經驗としてのそれの興味に關して、それ丈け容易に注意せらるるもの也。又比較的に親昵なるものは、解し難き異樣のものより一層綿密に注意せらる。尤も後者がその不快なる或は恐ろしき性質に依りて、或はその感覺的或は他の直接的誘力に依りて、之を了解せんとする心を喚起せしむる場合は、此の限りにあらず。例へば、兒童は屢々その課業中の未可解なる所を全く注意せず。されど、蓬萊ヶ島或は先人の偉業の如き、兒童の好美心に訴へ、或はその模倣的本能を覺醒し、以てその鮮銳なる興味を喚發するに足るものは、此の限りにあらざるが如し。凡そ或事物が親昵なるか或は了解し易きが爲に感ずる興味は、之を『第二的』興味 (Derived interest) といひ、此の興味の增進を『第二的』注意 (Derived attention) と云ふ。さりながら、事實上一切の現在的興味は已に述べたるが如く、皆多少第二的感情なり。概して云ふときは、自動注意はその性質大に不確にして動搖しつゝあり。持續的自動注意は事物若くは事物と吾人との關係が絕えず變化しつゝある場合にのみ可能なり。

注意に伴ふ生理的作用

注意に伴ふ生理的作用は三種あり。(一)運動範類の調節、之は感官を與

味の對象と都合よき關係に置く作用、或は習慣上明確なる注意と聯合せられたる位置に置く作用、その他印象を一層明確ならしむる所の他の身體的作用をいふ。或特有の態度、身振、其他呼吸及び血液循環の變化等は此の範類に屬す。(二)積極的腦髓『態度』の確取、與味を感ずる事物を了解するに最も有用なる腦髓習慣を特に都合よく活動せしめんとする腦髓『態度』を取るをいふ。注意が觀念の聯合を支配するが如く見ゆるは、畢竟此の生理作用に原づくものなり。(三)消極的腦髓『態度』の確取、(二)と密接に聯絡するものにして、即ち現在興味の滿足を妨害する一切の運動及び習慣を禁止せんとする腦髓『態度』を取るをいふ。注意せる人の靜肅、專心は即ち此の結果なり。自動注意は常に大なる禁止作用なり。兒童及び衰弱の諸狀態に於て注意の動搖するは、一は此の禁止力の乏しきが爲なり。

一〇四、 吾人の成熟せる意識に現はるゝ識別作用は、最も高等なる程度に於ても、著しく制限せらるゝものなり。或重き物體を持てるとき、之に少量の重さを附加するも、別に重さの增加を感ぜず。又太陽の光線に充てる

分化作用の制限

室内に於て、瓦斯燈を點ずるも、別に光の增加を感ぜざるべし。要するに、感覺の强さの極めて微細なる差異は、吾人に感ぜられざるなり。是れ何人もよく知る所なりとす。さりながら、此のことは之と密接に聯合せられたる他の事實、即ち晩近實驗心理學が精密なる實驗に依りて大に明かにしたる事實に、吾人の注意を向けしむるものなり。吾人若し單に刺戟に屬する性質より心的經驗の性質を考ふるときは、先づ或光線を眺めつゝあり、而して何人か之に新らしき光を加ふる場合(例へば、瓦斯燈を點ずる場合)には此の附加刺戟が適當の大さを有する以上、吾人は此の光の差異を意識し得と考ふべし。而して此の考よりして、此の差異は瓦斯燈の點ぜらるゝ以前の本の光の如何に關らず、常に同樣に意識せらるゝものなりと思惟すべし。更に他の例を以ていはゞ、茲に一ポンドの重さの物體を擧げたるときの經驗あり、而して此の經驗は此の物體に對應する通常の經驗なりとせんに、今十ポンドを持てるときに此の一ポンドを附加したる場合と、百ポンドを持てるときに此の一ポンドを附加したる場合と、此の一ポンドは常に同一の差

異を生ずるが如く思はるべし。さりながら、少しく反省するときは、吾人は心的經驗をして總ての點に於て精密に刺戟物の性質に對應せしむることを能はざるものなることを知るべし。何となれば、十ポンドを持てる場合に此の一ポンドが增加せらるゝ場合には、之を感ずることを得べきも、更に漠大なる重量を負荷へる場合に增加せらるゝときは、吾人は之を感ぜざればなり。瓦斯燈の光は室が暗き場合には非常に著しき差異を生ずべし。さりながら、日光が室中に滿てる場合に、此の同じ光が增加せらるゝも、吾人は殆どその差異を認めず。此の如き刺戟は、若しそれが單獨に作用する場合には、甚だ重要なる卽ち甚だ强き結果を生ずと雖も、若しそれが非常に多量にして從て非常に强き結果を生じたる刺戟に附加せらるゝ場合には、此の附加刺戟は全く意識に上らざることあり。此の原則が吾人の經驗に甚だ深き關係を有することは、別に實驗に依らずとも、他の卑近なる事實を考察するときは、極めて明かなる所なり。吾人が書籍を讀むに當りては、常に白紙の光澤と活字インキの光澤少なき部分とを識別するてふ事實に依りて導かるゝものなり。文字を明視し得るは、此光澤の差異に依るものなり。然るに、光線の減退するに當りて、吾人は光線が非常に減退するまで文字の不明瞭となるを覺えず。而かも光線の微弱となりたるときには、白紙と活字との光澤の差異は實際大に減じ居るなり。此のことは、圖案或は製圖の細密なる劃線に就ても、或範圍まで同樣にして、光線の著しく減退せるときに於て、吾人は尙光線の多かりしときと同樣に、よく製圖の詳細を見ることを得。此の如く通常の經驗に依るも、差異の判斷は幾分か比例的なることは明かなり。是れ最近實驗心理學最初の研究事項の一にして、ウエーベル氏(Weber)及び有名なる心理學者にして哲學者なるフェヒネル氏(Fechner)に依りて研究せられたる所なり。實驗的研究は小差異の識別は重量の場合及び幾多の他の種類の經驗に於て常識の觀察が示したる法則に一致することを證明せり。ウエーベル氏及びフェヒネル氏は相異なる形式に於て此法則を說述せり。最近敎科書に『精神物理法』(Psycho-physic Law)と稱するもの卽ち是なり。此の理法は、その後種々の方面に於て實驗的に研究せら

れたりしが、大抵の五官經驗に於ては正確なるを得たり。唯非常に微弱なる或は非常に強大なる五官經驗に於ては行はれず。その正確に行はるゝ範圍は強さの中庸なる經驗なり。

精神物理法

精神物理法とは、五官經驗の差異の相異なる二個の場合を比較するに當りて、その經驗の差異か意識に同價値を有する爲には、換言すればその差異が均等なる爲には、兩方の相比較せらるゝ刺戟が絶對量に於て同一の差異を有するにあらずして、比較量に於て同一の差異を有することを要ずということなり。例へば、茲に物理量二十の刺戟あり、此の刺戟に對し、始めて刺戟の增加を感ずるは、それが二十一に增加したるときなりとせば、若し元の刺戟が四十なるときは、それが四十二にならざれば刺戟の增加を感ぜず。又元の刺戟が八十なるときは、八十四にならざれば刺戟の增加を感ぜず。以下皆此の如し。又十の刺戟と二十の刺戟とが或る意識的差異を生ずとせば、二十及び四十の刺戟は他の條件が同一なる以上、前の兩刺戟と同樣の意識的差異を生せしむ。此の故に、二對の刺戟ありて、此等二對の各刺戟が

精神物理法は感覺の理法にあらず被敎化性の制限に關する理法なり

その比較量即ち比に於て相等しき場合には、此等は意識上同一の差異を生ずず。

一〇五、此の理法の正確に行はるゝ範圍及びその除外に就いては、茲に之を詳論するの餘白を有せず。唯、此の理法が刺戟の意識的識別と物理的事實との間の重要なる關係を表はす者なることは、疑ふべからざる事實なり。さりながら、茲に注意を要することは、精神物理法は心的被敎化性に關する理法、詳言すれば五官經驗の事實を識別することに熟達する力に關する理法なること是なり。精神物理法は往々直接感覺に關する理法なりとして論ぜらるゝことあり。曰く、感覺の强さの均等なる差異は刺戟の均等なる比例的差異に對應すと。さりながら、事實上精神物理法の基礎となれる實驗は、純粹の五官經驗に就ての實驗にあらず。又此の如き實驗なること能はず。況んや絶對的に純粹にして孤立せられたる感覺に就ての實驗なるを得んや。第一、五官經驗は皆意識の現在統一の內に包括せらるゝ心的複合物の一要素にして、其內に織入せらるゝものなれば、吾人は到底純粹な

る五官經驗を有すること能はず。第二、二つの五官經驗を比較し兩者を相異なりと判斷するは、兩經驗に對して特別の反應を爲すなり、換言すれば『相異』といふ判斷を下すなり、卽ちその相異が意識的價値を有することを示めす或る他の反應を爲すなり。此の相異は此の反應が爲さるゝときに知覺さるゝものなり。而して此の如き反應が少なくも傾向として現存するにあらざれば、此の相異は到底知覺されざるなり。今精神物理法に關する實驗は、大抵刺戟の比較に對する注意集注の條件のもとになさる。上に述べたる常識の經驗が此の法則の表はす傾向を說明するといふ限りに於て、或は實驗場に於ける實驗が純白意識の條件に接近する樣になさるゝといふ限りに於て、二經驗間の相異の知覺は此の相異に對する或特別の反應の形をとるといふことは尙眞理なり。

吾人は本章に於て感覺的識別が爲さるゝ條件を表示し來れり。吾人は此等の條件が繼時的相異の感覺的識別を可能ならしむることを見たり。尤もこれに依りて同時的相異の識別力を獲得し得るは、固よりいふを俟たず。吾人は又繼時的相異を識別する力、例へば最初或重量を捧げ、直ぐその次に他の重量をを擧げ、以て二重量の相異を觀察する力、或は最初一音を聞き、次に他の音を聞き、以て二音の相異を區別する力は、注意に依りて又此等事物に對する種々の反應を練習するとに依りて養成せらるゝものなることを見たり。此に由りて之を觀るに、精神物理法は刺戟の微差に反應するに當りて、有機體の被敎化性が受くべき或制限を表式するものなるが如し。

精神物理法は刺戟が中樞に達する前に感官の內に起る事柄に關する生理的理法なりや、或は意識作用が世界に進行する事柄を表象する方法に關する心理的理法なりや、是れ屢々論爭せられたる所なり。吾人現在の見地よりいふときは、精神物理法は生理的幷に心理的理法なりといふことを得べし。此理法は確かに物理的或は生理的方面を有す。今適當なる順序に於て繼時的にABなる二個の刺戟を受くるに當りて、若し或意識的動作、詳言すれば兩刺戟の相異より起る動作、卽ちBに反應する方法とは大に異なりたる方法に於てAに反應するといふ動作をなす場合には、余は此等兩刺

載を識別することを得。若し此の動作を爲し得ざるときは、余は意識的識別をなすこと能はず。意識的識別の制限は此の動作力の制限と并走せざるべからず。

今精神物理法のもとに總括せらるゝ現象の示めす所は、若し或人にABなる刺戟を與へ、之に對して相異といふ判斷或は他の精確なる判斷をなさんことを求め、而して此等ABがその人の識別作用を喚起し得たる場合には、ABと異なる物理量を有する二刺戟が之と同樣の結果を生ずる爲には、其等二刺戟はABと同じ比差を有せざるべからずといふこと是なり。故に此の事實の敎ふる所は、有機體并に意識作用は刺戟の比例的差異に自己を調節するものにして、その絶對的差異に自己を調節するものにあらずといふこと是なり。如何に注意の密度を增すも、如何に被敎化性の度を增すも、吾人は隨意に此の傾向を破ぶること能はず。故に此の理法は被敎化性の限界を表はすものなり。又有機體と外界との都合よき關係を表はすものなり。物理的刺戟の多くは、光線或は他の外界物理的條件の變化する場合に、その物理的强度を比例的に變化するものなれば、尤も此等の變化は之をその有機體に對する關係より考ふるときは、刺戟を生ずる事物の比例的價値に何等の影響を及ぼさずと雖も、有機體のなす反應の種類が外界に於ける此等の變化に依りて影響せられざることは、勿論必要なることなり。事實と事實に對する反應との之と同樣なる關係は、他の場合に於ても容易に之を追跡することを得べし。さりながら、精神物理法は直接に感覺に關する理法にあらずして、寧ろ反應の理法なることを記憶せざるべからず。此の理法は實質上、吾人は或範圍內に於て刺戟の大さの同比的變化に對し同一の反應を爲すといふ理法なり。此の理法と意識との關係は、吾人は吾人の實際爲さんとする反應を意識し、而して吾人が事實間の相異に反應するといふ限りに於てのみ事實の相異を意識するといふ事實に原づく。若し意識作用は外來五官經驗に伴ふのみならず、此等五官經驗に對する總有機的反應にも伴ふものなる事とを記憶せば、由來往々精神物理法に歸せられたる神祕は自ら氷解せらるべし。

人類の精神生活は本來社會的なるものなり

第十二章　被教化性

(に)　高等なる被教化性の社會的方面

一〇六、 人間の外圍に對する反應は、單に物に對する反應のみにあらずして、實際は却て人に對する反應を主とす。茲には人格の意識の起原及びその發達を詳細に論究するの機會を有せず。習慣の理法及び聯合の理法は、吾人が外圍に於ける或ものを、單に大さ運動等を有する物理的事物としてのみならず、吾人と同樣の經驗を有し又意識を有するものとして考ふるに至る徑路を說明する上に、勿論重要なるものなり。此の他人の意識は吾人の到底接近し能はざる所なるも、その外部に表出せらるゝ限りに於て、よく之を了察し得べく、又極めて吾人に興味あるものなり。今、少しも特殊の社會心理學の考究に立ち入ることなく、唯吾人の一切高等なる知的習慣幷に意的習慣が他人の內的生活を意識的に了解することに依りて如何に影響せらるゝやを、茲に少しく說明する必要あり。

社會意識の基礎

一〇七、 吾人の社會意識は一定の本能にその基礎を有するものゝ如し。一定の本能とは吾人をして社會的實在たらしむる所以の本能にして、生後第一年の終頃より著しく現はるゝものなり。而して最初は他人の顏、その存在、その行爲に興味を感ずるといふ一般的感興の反應に於て、外部に現はるゝものなり。此の反應の內には、大に快を表はすものあり。又赤面の如く恐怖を表はすものもあり。此の恐怖は本能的性質にして、或場合には見慣れざる人に對する激烈なる恐愕の反應となりて現はるゝことあり。さりながら、大體よりいふときは、通常の兒童が人を見るに當りては、快的反應の著しきを常とす。勿論、此等の本能は最初より被教化性の一般理法に從ふものなり。吾人の社會的外圍は幾多の五官的快樂の絕えざる源泉なり。從て聯合作用に依りて、吾人に興味あるものとなるに至るなり。さりながら、人間社會に原づく五官的快樂の他に更に初より深き本能的、遺傳的基礎ありて、人間の活動に對する感興の源泉をなすことは、疑を容れざるなり。

模倣

此の一般的、社會的興味といふ基礎の上に特殊的本能生ず。特殊的本能の内最も著しきものは模倣(Imitation)てふ名稱に依りて暗示せらるゝ本能の複合卽ち是なり(Professor Baldwin's Mental Development in the Child and in the Race 特に該著の第二卷を參照せよ)。兒童の言語を覺ゆるは、模倣に依るものにして、又社會の一員として許さるべき社會的性格を獲得するも、模倣に依る者なり。模倣性は兒童が多年困難辛苦してなす熱心不斷なる活動の源泉なり。模倣性は終生殘存するものなり。成年に於ては、此の模倣性は吾人の意識的注意を惹くこと少なしと雖も、而かも自ら模倣的ならずと想像せる人に於て尙現存するものにして、心理學者はよく之を觀察することを得。

人類の此模倣性は、輓近心理學者が一般に『一揆』(The mob)と稱する興奮したる民衆の間に著しき形に於て現はるゝものなり。一揆とは、之を學術的にいふときは、腦髓の現在態度が自己の慣習的個人的選擇を決定し來りし習慣を破棄して、一時、感情的、社會的、模倣的なる共通反應法を取りつゝある民衆の集合を意味す。此の如き社會的影響のもとに一揆の民は、此等の人の敎育及び平素の意見より考ふるときは、一見全く狂氣的なる行動を敢てするに至る。一揆の外模倣的反應は時代の風潮或は歌謠、歌劇、小說の流行の如きあらゆる流行の現象及び一時的風習の現象に於ても現はる。政治上の輿論、宗敎上の信仰、社會的判斷等は、何れも大抵その起原に於て、著しく模倣的なるものなり。

社會意識の基礎

對反の好愛

一〇八、模倣作用と相幷で實際上之と分離すべからざるも、性質上大に之と相反せる他の反應群あり。社會的反立(Social Opposition)の現象、及び行爲、意見、或は權力に關し自己を他人に對立せしむることを好む現象、卽ち是なり。此の社會的對立及び反立の現象は疑もなく本能的基礎を有す。その起るや極めて幼時に始まり、大抵の人に於ては終生存續するものなり。此等は非常に敵意的なる且つ怖ろしき形に於て現はることあり。されど、その通常の發現に於ては、健全なる社會的活動の最も價値ある特質の一を構成するものなり。是れ快活なる會話及び辯論の說明する所なり。

原則として、社會的對立及び反立の好愛を表はす行動は、その起原に於て

模倣的行動の次に位するものなり。固よりその本能的基礎は、模倣的本能と同じく、極めて早く現はるゝものなり。而して反立の好愛は忿怒、强情、及び關渉の拒否の如き元素的情緒に一部分その基礎を有するを以て、此の如き反應の本能的基礎は寧ろ模倣的反應よりも早く現はるゝものなりといふことを得べし。反立の本能的基礎は此の如く早く現はるゝと雖も、此の如き本能を表出し得る社會的行動は習得せられざるべからず。而して社會的外圍に對して自己を對立せしむる爲には、一般に先づ社會的意義を有する行動を爲すことを學ばざるべからず。余は對話の法を學ばざれば、言論を以て君に反抗すること能はず。余は音樂を知るにあらざれば、音樂家として君に對抗すること能はず。余は政治學に通ずるにあらざれば、政治的競爭に勝を占むること能はず。然るに、談話、音樂、政治學等は何れも模倣に依りて學ばるべきものなり。此の故に對立及反立の好愛を表はす社會的反應は、發達の順序よりいふときは、模倣に屬する反應の次に生ぜられざるべからず。是れ此等二種の機能の密接に相聯關する所以なりとす。快活なる兒童は已に模倣に依りて得たる小技を取りて、以て我意を表出し、或は自己の工夫を發現し、或は外圍に對し自己を開展するものなり。然るに、他方に於て我意强情の一種が、已に知力の高等に發達したる人に於て、忍耐なる模倣作用を生ぜしむることあり。例へば、大抱負を抱ける美術家が、競爭に勝たんが爲め、長く練習に耽るが如し。要するに、模倣機能と社會的對反機能との間に善良なる平衡を維持することは、あらゆる精神活動の基礎を爲すものなり。而して意識的教育の全過程は、此等二種の社會的本能を愼重に教化する作用を包含す。何となれば他の如何なるものを教ふるにも、吾人は必ず模倣を教ふればなり。又社會的模倣の如何なる利用法を教ふるにも、吾人は必ず之と同時に、自己の有する技術に依りて、何等かの方法に於て、自己を他人に對立せしむることを、教へざるべからざるを以てなり。

模倣性及び對反性の社會的價値に關する詳細は、茲に之を論述すべき限りにあらず。此の心理學初步の研究に於て吾人の注意すべきことは、此等機能の性質は、思惟作用及び推理作用の構成及びその發展に甚深の影響を

及ぼすといふこと、即ち是なり。又次の事項に就きては深く十分なる考察に立ち入ること能はざれども、其事實のみは之を述べ置かざるべからず。即ち自識(Self-consciousness)を構成せる一切の機能は、皆社會的反應に於て詳言すれば現實的或は觀念上の人物との交渉に於て外部に現はるゝものにして、精神上吾人の社會意識と深く關係し、又之と分離すべからざるものなりといふこと是なり。

思惟作用と社會的刺戟及び習慣の社會的一般關係

一〇九、 右に述べたる事項を少しく精密に説明せんに、思惟(Thought)とは特有の運動反應に於て外部に現はれんとする精神作用の一列より成る。特有の運動反應とは、主として言語の使用、適用及び結合をいふ。思惟作用が何故に此の如く言語の使用に依らざるべからざるやの理由は、由來心理學者に依りて屢々論究せられたる所なり。されど、初學者に取りては、一見頗る困難なる問題なりとす。此の問題の一般的解説は言語は吾人が他人と社會的關係に入るに當りて獲得したる或反應の表出なり、といふにあり。一度此の社會的關係が一切の思惟作用に必屬する意識の性質を如何に決

言語は何故に思惟作用に發達に重要なりやの

定するやを了解するときは、何故に言語的聯合及び習慣が一切の思惟作用に聯關して顯著ならざるべからざるやを知ることを得べし。吾人は又屢々心理學者の閑却せる所、即ち思惟作用は時に言語的表出を離れて現はることを得るものなるを知り得べし。尤も、言語と同樣なる社會的起原を有する行動の傾向より離るゝ能はざるは、固よりなり。

言語發達の過程

吾人の言語は初め他人との社交の一部分として學ばるゝものなり。兒童の言語に關する最近心理學者の唱導する所に從へば、言語は最初兒童に取りて何等の抽象的觀念を表出する者に非ず。ヴント及び其一派の主張するが如く、初めは思想よりも寧ろ感情を表出する者なり(Wundt's Völkerpsychologie, Vol.I, "Die Sprache" 參照)。兒童の言語は、最初は總て感情を表出する者なり。之が、社會的關係に入るに及で、漸次社會的興樂の情、交友の念、人に賞讃せらるゝ音を發し得る力及び他人の發する音を模倣し得る力に就て感ずる歡喜の情と、聯合するに至る。さりながら、此の感情の表出は獨り社會的境遇及び歡樂と聯合するのみならず、亦自己の目擊する事物及び行爲と

聯合するに至る。兒童の訓育に於て、言語教授の際に長者のなす擧動及び熱心なる盡力は、此等の聯合を利用するとの社會的效果を強大ならしむる者なり。遂に言語は兒童の經驗する事物を說明すると同時に、之を他人に知らしめんとする欲求の表出となるに至る。言語作用の此二方面は、幼時に於ても、決して相分離す可らざる者なり。單語、

言語作用の二方面

熟語、辯論等は總て內界若くは外界の事實に對する反應にして、之を說明せんとする者なると同時に、他人の意識に訴へ他人にも之を了解せしめんとする者なり。而して言語の實際的重要は實に此の後者にあり。言語は事實に對する調節なれども、決して交通の目的より離れたる直接の調節に非ず。心的武裝の一部分として言語の吾人に重要なる所以の者、實に此の交通の目的にあり。去り乍ら、此の事實よりして言語は又事實を說明する手段として其價値を有するに至ると明かなり。而して事實の此の說明は自己の用語法と他人の用語法とを絕えず綿密に比較するとに依りてなさるる者とす。兒童が乳母の言葉を模倣し、或は模倣されたる自己の喃語を聞き戲むる時代より、辯護士として判事、陪審判事の要求、幷に對者の辯難に自己の辯論を調節する時代に至る迄、彼はその語るや絕えず、自己の作爲法を他人の作爲法と比較するとに依りて、自己の反應を他人の反應に調節しつゝあり。此の如き比較は、必ず前に述べたる二大社會的動機を包含す。

自己行動の社會的比較の必然の結果

思惟作用と單純行動との差異

即ち、純粹單一なる模倣の動機、及び社會的對反の好愛、即ち是なり。

凡そ此の如き活動の必然の結果は如何といふに、斯の如き社會的比較を爲す人は、深く自己の行動を詳細に意識し、又他人が此の行動に對して下す批判と、此の行動が自己幷に他人に喚起する感情とを意識す。さり乍ら自ら意識する行動は、社會的判斷に對する調節行動なると同時に、事物に對する調節行動なること明かなり。此の二重の調節は、正に思惟作用と稱する意識を構成するものなり。抑も、思惟作用の單純行動と異なる所は、單純なる行動に於ては、吾人は唯調節の對象たる事物と、成否の感情、詳言すれば此の行動に伴ふ滿、不安又は快、不快の感情を、特に意識するにあり。自己行動の詳細に至りては、此の如き場合に之を意識せず。例へば、食物を求めつゝ

ある人は、歩行作用及び把握作用に於て如何に脚及び腕を動かすやを意識せず。其意識する所は、唯食物の心象と之を得んとする滿足的或は不滿的努力のみ。此の如き場合に於て、吾人行動の詳細が何故に意識に明覺せられざるやの理由は、次の事實に存す。即ち、事物の感覺著しくして、行動の感覺は習慣の結果一々意識に上り得ざる程迅速となり、內的經驗の內、唯感情のみ其行動の伴象として殘留するが故なり。さりながら、之に反して思惟する人は、事物に對して自己の爲す所の行動を意識することを理想の一部分とす。而して是れ自己行動と他人行動との社會的比較が、單に自己行動の形成を支配するのみならず、自己行動の觀察を理想となすを以てなり。何となれば、他人を模倣するといふ限りに於ては、自己の行動を他人の行動に調節することに專心し、社會的對反に凝意するといふ限りに於ては、自己の行動を他人に開展しつゝあり、從て他人が自己の行動を觀察しつゝあることを意識し、又之を希望すればなり。故に曰く、言語が獲得せらるゝ社會的條件が思惟作用を生ずと。蓋し、自己の行動が如何に事物に調節せらるゝやを意識することが、思惟作用の本質なればなり。

思惟を表出する行動は言語の使用及び結合のみに限らず

さりながら、吾人の思惟を表出する行動は、專ら言語の使用及び結合にのみ限らるゝものにあらず。科學的製圖、藝術品の製作、實驗の擧行、其他音樂競爭者の批評に對し、或はオーケストラの指導者の指導に對し、奏樂を調節すること等、凡そ此等一切の活動は思惟作用を包含す。蓋し、此等は皆今述べたる社會的調節、詳言すれば模倣及び社會的對反を包有し、又如何に行動を爲し如何にそれが理想に調節せらるゝやの意識を含有する社會的調節なればなり。

一一〇、されば、思惟作用とは、事物を適當に表現し、描寫し、說明する樣に之に調節せられ、思惟者が自己行動の性質を意識する樣に之に調節せられたる行動、或は此の如き行動の連續の意識をいふ。特殊の思惟作用例へば普通に概念、判斷、推理と稱せらるゝ思惟作用は、何れも此一般性質を例證するものにして、皆社會的刺戟の影響の結果なり。自己行動と他人行動との對比、從て自己の思想と他人の思想との對比は、一切の思惟活動に現はるゝ

意識に缺くべからざる作用なり。

今少しく此等の考を各種の思惟作用に就て例證せんに、概念(Conception)と稱せらるゝ作用、即ち抽象的概括的觀念(Abstract General Idea)を作る作用は、正に思惟作用の眞髓なり。概念とは多數事物の何れにも適用され得る言語に聯合する觀念をいふ。例へば、『人』或は『馬』といへば、何れの人何れの馬にも適當され得る言語なり。此の言語は何を意味するやの知識は、即ち人或は馬の概念を包含す。此の如き概念は如何なる精神的材料より成るか。若し之が鮮明なる意識的觀念なる場合には、必ずその一部分として心像を包含す。此の心象は視覺範類の人には主として代表的の人或は馬の心畫となりて現はる。又所謂復合寫眞に類比すべきものにして、個々の人或は馬よりその個性を捨象し、總てに共通なる特質のみを心象に把住して出來たるが如き、輪廓の漠然たる心畫となりて現はるゝことあり。さりながら、視覺範類ならざる人と雖も、視覺範類の人が有すると同樣の明かなる『人』或は『馬』の觀念を有することを得るものなり。而して數學上の抽象觀念又は正義の概念の如き高等なる抽象的觀念に至りては、到底視覺心象に依りて適當に之を描寫すること能はざるなり。人或は馬とは一般に如何なるものなるやを知れる人は、此の種の如何なるものに對しても爲すべき或種の行動を知れる人なりといふに思ひ至らば、略人或は馬の抽象的觀念の眞髓を穿ち得たりといふべし。此の行動は直接にその物の性質を描寫するものなるか、然らざれば何等かの方法に於て自己の有する人或は馬の觀念を他人に通ぜんとするものなり。人或は馬なるものに聯合せる『人』或は『馬』といふ言語心象そのものは、已に此の種の事物に對して吾人の爲す最もよく知られたる行動の一部分なり。蓋し、事物を呼稱すること、之に對する反應の一方法なればなり。而して名稱が意識に價値を有するは、それが偶然その事物に聯合せるが故のみならず、その事物を取り扱ふ適當なる方法として、換言すればそれに反應する適當なる方法としてその事物に聯合せるが故にして、特に自分が人或は馬を見たりしといふ事實を他人に通ぜんとする場合には、一層適當なる反應法なればなり。さりながら、事物の正し

き概念を有する人は、名稱の使用以外、此の種の事物に對し更に幾多の適當なる行動をなすことを得。而して人或は馬の概念が明かに意識に上る瞬間には、此の如き行動の或もの、例へば自己と人或は馬との常關係を適當に說明し得る行動、或は(身振語に於て、模倣的記號に依りて、事物を模寫するが如く)人或は馬の性質の一面を模倣或は描寫し得る行動を想ひ起すか、然らざれば此の如き行動を爲し得といふ信念を生ず。此の信念は先に述べたる親昵の感情と同樣の感情にして、先づ安靜の感情あり。此の如き感情は、精神中に於て、常用語の意味を明細に意識了解せんとする努力に代はるものにして、從て吾人の所謂言語の了解とは、屢々單に此の語の聽覺と、之に伴へる親昵の感情、及び必要あれば何時にても此の語の表はせる事物の性質を說明描寫し得といふ信念とを意味することあり。さりながら、此の如き感情より概念の更に具體的なる行動に進むや、吾人の概念はその明瞭なる以上、必ず行爲の傾向ならざるべからず、卽ち適當なる反應に依りて事物の性質を描寫せんとする傾向ならざるべからず。適當なる反應とは、同種類

概念は「行動の考案」なり

中の何れの事物に對しても恰當にして、又吾人の概念を他人に描寫するに適する反應をいふ。

一一一、此の故に、事物の概念とは、その精密なると不精密なるとを問はず、此の種の事物に對して吾人の取るべき精神的態度をいふ。此の如き精神的態度は必ず心象を伴ふ。而して此の心象は頗る著しきことあり。爲に一派の人、特に視覺範類に屬する人は、概念とは同種類中の模範的事物の多少漠然たる心象なりと定義するを以て、概念てふ意識狀態の最も完全なる說明なりとなすに至れり。さりながら、前に心象を論ずるに當りて述べたるが如く、外物の心象は之に對する反應と決して分離すべからざるものなり。明かなる心象の意識に現はるゝときは、吾人は必ず適當なる行動に於て之に對する全態度を表出せんとす。このことは、想像上の友達と遊びつゝある小兒及び話を物語りつゝある小兒に就て、能くその一般を伺ふことを得べし。且或種の事物の概念を有する人は、それが適當なる行動に於て外部に表出せらるゝ限に於てのみ、正當なる概念を有することを表明し得

るものなり。單に虎の心象を有するが故に、余は虎の正當なる概念を有すと信ずる人は、試に自問せよ。余の有する虎の概念は、虎を見たる人はその頭を撫しその手を己の掌上に揚げしむと余をして信ぜしむるが如きものなるやと。彼は輙ち事物の心象には、ゼームス教授の巧みに言ひ顯はしたる所謂『緣縁』(Fringe)ありて、此のものが直ちに虎は犬の如き家畜と同斷に取り扱ふべからざるものなることを知らしむることを知るべし。吾人の有する虎の概念中には、單に『虎』なる觀念或は語に親昵なりとの感、或は若し尋ねらるれば何時にても虎の性質を適當に描寫し得との信念として一時的意識に現はるゝ所の感情狀態あり。然るに、親昵なる名或は心象に對する此等の安靜感情そのものは、卽ち此の種の事物に對して如何に行動すべきやを吾人に告ぐる傾向の表示なり。若し自己の概念は正當なるものなりとの信念に十分の根據あり、而して吾人若し此の概念をして單に斷片的なる心象或は言語記憶たるに止まらしめず、十分に之を意識に明現せしむるときは、吾人は則ち全概念の內には、『行動の考案』ともいふべきもの、詳言すれば

社會的活動は此等の行動の考案を明瞭なる意識にしむる手段なり

此の種の事物を描寫說明するに適する行爲法の包含せらるゝことを發見すべし。

一一二、由來、概念の性質の心理學的說明は、殆ど皆概念の意識の如何なる段階に於ても現はるゝ斷片的心象にのみ注意して、事物の概念を比較的完全に描寫するに必要なる精神作用の全部を考察することなかりき。是を以て概念の傳來的說明は通常概念と行爲との關係を全く閑却するに至れり。さりながら、若し此の關係にして存すとせば、卽ち若し完全なる概念とは事物の性質を描寫說明するに適する行動の意識的考案なりとせば、概念の發生に關する心理學上の問題は、單に吾人は如何にしてかゝる行動の考案を明かに意識するに至るやといふ問題に歸著すべし。何となれば、前にも述べたる如く、極めて習慣的となれる行動は、特殊の事情ありてその構造に注意を惹くにあらざれば、通常明かに之を意識することなければなり。

此の問題に對する解答は已に吾人の述べたる所なり。卽ち、已に述べたるが如く、一切吾人の概念は社會的條件のもとに作られたるものなり。而

して事物を記述し、描寫し、說明する方法は、全く交通の動機に依りて、換言すれば他人の行爲を模倣するといふ傾性と自己の精神的態度を他人のそれと比較するといふ傾性とに依りて、決定せられたるものなり。此の事實は、何故に社會的對比が、吾人をして事物のみならず、事物に對する合理的行爲法をも意識せしめ、又絕えず之を意識せしむるに至りしやを、說明するに餘りあり。

概念の模倣性

又一切複合概念の根本的、模倣的性質は吾人の最も深遠なる思惟作用、即ち緻密なる科學的概念の一切に於て現はる。此の如き概念は圖式の製作、實驗の擧行、黑板上に公式を書くこと、或は順序よき言葉を以て事物を記述すること等に依りて、最もよく表はさるゝものなり。此の點よりいふときは、一切高等なる概念はその深遠にして的確なる丈それ丈多く事物の意識的模倣を包含すと斷ずることを得べし。而して一事物に對して吾人の用ふる模倣法が、規則正しく幾多の事物に適用され得るを以て、此事の概念は概括的なり。

數の觀念
圓の概念

數の觀念はよく此の原理を說明す。即ち、數の觀念は計算といふ運動活動及びその結果の略式なり。又圓とは直線の一端を定め他の一端を自由にして平面の上を回轉せしむることに依りて作られ得る曲線なりとの幾何學的概念は、概念が事物の描寫法の記憶と同一物なることを示す他の實例なり。要するに、吾人は事物が如何にして造らるゝや、或は如何にして描寫に依りて模倣的に再建せらるゝやを知る限に於て、事物の精確なる概念を有す。若し吾人の模倣力にして停止せんか、的確なる概念力も亦停止す。一切の科學は事實を記述せんとする努力、換言すれば實際世界に對しその模倣を建設せんとする努力なり。此の故に、明確なる心象は常に吾人の行動に關係を有することを考へず、徒らに心象のみを以て概念作用を說明せんとするものは、畢竟空論たるに過ぎず。さりながら、吾人をして此の行動を意識せしめ、又如何に抽象的觀念を作るべきやを敎へたるものは、實に吾人の社會的生活なりとす。

判斷の發達

一一三、判斷(Judgement)と稱する精神作用は思惟作用の第二の緊要なる

は社會的條件に基づく

方面なり。判斷には幾多の他の方面ありと雖も、その眞髓は事物の穩當適切なる描寫として提供せられたる或描寫を承認若くは否定する作用といふにあり。今述べたるが如く、概念は人の寫眞に類比すべき描寫なり。而して判斷作用は寫眞師の送りし寫眞が眞に實物の描寫として價値あることを承認或は否定する作用に類比すべきものなり。さりながら、提供せられたる事物の描寫を承認し或は之を否定するといふ批判的意識が出來、正誤の間に明敏なる區分を立つるに至るは、吾人が幾度となく自己の判斷を他人の判斷と比較し、事物に對する他人の表出、その態度を批判し、承認し、或は否定したるが爲なり。社會意識の條件が思惟作用の形成に必要なることと之に依りても明かなり。

推理作用發達の社會的方面

一一四　推理作用(Process of Reasoning)は思惟作用の第三の方面にして、概していふときは、提供せられたる概念及び判斷の結果を考ふる作用なり。即ちいはゞ此等の概念或は判斷を原物となし、此等を正しとしたる場合にその内に包含せらるゝ結果を、新らしき見地より考ふる作用なり。心理學者は屢々推理作用を以て、主として觀念聯合の作用なりとなす。而して觀念聯合が推理作用の各部に關係することは爭ふべからざる事實なり。概念及び判斷は必ず習慣的活動を表はす。思惟は經驗の結果にして、思惟作用の内には習慣の理法に依りて深く影響せられざる何物をも見出すことは能はず。さりながら、推理作用を以て單に心象の聯合作用なりとなすは、固より推理作用の一面を穿つものなりと雖も、而かも未だ其最も重要なる方面を忘却したるの譏を免るゝこと能はず。又已に述べたるが如く、一切の思惟作用從て一切の推理作用は類化作用を包含す(**九六**)。さりながら、思惟作用が類化作用のみにあらざることも、亦已に述べたる所なり。推理作用は何れも以前の行動の結果として生ぜらるゝ事柄に對する新らしき反應を包含す。推理作用の眞髓は、全思惟作用の眞髓と等しく、余は單に心象の浮び來る方法に關係するのみならず、此等の心象或は心象の暗示せる事物を如何に取り扱ひつゝあるやの意識にも關係すといふにあり。推理の際に考へらるゝ所は、主として以前の行動の結果なり。推理作用は此等以前

の行動を基礎として、その上に建てられたる新らしき判斷を包含す。

例へば、或説明圖を引きつゝあり、而して直線の上にB點をA點の右に置き、更にC點をB點の右に置きたりとせよ。是れ事物排列の性質を表はす所の一つの描寫をなせるなり。是に於てCはBの右にあるが故に、それ丈Bより多くAの右に位せざるべからずとなし、而して更に此のことは此の説明圖が表はす事物に就ても眞ならざるべからずと斷ずるときは、吾人は即ち推理せるなり。此の如く、推理作用は以前の行動及び判斷が何を意味するやを新らしき見地より案出する作用なり。何か過失をなせる小兒に『汝の爲したる所を見よ』といふは、正に推理作用の眞髓を生ぜしむるものなり。推理は此の如く以前の思惟行動の結果を新らしき見地より考ふる作用なりと雖も、此のものは決して根本的に新らしき心的傾向を包含するものにあらず。こは全思惟作用に特有なる意識の繼續にして、唯その高等なる程度の意識の繼續たるに過ぎざるなり。

推理は吾人行動の性質及び結果の緻密なる意識を包含するものなるを以て、人類中に於ける理性の全發展史上より考ふるときは、推理は亦社會的條件の結果特に人類間に起りたる諸種の意見及び意見の連續を比較する作用の結果なりといふことを得べし。推理作用の全方法は論爭の結果、詳言すれば世人が事物を描寫する種々の方法を比較し自家行動の結果を考量する作用の結果として、人類の意識に入り來れるものなり。自己の思惟行動に聯絡を與へ、一より他に進まんとする考案に就き、他人が之に批評を加へたる後ならでは、誰かよく推理を學ばんや。一般思惟作用と同じく、推理作用は初め豐富顯著なる感情及び複合情緒を具有せる條件より發達するものなり。詳言すれば、推理は初め激烈なる意見の衝突より起りたるものなり。而して冷靜なる理性は、他人をして自己の行爲法を取らしめ、又自己の諸行動が如何に連結せられしやに關する自家の見解を取らしめんとする、激烈なる努力に基いて發達したるものなり。概念の作用を以て行爲の考案を作る作用なりとせば、推理の作用は他人をして此の考案を取らしむる樣に之を描寫せんとするより生ずる作用なりといふべし。説服及び

自識發達の社會的方面

對反は、精神發達の初期に於ては、常に著しき熱情と聯合するものなり。社會的目的を達するに單なる熱情の無效なること、說服的機才の發達すること、及び世人をよく一致せしむることに依りて作られたる社會的習慣を漸次精練すること、凡そ此等は推理作用を發達せしめたる原動力なり。

一一五、 終りに一切知的作用中、最も高等にして最も複雜なる作用、即ち一般に『自識』(Self-consciousness)と稱せらるゝものに關係する作用、詳言すれば自我即我(The Ego, the Self)が自己の生活、活動、及び考案に就て有する意識に關係する作用を極めて簡單に說明せんとす。凡そ何人の我と雖も、それが意識に入り來るは、唯他の我との對照上入り來るものなり。若し自己の行爲、感情、及び理想を他人のそれと比較する機會なかりせば、何ぞ自己の處世案、自己の品性、自己の諸習慣の間の一般聯絡、自己の生命の價値、その他吾人の現在意識が我に歸する所の種々の特性及び屬性を意識するの要あらんや。固より我の發達するや、此の我は開卷の始めに述べたる內的生活(即ち他人の內的生活の到底接近すべからざる、又他人の內的生活より全く切斷せられたる、かの內的生活)を構成するあらゆる意識狀態をその內に包含するは事實なり。さりながら、此等の意識狀態が內界として獨立の世界を構成する爲には、何か之に比較對照する他の事實世界なかるべからず。而して吾人をして他人の內的生活より全く獨立したるものとしての吾人の內的生活の概念を抱かしめたるものは、實に他人の觀念及びその心意及び意識狀態の觀念なりとす。

所謂經驗我(Empirical Self)、即ち尋常の經驗に上る我の概念はその中心を最も重要なる有機感覺の或もの、及び吾人の生活中最も持續的にして最も著しき快不快、安不安の感情に有するものなり。さりながら、唯此の如き有機感覺及び感情を有すといふ丈にては、何故に吾人が之を以て特に我に屬すと考ふるやの理由を說明するに足らず。吾人は如何にして先づ自己の經驗と他人の內的經驗とを對照するに至りしや、而して然る後、社會的對反が此等の有機感覺を著しからしむる所より、如何にして此等の有機感覺を特に吾人の獨立及び自我の直接表號なりと考ふるに至りしや。之を知ら

んと欲せば、必ず社會的生活が如何に此等の有機感覺を重要とならしめしやを見ざるべからず。

我は通常編制せられたる行爲の考案に聯關して意識に入り來ること、已に述べたる所に依りて明かなる所なり。吾人の社會的自識は吾人を導いて此の如き考案を作らしめ、又之を他人の考案と比較せしむ。此の故に、吾人は人なりとの吾人の自識は、思惟の一般性質の說明に於て述べたる、かの社會意識と高等知的發展との關係の極端なる事例に外ならず。

心的新生性の可能に關する問題

第十三章、心的新生性の條件

一一六、被敎化性を論ずるに當りて、吾人は到る所經驗幷に行爲の嶄新性(Novelty)を考量するの必要を感じたりき。さりながら要するに、此の如き嶄新性は主として之を外來刺戟及びその入り來る順序に歸したりき。卽ち之に從へば、新習慣は一定の刺戟ABCDが有機體に働くが爲に起るものにして、此等の刺戟は今まで決して此の如く共起するとなかりき。されど、その一度此の如く共起するや、これが結果たる腦髓作用abcdは習慣の理法に依りて反復結合され、遂に一層容易に喚起せらるゝに至るものなり。

尤も新習慣の形成せらるゝ際に起る事柄が、悉く外來刺戟及びその反復に歸せられ能はざることは、吾人の已に觀察したる所なり。何となれば、習慣の漸次完成せらるゝは、內部に、或傾向の存するありてその不用要素を省略し、以て漸次之を的確ならしむるに由るものなればなり。此の傾向は有

機體の一般的順應性(Adaptibility)に原づくものにして、吾人は此の如き傾向の詳細なる研究を生物學に委ねたり。さりながら此の傾向を除く時は、習慣の獲得及び融合の作用は悉く一樣の範類に屬する特質を有するものなり。一樣の範類とは、知的方面及び意的方面に於ける吾人の全被敎化性を決定する所の範類卽ち是なり。例へば、類化は新刺戟が有機體に導きたる嶄新性を極減せんとするものにして、意識狀態の分化も亦習慣の理法の例證に外ならざることは、吾人の觀察したる所なり。蓋し分化とは、繼時的行動の習慣が一度獲得せらるゝときは、此のものは同時的事實の相異の意識を決定するものなりといふ事實に原づくものなればなり。その他、注意作用も習慣の理法の一例にして、行爲の編制も亦之と同斷なり。此の故に有機體或はその心意に職由する新生性を容るべき餘地は、全く存せざるが如く見えき。

さりながら、吾人は序論に於て心的新生性(Mental Initiative)が少なくも發明の現象に於て、所謂自由意志の行動に於て、更に又一般に『自活動』と稱する作用に於て現はるゝことを述べたり。今や終りに臨で、少しく詳細に此の方面の考察を爲すを要す。而して此の心的新生性の眞否を公平に評隲するに被敎化性を支配する作用に歸せられ得ることを發見するに至るも、或は此の如き作用に歸せられ得ざることを發見するに至るも、吾人は決して之を怪しむべからざるなり。

最近生物學は進化の因子として所謂『自發的變性』なるものを認めたり。而して此のことは心理界に於て全然外圍の結果と見做すべからざる嶄新なる行爲を生じ、全然過去習慣の必然的結果に歸すべからざる嶄新なる心的結合を生ずべき傾向の存在し得ることを認めしむる導火線となれり。心理界に於て此の如き比較的嶄新性の可能なるは、猶ほ動物界に於て身長、保護色及び遺傳機能の變性の可能なるが如く、少しも異とするに足らざるなり。精神を具有せる生物の自然界に於ける地位を概觀するに、その有機體は多少嶄新なる活動を新生すべき場所として、特に意義を有するもの

如し。此の如き嶄新性が沒理法を意味せざることは、吾人の已に述べたる所なり。

心理學者は以前の出來事と何等の法則的關係を有せざる事柄に興味を感ずべくもあらず。各科學が事實を研究するは、此等の事實の間に法則に符合する事例を發見せんが爲なり。然るに自然は無機界に於てすら所謂評點(Critical point)なるものゝ幾多の事例を示しつゝあり。評點とは一種の作用が終り、之と全く異りたる作用が突然に始まる所をいふ。而して學理の進歩とは固より此の如き評點に於ても、その物理作用の間に絶對的斷絶なきことを發見するに基づくものなり。さりながら、此の事實は決して評點の科學的興味を殺ぐものにあらず。已に無機界に於てすら評點あり。況んや、精神を具有せる生物の發展に於て、豈に此の評點なかるべけんや。即ち精神を具有せる生物の發展中には、著しく嶄新なるものゝ現はるゝ所あり。而かも此の嶄新性は全然外圍と有機體との關係に依りて決定せらるゝものにあらずして、一部分は有機體自身に起因し、被敎化性を支配する理法に歸せられ能はざる因子に依りて決定せらるゝものなり。有機體或は心意の發展に於ける此の評點が絶對的斷絶にあらざることは、吾人固より之を疑はず。さりながら、此の事實は決して心的新生現象の著しき興味を殺ぐものにあらず。

行動の遺傳は最初は不完全にして漸次に發達するものなること

一一七、 吾人は今まで行爲發展の基礎たる本能を以て、遺傳の既成產物なるが如く述べ來れり。即ち、外來刺戟が本能を喚起するときは行動となり、之が中樞神經系統に根跡を止め、以て習慣を作るものなりとせり。さりながら、幼時或はその後に於て實際本能の現はるゝさまは、決して此の如く單純なるものにあらず。一般に最も重要なる本能は少しづゝ徐々に現はるゝものにして、決して或特殊の反應に既成されたるものとして現はるゝことなし。唯或種の行動に就て極く大體の方向のみは定まり居れど、最初は極めて未熟拙劣なるものなり。高等脊椎動物に於て此の如く本能が既成され居らざることは、個體の發展上頗る重要なることなるが如し。蓋し自己の處する特殊の境遇に應じて特殊の順應を爲す樣に個體を練習せし

むる機會を與ふればなり。されば、水鳥も初めは游泳を學ばざるべからず。而かも徐々に學ばざるべからず。又嬰兒が匍匐し、攀上し、歩行する迄に、その豫習に長き時日を費すは、極めて明かなる所なり。ミス、シン(Miss Shinn)氏は兒童の發達(Monograph on The Development of a Child)と題する緻密有益なる研究錄に於て、氏の研究せる嬰兒に現はれたる現象を極めて精細に論述せり。匍匐、攀上、歩行等に必要なる行動は孰れも皆極めて徐々に獲得せらるゝものにして、尤も兒童が各自の境遇に應じて人間普通の運動力を獲得するに至る徑路は、一々遺傳的構造に依りて豫定せらるれども、その練習法の詳細に至りては、決して遺傳に依りて豫定され居らざるなり。從て此の如き活動の發達は、その各段に於て、各兒童の境涯に應じ、多少の變化あるを免かれず。兒童は決して既成されたる本能的順應を有せず。幼時の習慣特に運動の如き複雜なる作用は、極めて徐々に發育するものにして、永く拙劣の狀態にあり。尤も其の間も、幾分かは外圍に自己を調節するものなれども、その調節尚不十分にして、容易に效果を奏するに至らざるなり。

此の事實が個體の初期の訓練に及ぼす效果

一一八、此の原理は高等なる合理的習慣の基礎をなせる一切の本能に就ても同樣なり。精神の程度愈々高ければ外圍に自己を順應せしむることを學ぶことも愈々遲く、本能的傾向の最初の發現よりそれが定まりたる行爲と成り終るまでの階梯は、愈々拙劣なり。小兒未成年者が一人前に生長するまでに、如何に永く拙劣の時代を經過するかを見よ。又或職業或は或技術に熟達するまでに、如何に永く徒弟時代を經過せざるべからざるやを見よ。此の如き發展の進路中に於て、遺傳に依りても詳細に豫定せられず、又被敎化性のみに依りても容易に說明され能はざる個人行爲の變性が絕えず現はるゝは、極めて見易きの理なり。何となれば、吾人の本能的傾向は神經中樞が成熟するに從て徐々に現はるゝものなりとせば、吾人行爲の外部發表は、經驗及び遺傳に依りて決定せらるゝのみならず、幼少時代に於ける神經中樞發育の個人的不可知的なる現象に依りても定められるべければなり。

吾人の腦髓は生れながらにして、あらゆる神經單位を具有するが如しと

雖も、實際その發達は生後長時日を經て成さるゝものにして、特に最初の七箇年間に於て、各部の間に絶えず構造上及び機能上の新結合を生ずるものとす。此等の結合は單に有機體の遺傳的傾向に依りて又全然習慣の理法に依りて決定せらるゝものにあらず、亦發育の事情に依りて決定せらるゝものなり。此の發育の事情は該有機體の實際行爲に依りて影響せらるゝこと、固より論を俟たず。さりながら、習慣が以前の行爲に依りて決定せらるゝが如き方法に於て、行爲に依りて決定せらるゝものにあらず。從て人類の未成有機體の行爲に於て豫知すべからざる變性の現はるゝことを說明する因子、別に存在せざるべからず。此の因子は有機的發育卽ち是なり。有機的發育といふも、或時期例へば破瓜期に於て大に新らしき本能が現はるゝが如き現象は、茲にいふ變化性の現象として取り扱ふべき限りにあらず。茲には絶えず習慣の理法に從て練習を受けつゝある神經中樞及び神經結合の發育に依りて決定せらるゝが如き現象を論ぜんとす。詳言すれば、遺傳的本能に依りても又單なる被敎化性の現象としても十分に說明さ

未順應的行動に對する未成有機體の固執

れ能はざる、而かもその性質に於ては大體順應的なるが如き、習慣の變化を論ぜんとす。匍匐兒童の運動の漸進的編制を決定する變性の如きは、大に此の題目の中に屬すべきものなりとす。

一一九、 さりながら、茲に此の作用と密接に相聯合する他の作用あり。此の作用は行爲發展の理論的說明に於て一般に忘却せらるゝ所なりと雖も、吾人の全有機生活に取りて極めて重要なるものなり。夫れ匍匐兒童の發展を追跡するに當りて特に吾人の注意を惹く所は、兒童がその無效なるに關らず、幾多の未順應的なる運動、幾多の尙不用なる行動に固執すること是なり。ミス、シン氏の研究に依れば、小兒は度々反復試行する內的衝動を有し、此の衝動の爲め喜で或作用をなし或は之に固執するものゝ如し。

ボールドヰン (Baldwin) 敎授はその著兒童及び人種に於ける精神の發達 (Mental Development in the Child and in the Race) と題する書に於て、此の「反復活動」が模倣及びその他の知的機能の發展上極めて重要なることを特筆せり。此の如き行動は固より本能的傾向に基くものなりと考ふることを得べし。

さりながら、試行に固執するといふ一般的本能は、物を定視するときに視線を集めるといふが如き特殊的本能とは異なり。此の特殊的本能はそれ自身已に直接に順應的なる本能なり。之に反して未順應的なる行動に固執するといふ一般的傾向は、必ずしも直ちに有機體に有用なる結果を生ずる傾向にあらず。又その順應的なると然らざるとを問はず、如何なる種類の行動が爲さるべきやを精密に豫定する傾向にもあらず。熱心なる兒童は外圍に依りて刺戟され、茲に何等かの反意を爲すと雖も、此の反應は身體の未成熟なる爲め極めて不完全に外圍に順應せらるゝに過きず。外部より觀察するときは、該兒童は何事をかなさんとしつゝあるも、その果して如何なることを爲さんと欲するやを、自ら知らざるものゝ如し。思ふに、此の特殊なる行動は未だ完全に發達せざる或本能の表出なるべし。さりながら、茲に他の本能現はる。即ち、單に固執するといふ傾向是なり。此の傾向は極めて一般的のものにして、兒童が一度爲じ始めたることは、それが直ちに順應的なると否とに關らず、種々之を反復せんとする傾向なり。

此の傾向が兒童生活の大部分を占むることは、何人も自ら觀察する所なり。ミス、シン氏の被驗者は匍匐、歩行、攀上の習得時代に於て、絶えず種々の方法に於て此の固執を現はしたり。此の固執は已に或重要なる或は左なくとも或有用なる反應をなしたりとの兒童自身の觀察の結果に出でたる固執にはあらずして、屢々描技に對する固執なり。余が先に此の固執を一般的傾向と稱せしは、之れが發育中の有機體の旺盛なる活力の普通の表出なるが如く思はるゝを以てなり。且つ此の固執は種々の方向に適用され得る表出にして、從てそれ自身にては如何なる活動に固執すべきやを豫定するものにあらず、唯幾多の不完全なる本能的傾向の內、その何れかゝ一度始めらるゝときは、幾度も之れが反復せらるべきことを豫定するに過ぎざるものなるを以てなり。此の傾向は意識上には感情となりて現はるゝものにして、兒童は此の感情の語を以て偶然の經驗が未熟本能に作用して生じたる行動を評價す。觀察者は通常此等の感情を快感情なりと解釋す。外圍に對する新らしき特殊順應の獲得は、その基礎を有機體の『昂進活動』

(Heightened Activities)に有することを特筆唱道せるボールドヰン教授は、進化の初期に於ては、此の昂進活動は快感情の伴象なりとせり。而して此の說が或程度まで大に眞理なることは、固より疑を容れず。さりながら此の種の活動は、進化の初期に於てすら別に快ならざるが如く思はるゝ場合に已むを得ず現はるゝが如きこと多きを以て、吾人は之に就て今少しく廣義の見解を爲さゞるべからず。吾人の見地よりするときは、初期の活動に伴ふ感情は快感情よりも寧ろ不安感情なりとす。

刺戟が尙未熟なる神經系統に働きて生ぜらるゝ行動は、拙劣にして何等の滿足なる結果を生ずること能はず。その結果は如何といふに、勿論健全なる有機體の活動は、その結果の如何に關らず、それ自身にて愉快なることあり、又愉快なることを多しとす。此の場合に於ては、兒童はその行動に快を感じ、而して之を反復す。此の反復は習慣の一般理法の表出にして、同時に又快なる興奮の普通の效果の表出なり。ボールドヰン教授は、一切此の如き反復は氏の所謂『循環反應』(Circular reactions)てふ有機體の根本的傾向に基くものなりとなす。『循環反應』とは或刺戟に對する反應が更に刺戟となりて、出來得る限り再び繰り返へさるゝが如き反應をいふ。此の故に再三反復せらるゝ行動は、悉く『循環反應』に屬す。昂進活動の意識的伴象が快感情なることを許し、而してその結果假令如何に不完拙劣なるにせよ、兎に角或種の反應の起ることを許し、而して更に循環反應なる遺傳的傾向の存在を有機體に許すときは、反復的試行の傾向は實に有機體と外圍との全關係の自然的表出なりと考ふることを得べし。

さりながら、吾人自ら意識的に同樣の作用を觀察し得る場合に就て考ふるに、意識的伴象は必ずしも快にあらず。此の如き場合に於て、吾人は唯結果が不滿足なることを感じ、不安を感ずるのみ。此の不安は快苦の方面よりいふときは、苦なることあり、或は比較的中性の感情なることあり。さりながら、一切此の如き場合に於ける感情は、著しく不安感情にして、何處までも反復試行するといふ一般的有機的傾向を伴ふものなり。此の反復的試行は、ボールドヰン教授の唱へたる理由に依り、主として『循環反應』の連鎖の

形に於て現はるゝことあり。さりながら、此の反復的試行は又他の種類の不安と代はり、或新らしき方向に於ける運動の努力となることあり。不滿なる動物は固執す。さりながらその境遇のもとになされ得る何か他の事柄の不安的搜索に固執することあり。而して反復的試行は單に此の不安の偶然の結果に外ならざるやも計り難し。何となれば、拙技の反復は最近の經驗に依りて得たる比較的僅少なる反應法の一なるを以てなり。何れの場合に於ても、此の如き活動中に包含せらるゝ或種の行動に固執することは、有機體を絕えず外圍と新らしき關係に置かしむるものなり。又未熟の有機體が適當なる順應を獲得するに必要なる神經結合の發育を促成せしむることあり。一般に愉快に拙技の反復に固執し或は不安に何か出來得る事の試行に固執するといふ傾性の結果として生ぜらるゝ傾向は、それが最も有力に行動に現はるる時には、直接に順應的ならざるものなり。且つその結果は遺傳に依りても又有機體の今までに經驗したる外圍との關係に依りても悉く豫定せられざるなり。或何物かを獲得せんとする此の

未順應的行動に對する
既成動物の
不安的固執の
說明

漠然たる奮鬪の最も重要なる結果は、若し此の限なき實驗をなし外圍と種々の關係を作りみるといふ素性なかりせば、到底獲得ずること能はざりし順應を獲得するの機會を有機體に與ふるにあり。

一二〇、右に述べたる作用の意義を明かにせん爲に、二種の相異りたる實例を擧げん。一は兒童より一層下等にして一層單純なるものゝ例、一は遙かに複雜なるものにして、吾人自身の現在意識に近きものゝ例なり。

今檻の內に幽閉せられたる動物が逃走せんとする場合、或は戶外に閉め出されたる家畜が內に入らんとする場合を考へよ。此の如き場合に於て動物は本能又は既得習慣に依りて外圍に望ましき順應をなすこと能はず。動物は試行し、奮鬪し、而して失敗す。その結果は如何といふに、幾回か試行したる後遂に失敗の苦痛に堪えず、再び試行するの氣力全く衰へて已むなく外圍に屈服することあり。是丈けにては別に珍らしき現象もなく、悉く感性、本能及び被敎化性に依りて說明せらるべし。さりながら、動物は逃れ或は入らんとする計劃を繼續することあり。而して絕えず變りたる活動

をなし、以て自己を外圍と全く新らしき關係に置くが如き實驗を幾度となく試行することあり。此等の實驗は遂に該動物の以前の練習が決して用意せざりし行動を生ぜしむるに至ることあり。此の如き行動が遂に起るときは、是れ實に試行及び失誤(トライアンドエラー)の作用の結果なり。此等の行動は固より感性及び被敎化性の實例なり。此等は完全なる順應を包含することあり。而して將來の行爲に向て有用なる習慣を設立することあり。さりながら、此の全作用の內には、尙動物の特殊本能(暖を求め、食を求め、快を求むるが如き)に依りても十分に說明されず、又動物の以前の習慣に依りても說明せられざる一個の特質あり。何ぞや。吾人は次の問題に依りて之を暗示せんとす。動物は一見絕望的なる條件のもとに、幾度の失敗にも關らず、何故に固執せしや、何故に此の如く非順應的なる活動に固執せしや。

此の問題に對する解答は、往々該動物の苦痛感情の語を以てなさるゝことあり。曰く、該動物は食物或は他の快樂を得て、過去の經驗に基く或觀念即ち目的の到達に依りて生せらるゝ觀念を有せんとする欲求を持續せるなりと。果して然らば、固執の理由は被敎化性と既設習慣とに依りて說明せらるべし。さりながら、此の如く動物の感情より說明せんとする說は、畢竟曖昧なり。蓋し奮鬪は失敗と同じく苦痛なり。而して奮鬪の苦痛が缺之の苦痛以上となることあり。到底望なき奮鬪に於ては屢々此の如きことあり、而して動物は遂に運命に服從す。さりながら、此等兩苦痛の一が他より大となるは、何に依りて定まるか。是れ勿論動物自身の神經構造に依るものなり。

さりながら、此の神經構造を考ふるに當りて、吾人は更に他の事實を考へざるべからず。動物の內には旺に固執するものあり。此の如きは遺傳的傾性に依りて然るものなり。如何に苦痛なりとも、彼等は力の盡き果つるまで決して止まることなし。されど多くの點に於て感情の之に及ばざる動物は、比較的靜穩なり。此等は容易に屈服す。此等兩種の動物の相異は、固より快苦の語を以て之を說明することを得べし。さりながら之と同じく、又不安及び安靜感情の語を以ても之を說明することを得るが如し。詳

言すれば快苦と關係するよりも寧ろ活動の持久及び變更と多く關係せる神經的素性の語を以ても之を說明することを得るが如し。此の素性そのものは、吾人人類及び下等動物に於て極めて變性の多き所なり。例へば馬は大にその原始的本能に反せる苦境に早く屈するを以て馬具を裝置することを得れども、斑驢は馬具を裝置すること能はず。蓋し斑驢は苦痛を感ずること馬より大なるが爲にあらずして、實際奮鬪に固執すること馬よりも永きを以てなり。凡そ此の如き場合に於て、卽ち動物が或種の行動に固執し、試行及び失誤の作用を呈し、而して遂に順應的反應を成就するが如き場合に於て、一時一見無用なるが如く思はるゝ活動を生ずる因子あり。されど之が旋て外圍と適當なる關係を設定せしむる所の因子なり。此の因子卽ち此の格段なる固執は、該動物の素質に屬するものなり。此の如き傾向を有する動物は、大抵或境遇に處して順應的新習慣を作り、或は舊習慣を順應的方向に變化す。此の如き傾向の基礎となれる昂進活動は、不安の範類に屬する所の活動なり。此等は快活動なることあり、或は苦痛を逃れんとする活動なることあり。さりながら、專ら快苦の語のみを以て說明せらるべきものにあらず。吾人は之を以て種々なる固執的實驗に導く活動、卽ち不順應なる行動の反復及び變性に導く活動なりと說くを最もよしとす。

既成人に於ける同樣の不安的固執の說明

一二一、次に吾人人類に現はるゝ場合を考へんに、此の場合には問題が頗る多種多樣にして、或は實際問題なることあり、或は有意的決意の問題なることあり、或は主として知的問題なることあり。吾人はその何れを選ぶべきやに苦しむ。要するに、外圍が吾人を刺戟して行動を喚起す。されど吾人は現在之に順應すべき何等の素養を有せず。吾人の爲す順應は不完全にして絕望的なり。吾人は如何にすべきや。此の如き場合に於ける吾人の活動を單に快苦の語を以て說明せんとするは、畢竟徒勞なり。固より吾人の現在失敗は苦痛なり、而して吾人は此の苦痛より逃れんとす。又目的不成就の考は勿論之を達せんとする新欲求を喚起す。さりながら、此の如き苦痛より逃れんとする途は種々あり。更に目的到達の工夫をなし、之に依りて逃れんとするは、その事自身が已に苦痛なり。其は更に新らしき

絶望を包含す。さりながら、一度此の奮闘を放棄するときは、苦痛は輙ち滅ず。此の奮闘の繼續或は放棄は何に依りて決定せらるゝか。之を決定するものは、深く吾人の本性に根生するものにして、人に依りて大にその種類を異にし、且つ快苦よりも寧ろ不安、安靜の感情として、最もよく意識に現はさるゝものなり。此の決定因子は、不完全と知れたる特殊行動を種々と反復すること或は他の何處かに此の問題の偶然の解決を探求すること、固持するといふ吾人の傾性(Disposition)即ち是なり。若し此の傾向が十分優勢なるときは努力を繼續し、その甚だ苦痛なるときと雖も尙之を繼續す。その極端なる場合に於ては『斃れて後已む耳矣』といふが如き意氣を生ずるに至ることあり。此の場合に於ては、成功して外圍に對する新らしき順應を成就するか、或は全く自己を壞滅するかなり。此の固執的傾向の現はるゝに當りて注意さるゝことは、それが極めて一般的傾向なること是なり。此の傾向は一般的本能の表出にして、此の本能と特殊習慣及び特殊本能との關係は、猶指南の一般經驗が空間に於ける一點の位置の特殊經驗に對する關係と同樣なり。こは特殊の刺戟に依りて起さるゝものにあらずして、吾人が或事を企て而して之に失敗したりといふ自覺に依りて起さるゝものなり。而して吾人が初めたる仕事に聯關せる他の反應を試みるといふ一般的努力の外、何等の特殊行動を吾人に豫定せず。此の如く、最初は唯吾人を拙順應に固執せしむるに過ぎざるものゝ如し。幸運なる場合には、此の傾向は極めて愉快なることあり。さりながら、ボールドキン教授の所謂快感に原づく昂進反應(Heightened reactions)の語を以て說明され能はざる場合にも現はるゝことあり。又余はボールドキン教授が苦痛なる固執的活動の存在を說明せんが爲に用ひたる特殊的說明をも全部は之を承認すると能はず。唯確實なる所は、吾人の習慣の極めて嶄新なる變性を獲得する力は通常此の持久力の如何に依るものなりといふこと是なり。是れあらゆる道德家の均しく實際上に認むる所なり。不安なる人は失敗者なることあり。さりながら、最大の成功をなす人は、必ず或點に於て驚くべく不安なる人なり。此等の人は目下特に必要ならざることに固執す。彼等は順應の拙惡

順應以前の行爲に於ける如き固執は及び精神行爲に於ける重要なる新生の源泉なり

なるに關らず、試行に固執す。失敗は彼等を刺戟す。彼等は外圍が尙彼等に敎へざる所を、早晩彼等の類化し得る形に於て彼等に供給することを、外圍に敎ふるものなり。

一二二、是に於て余の主張は人生の行路に現はれ而して專ら外來刺戟のみに歸說され能はざる吾人の習慣の一見自發的なる變性はその主なる原因を此の不安に有すといふにあり。此の不安は時に多少特殊的なる形に於て現はるゝとありと雖も概していふときは特殊習慣の基礎をなせる特殊本能の何れよりもその性質に於て遙かに一般的なるものなりとす。

有機體が不安に本能的作用を實行し、或は不安に新機能設立の機會を搜索することが、一切の重要なる心的新生性の主要條件なりとせば、心的新生性の範圍は非常に狹限せらるゝが如く思はるべし。さりながら、少しく吾人生活の詳細なる觀察をなすときは、心的新生性に殘されたる範圍の頗る廣大なることを知るべし。夫れ有機體の特殊行動は、必ず外圍と有機體の遺傳的傾向とに依りて決定せらるゝものなり。而して有機體の既得習慣は、此等の特殊行動が何處まで以前の行動に基くやを決定するものなり。さりながら是丈けにては、有機體は唯以前の行爲法に固執する傾性卽ちその遺傳的傾向、その經驗、その被敎化性が豫定する所の行動を反復する傾性を有するのみにして、行爲に現はるゝ嶄新性は專ら外圍に原づくものゝ如く思はるべし。さりながら、有機體の種々の反應中、若し嶄新なる外圍及び嶄新なる行爲を不安に搜索するが如き形の反應ありとせば、此の場合の嶄新性は有機體の行動中に現はるゝ所の嶄新性なり。換言すれば、有機體が自ら遺傳したる傾向に基く所の嶄新性なり。而かもその結果として生せられたる行動は、最早祖先行動の反復にあらず、何となれば此等は外圍との嶄新なる關係に依りて生ぜられたるものなればなり。此の場合に於ける有機體幷に心意は、之を譬へば恰も他國に移住したる移住民の如き觀あり。新らしき國に於て彼は新生活を營む、最早祖國の生活に非ず。是れ實に新らしき外圍に基づくものなり。さりながら、此の新らしき外圍は、彼が遍歷せざりしならば、決して來らざりしなり。而して自己自身に存する不安の

兒童の遊戯に就ての說明

結果にあらざれば、誰か逼壓をなさんや。

一二三、今右に述べたる傾向より生ぜらるゝ心的新生性の種類を簡單に概觀せんとす。先づ幼兒の發展に於て最初に現はれ且最も著しきものは、兒童の遊戯に現はるゝ所の新なる行爲及び之に伴ふ心的新生性の諸形なり。グルース(Groos)氏がその研究錄動物の遊戯及び人類の遊戯(Monographs on The Play of Animals and The Play of Man.)に於て論證したる所によれば、遊戯の價値は特に有機體成育後の活動に對するそれの關係に存す。動物或は人類の遊戯に現はるゝ種々の本能は、固より遺傳的本能なり。さりながら、已に述べたるが如く、此等の本能は脊椎動物に於ける一切の高等なる本能と等しく、不完全なる形に於て遺傳せらるゝものなり。從てその表出は、遊戯の際に各自の獲得する經驗に依りて、大に個人的變化を受けざるべからず。遊戯活動はそれが有機體の保存に必要ならざる時になさるゝが故に、若し後年此の如き行動の必要に迫まらるゝまでなされざりしならば到底獲得することを能はざるが如き自由多面なる發展をなすことを得。猫の子は棒に戯むれ、木の葉に戯むれ、或は又他の猫の子と戯むるゝ間に、餌を捕獲する技能を習熟す。若し空腹上已むを得ず餌を追求するまで捕獲活動を爲さゞりしならば、此の技能は到底獲得せられざりしなり。このことは、更に複雜なる兒童の遊戯に就ても全く同樣なり。余曾て之を船長に聞けり。彼は小兒の時、故國の港灣に小帆船を驅りて遊びつゝありしが、その際始めて未熟なる形に於て學びたる航海術に依りて、中年大船を危急より救ふことを得たりと。このことは、幼少時代の自覺的遊戯に聯關して小兒の獲得する無數の技術に就ても同樣なり。今動物或は兒童に於ける遊戯活動の最も著しき特徵は、それが一見自發的なるにあり。然かも遊戯機能の各部は、勿論悉く習慣の理法の結果として、又外圍が有機體に及ぼす直接影響の結果として、說明せらるゝことを得。果して然らば、遊戯活動の自發的性質は何處に存するや。遊戯が飲食逃走の如き他の活動と最も異なる所は、何處に存するや。曰く、遊戯活動はそれが演ぜらるゝ必要無き時に演ぜらるゝが故に、自發的なるか如く見ゆるなり。換言すれば、遊戯活動はそ

の瞬間の事情が命令的に要求するが如き外圍に對する順應にあらず。さりながら斯の如くいふは、これ遊戯機能の自發的方面は特に有機體が示す活動の不安なる溢出にあることを許すものなり。外部より觀察するときは、外界は別に兒童に遊戯を要求せざるが如し。然かも兒童の遊戯は他のあらゆる行動と等しく、畢竟外圍に對する反應なり。感性及び被敎化性を包含し且過去の習慣に基く所の反應なり。然らば吾人は何故にかくの如く遊戯の一見的不要を茲に說明するや。曰く、吾人は彼の幽閉せられたる動物が之を逃れんと奮鬪し、又發明者或は革命者が其技術或は其時代の問題を解決せんと努力する際に、他の形に於て現はるゝ所と全く同樣なる活動の不安なる溢出を、遊戯活動に於て認むるを以てなり。

實際兒童遊戯の場合には、その價値がその時なされし外圍に對する直接調節にあらずして、該活動の豫言的重要ともいふべきものにある幾多の機能あり。此等は祖先活動の反復なるのみならず、一部分は後に重要となるべき機能の前影豫兆たるなり。而して遊戯機能が兒童の生活に於て此の如き重要を得るは、單に外圍が之を暗示するが爲のみならず、兒童の特殊的本能及び特殊的習慣がその遊戯を痛快ならしむるが爲めのみならず、却つて兒童の不安なる熱心、卽ち十分自己の理想を滿足せしむるまで何處までも遊戯活動を反復試行せんとするといふ傾向が彼をして遊戯に熱中せしむるが爲めなり。從て綿密なる觀察者の何人も知るが如く、兒童は遊戯を樂しむが故に遊戯するのみならず、遊ばざるべからざるが故に遊戯するなり。彼等は屢々力の盡き果つるまで遊戯す。彼等は屢々愉快なる遊戯をなすが如く、又屢々甚だ苦痛なる遊戯をなす。彼等の遊戯は時にロイブ（トロピズム）が下等動物に於て觀察したる『向動』の固執性を悉く具有することあり。而して此等のことは、單に多くの社會的遊戯に就て然るのみならず、或る孤獨的遊戯に就ても亦然り。兒童は競爭する對手なき時と雖も、自己の選びたる遊戯觀念の追求に非常に興奮せらるゝことあり。彼は己の企てたる遊戯計劃の成らざるが爲に、泣き或は忿ることあり。彼はその家族、友人が迷惑する程、熱心强固に自己の遊戯觀念に固執することあり。此の如き現象は

屢々病的なるが如く見ゆることありと雖も、その通常の現象は智童の生活に於て最も重要なるものなりとす。而して余の主張は、兒童自身が遊戯機能の編制に寄與する所の新生性は、全遊戯活動がなさるゝ此の熱心、此の固執、此の不安の内に存すといふにあり。

此の新生性は兒童をして舊遊戯の完成及び新遊戯の搜索に多忙ならしめ、彼をして遊友の批難に耐へしめ、又屢々遊戯上兒童間に行はるゝ嚴格なる規律に從はしむ。此の新生性は又屢々兒童をして或種の技術、或種の遊藝に偏熟せしむるとあり。而して此の如き新生性が兒童精神生活の編制に及ぼす所の效果は、兒童が遊戯に依りて學ぶ所の技術及觀念の如何に多種多樣なるかを思はゝ、自ら歴然たるものあらん。幼時の戯曲的擬人の間に現はるゝ諸種の自識及び製圖、手工、手藝、漕艇の如き種々の技術等、凡そ此等は自然の知識及び時々現はるゝ學問上の發明と共に、僅かに兒童が幼時に諸種の遊戯より修得し得る心的財寶の一小部分を形作るに過ぎず。此等は單に所謂兒童の創作力なるものが外部に現はさるゝ二三の形式に外ならず。即ち見るべし、心的新生性に絶大の價値を有する因子は、實に遊戯兒童のかの單純なる固執中に存することを。

青年活動に於ける同樣なる新生の說明

一二四、次に心的新生性の表現せらるゝ第二の方面は、青年製作力の最も盛なる時代に現はるゝ所の青年活動ともいふべきもの、即ち是なり。吾人若し何故に創作的天才がその最初の大著作を著はし、何故に天禀の士が自己の使命を悟り、何故に凡庸なる人が自己の能力を統御して大實業家となり或は老練家となるやを尋ねんか、吾人の解答は必ずや之を先に述べたる感性及び被敎化性の事項に俟たざるべからず。人の爲し得る所はその本能の訓練せらるゝに從て彼が觀察し、感受し、習得し得る所の如何に依るものなり。而して此の如く考ふるときは、人は恰も外圍の造物なるが如し。ざりながら、茲に外圍の到底決定し能はざる一物あり。此の一物は彼の特殊的本能、即ち例へば彼をして或は畫家或は詩人或は政治家或は商人たらしめんとする本能と離も之を決定すること能はざるものなり。此の一物とは外圍が最初之を暗示すると否とに關らず、新らしき調節を探求すると

に固執するといふ有機體の力、即ち果して此の如き目的を得達するの機會ありや否やに關らず、全く不可知なる目的到達の奮鬪に固執するといふ有機體の力即ち是なり。此の固執は有機體が外界に呈出し得る唯一の新生性なり。此のものは個々の場合に於ては一見無用なる活動に對する情熱的感興といふ形に於て現はる。此の如き情熱的感興は或場合には大に有用なれども、又或場合には甚だ有害なることあり。例へば、賭博などに對する情熱的感興は遂に死を招くことあり。此の如く博徒の感興は遂に死を招くの恐ありと雖も、而かもその内には高等なる溺心と同じく、有機體幷に心意に切要なる性質を有する一種の新生性を包含す。此の如き固執的感興なかりせば、即ち不安に痛快なる活動の反復及び變化に固執するといふことなかりせば、有機體幷に心意は全く外圍の奴隷なり。此の如き感興あればこそ心的新生性は現はるゝなれ。人の學ぶ所は固より經驗と機會との如何に依る。さりながら不安活動的なる人物は、自己の目的を表出する手段として外界を見る。從て彼は自己の外圍を錯化す。此の如くして、彼

個人主義と社會主義との句に於ける傾向の固執の不安の説明

の生活は終に宇宙生活の一部分たるのみならず、自己自身の生活となるに至る。

一二五、固執的不安の有する此の種の意義に關する第三の説明は、吾人活動の社會的方面即ち前に社會的被敎化性の基礎を説明するに當りて述べたる傾向に於て、之を見るべし。吾人は前に人は社會的實在として、一方に於ては他人を模倣せんとする强き傾性を有すると同時に、他方に於ては自己を彼等に反立せしめんとする强き傾性即ち自己と外圍との社會的對照を明かならしめんとする强き傾性を有することを指摘せり。自己の社會的活動と他人の社會的活動とを對立せしめんとする固執的傾向は、個人主義(Individualism)と稱する社會的傾向の基礎をなすものなり。個人主義は固より不健全なる形に於て現はるゝことあり。さりながら、若しそれが社會的被敎化性と正當に結合せらるゝ時は、社會的新生性(Social Initiative)ともいふべきものゝ最も重要なる方面を形作るものなり。夫れ社會的新生性は絶えず社會的技術を利用し、絶えず社會的習慣を使用することに基づく

ものなり。さりながら、一切吾人の社會的活動に於ける發明の絶えざる母たるものは『自己自身』といふこと、『自己の精神は自己自身のものなり』といふことに對する合理的なれど不安なる固執的欲求、即ち是なり。即答を靈知せしめ、談話を快活ならしめ、幼時に於ては吾人の限なき疑問を喚起せしめ、成年時代に於ては吾人をして吾人の解答に熟慮せしむるもの皆是なり。主婦をして饗應の明案を作らしめ、教師をして面白き新教案を作らしめ、文人をして新著述を作らしむるものも、亦皆是なり。凡そ此の如き活動の内に包含せらるゝ極めて複雜なる心作用は、悉く習慣の理法及び感性の理法に支配せらるゝものなり。外圍が絶えず發明者の利用する活動及び觀念を暗示し且つ習慣及び練習が絶えず之を支持するにあらざれば、此の如き心作用は到底生ぜらるゝこと能はざるなり。さりながら、余の茲にいはんとする所は、社會生活の變更に對する此の熱心、個人主義的欲求に對する此の固執なかりせば、如何に習慣及び外圍が發明の材料を供給するも、更にその效なかるべしといふにあり。社會的發明力は個人主義的不安に基づく

普通の自動注意は順應以前に於ける不安的固執作用なり

ものなり。而して個人主義的不安は、更にロイブの實驗したる有機體の『向動』の如き、元素的なる生活活動に基づくものなり。社會的成功に重要なる此の活動力を有し、而して社會的對照に對する此の元素的好愛を有する人は、新生者なり。全國民の大部分が此の如き人より成りしは、希臘最榮の時代なり。個人主義は常に元素的傾向、詳言すれば順應的價値なき場合にも熱心に社會的對照の結果を追求するといふ傾性に基づくものなり。要するに『天國は暴力に依りて得らる』。

一二六、心的新生性の條件に關する最後の說明は、普通の注意活動に於て、之を見ることを得べし。 輓近心理學に於ては、通常自動注意を以て一見自發的なる意識作用を了解する上に、最も重要なる因子なりとなす。ヴントは『統覺』なる語を用ひたり。されど、ヘルバルトの如く、類化作用の意味に於て此の語を用ひたるにあらずして、寧ろ注意意識が知的理想に準てその材料を鑄化し、聯合作用を影響し、以て此等をして定まりたる意味と思考とを有する形を取らしむる作用を意味す。ヴントに反對するものは曰

く、果して此の如くんば『統覺』なる語は吾人の所謂感性に依りても又習慣の理法に依りても説明され能はざる精神生活中の一因子を意味するものゝ如しと。又曰く、自己自身の狀態を影響する意識作用なる概念は、形而上學的動機と心理學的動機を混同せる概念なり。心理學者は理性(Reason)が如何にして世界を形作るやを研究するものにあらず。唯人類精神生活の諸現象をありのまゝに觀察し、之に法則を與ふるものなれば、ヴントの『統覺』の如き精神現象に對する曖昧なる影響力に就ては、何等の興味を感ぜざるなりと。

茲にヴントの此の概念に對する反對説の詳細に立ち入るは、余の目的にあらず。又今はヴントの所説を註解し、或は之を評隲すべき場合にあらず。茲にいふべきことは、自動注意の際に起る精神作用は必ず不安の感情を伴ふものにして、此の不安の感情は吾人をして現在知的興味を增進せざるが如き聯合作用に不滿ならしむるものなること、又自動注意に伴ふ腦髓作用は、若し之を放任せば吾人の現在知的興味を妨害するが如き幾多の聯合作

用を禁止する性質のものなること及び吾人の自動注意は常にそれ自身感興の表出にして、即ち上節説述し來りしものと全く同一の元素的性質を有する感興の表出なること、是なり。注意深き發明者は工夫中自己の考案せる美製品に熱中し、注意深き主婦は社會的成功に熱中し、注意深き幽閉せられたる動物は逃走の途を暗示するものに熱中す。要するに固執的に注意するものは何れも皆ロイブの實驗したる『向動』の性質を有する有機體の態度を表出しつゝあり。自動注意は決して超自然的或は無形の力として、吾人の生活に現はるゝものにあらず。事物或は觀念と或種の關係に入らんとする熱心となりて現はるゝものなり。即ち、不安感情に伴はれ、且それ自身は直接に創造的ならざれども、絶えず選擇的なる熱心となりて現はるゝものなり。自動注意に伴ふ有機的條件は、固執的に或種の觀念及び觀念の連續を意識に現出せしめんとし、之と同しく又固執的に他の種の觀念及び觀念の連續を禁止せんとするものなり。此の如き作用の繼續的影響の結果は如何といふに、若しこれなかりせば到底不可能なる或る心的結合が生

【向動】は未順應的行動に對する不安的固執なる生ぜしむるものにして一切新生の基礎は此の向動にあり

ぜらるゝ樣に、外圍と吾人との關係及び吾人の習慣を絶えず鑄化するにあり。此の如くして、自動注意は絶えず日常普通の作用に於てすら、心的新生性を例證しつゝあり。さりながら、その方法は兒童の遊戯、青年の建設的活動、及び個人主義の效果に就て述べし場合に見たるものと、少しも異なる所なし。

一二七、 以上論述する所にして根據ありとせば、一切『自活動』(セルフアクチビチー)の自然史が由て來る所の基礎は、自ら歴然たるものあらん。經驗の結果より離れ、特殊的本能及び練習の影響より離れて、個體の所謂自活動なるものは、或一般的本能、即ち過剩なる固執的活動に對する不安的傾向てふ形に於て現はるゝ所の本能に基づくものなり。此固執的活動は屢々其結果が直接に順應的ならざる場合になさるゝことあり。一切此の如き活動は比較的に自發的なる方法に於て外圍と吾人との關係を變更せんとする傾向を其内に包含す。その最も單一なる形に於ては、場所變更の努力として現はれ、その最も高等なる形に於ては、自動的注意作用として現はる。一切此の如き活動は、不安

實際的效果

感情を以てその特徴とす。その物理的方面に於ては、此等の活動はロイブの唱導したる「向動」の實例なり。此等は異常的にして、危險なることあり。さりながら、その普通の形に於ては、絶えず吾人の習慣を比較的自發的に變化するの用をなす。此等は全然快刺戟に基づく有機作用の昂進に、之を歸すること能はず。何となれば、一般に吾人は不安感情が快感情と全く獨立なることを信ずるの理由を有すればなり。吾人の活動の最重要なる部分に於て吾人は快樂に熱中せず、却て外圍幷に行爲の合理的に滿足なる變化に熱中す。而して心的新生性の最も著しき特徴は、悉く此の如き合理的熱中にその基礎を有す。

實際上の結果は明かなり。精神生活に最も重要なるものは、强熱なる活動の養成なり。教師は此の如き傾向のあらゆる記號を奬勵せざるべからず。又此の如き活動と單に兒童に快を與ふる活動とを混同せざる樣、十分注意せざるべからず。教師の目的は單に『兒童の好む所を爲』さしむるにあらず。合理的に重要なる傾向の何ものかを熱心に爲さしむるにあり。此

の熱心は屢々愉快なることあり。さりながら愉快は附隨物たり。その本質は不安的熱中にあり。此の熱心は晩年に至るまで吾人に伴ふものにして、最早人生の快樂を感ずること甚だ節少なる時に於てすら、吾人は尙屢々深く人生の興味を感ずることあり。シルレルいはく『情熱は去るも、愛は殘らざるべからず』と。而して吾人は本章に於て、一切心的新生性の基礎となれる合理的嶄新の元素的好愛に就て論述し來れりき。

今後の實際的說明の概

第十四章　情的生活及び知的生活の諸種類

一二八、以上精神作用の大要を概觀するに當て、吾人は通常の分類法卽ち知情意の區分法に從て、之を說明せざりき。さりながら、今や感性、被敎化性、及び心的新生性の諸條件を觀察し終りたるを以て、暫らく普通の分類法に歸り、以て日常學校敎師の觀察に入るが如き精神生活の種類及びその缺陷に就き、聊か實際上の考察を試みんとす。凡そ吾人の精神生活は感性及び被敎化性を說明し、且つ心的新生性の條件に從ふものなれども、その內には感情の最も著しき所あり、又知的作用の最も著しき所あり、又外部に現はるゝ行爲編制の特に著しき所あり。精神生活中感情の最も著しき部分を情緖(Emotion)といひ、知的作用の最も著しき部分を知力(Intellect)といひ、行爲意識の最も著しき部分を通常『意志』(Will)といふ。尤も已に述べたるが如く『意志』なる語は專ら意識生活の全部を意味するものにして、從て純心理學

的術語としては、精神生活の分類上、殆ど何等の用を爲さゞるものゝ如し。蓋し意識生活とは外圍に對する意識的反應即ち世界に對する心的態度に外ならず、而して外圍に對する意識的反應とは即ち意志活動に外ならざればなり。このことは『知力』なる語に就ても、亦幾分か同樣に云はれ得べし。此の語は精神生活の或重要なる方面、即ち世界の知識を得る力といふ方面を特筆せるものなり。さりながら、知力の自然史を攻究し始むるときは、此の如き一見的區劃は忽ち消え去りて、吾人は感性及び被敎化性なる題目のもとに述べたる如き、特殊の機能及び作用を見るに至る。又『情緒』なる語も最初は寧ろ吾人が愛し若くは惡む事物の道德的若くは美的意義を吾人の心に暗示するものにして、情緒作用の自然史を吾人に暗示するものにあらず。此の故に、吾人の純心理學的研究は固より此等の語を全然避拒するにあらざれども、成るべく之を避くることに依りて却てよく成功したり。さりながら、精神の實際的研究者は當面の問題に於て己は今如何なる種類の意志作用、如何なる種類の知的作用、如何なる種類の情緒作用を取扱ひつゝ

あるやを討ぬるを常とす。而して吾人は之より此の如き實際的研究者が知、情、意の作用及びその變性に就て起す二三の問題と上來說述し來りし概說との聯絡を計らんとす。本章に於ては、先づ情緒現象の二三を簡單に述べ、且つ情緒生活中に起る變性及び變態の二三を指摘し、然る後『通常』知力なる語を以て總稱せらるゝ精神生活の方面を抽象說明し、知的生活の實際的研究及びその變態を少しく說明せんとす。最終の第十五章に於ては、專ら普通に意志と稱せらるゝ作用に就て、一瞥を試みんとす。

一二九、 吾人の感情は單に快不快、安不安といふが如き單一孤立の形に於て、實際の意識に現はるゝものにあらず。實際上の意識に於ては、吾人は唯一般に所謂『情緒』なるものを有するのみ。情緒の內には比較的緩和なるものあり。之を『氣分』(Mood)といふ。又忿怒、恐怖、愛情等の如き强熱なるものもあり。氣分及び情緒に共通なる性質は、吾人が之を意識するときに、單に感情のみならず、心象、概念、思考、及び外物をも意識すること是なり。而して感情は此等の諸觀念を着色するか、或は外物を估價するものなるが如し。

さりながら、氣分及び情緒はその强度及び持續性に於て大に異なり。種々の氣分及び强熱なる情緒の總目を示し、詳細に之を記述するは、本書の目的に非ず。唯說明の順序として一二の模範的事例を擧げんのみ。先づ悲哀(Grief)の情を說明せんに、此の情緒は苦痛の感情に不安若くは安靜狀態の著しく伴ふを特徵とす。さりながら一切此等の感情は、或事物若くは觀念の周圍に集中するものなり。此等の事物及び觀念なくしては、悲哀は何等の意味を有せず。吾人は鍾愛せる事物の損失を悲しむものなり。次に大に之と對照的なる緩和情緒、卽ち好奇心(Curiosity)と稱せらるゝ氣分を說明せんに、此の場合には不安の感情と快及び輕き苦の感情が觀念に伴なひ之を着色す。而して此等の觀念と吾人の注意及び知的探究作用との關係は、全情緒狀態に特有なるものなり。次に憤怒の情緒を說明せんに、此の場合には中心觀念は何か己に害を加へんとする事物にあり。而して之に伴ふ感情は極めて特有なる方法に於て强度の苦痛を包含し、時に又快及び不安をも包含することあり。

情緒と身體的表出との關係

凡そ此の如き情緒は何れも皆極めて複雜なる條件に基づくものなり。今前に論じたる心理學的興味に從て情緒を分析し、分析的精神狀態或はその連續を以て之に代ふるときは、その內には身體活動の意識あり、事物と吾人との關係の複雜なる意識あり、又比較的元素的なる感情の複雜なる集合ありて、此等がもとの情緒に代はりて茲に極めて複雜なる精神狀態として現はるゝに至ることを知るべし。憤怒せる人は憤怒の對象に關する思考及び信念の迅速なる繼續を有し、また憤怒の對象に對し身體的態度の迅速なる繼續を執る。彼は此の事物に面接するや、種々の不安、不快を感じ、時としては快をさへ感ずることあり。さりながら、吾人の目的は此等の複合狀態を分析するにあらずして、情緒狀態の基礎をなせる條件の性質を出來得る限り簡單に指示するにあり。

一三〇、 最近の研究に於て大に學者の注意を喚起したる學說は、複雜なる情緒に伴ふ感情は、他に如何なる原因の存するに關らず、各情緒は特有の身體的表出を有すといふ事實に基づくこと極めて大なりといふこと是な

り。情緒の起るに當り、吾人が運動をなし本能的或は有意的表出反應をなすは、情緒の特徴として何人も認むる所なり。何となれば、吾人は之に依りて外部より彼は怒れり、恐れり、愛せり等の判斷をなし得るを以てなり。今已に吾人の知れるが如く吾人の意識は運動の感覺及び此等の運動に伴ふ有機的條件の感覺に依りて影響せらるゝものなり。若し吾人の情緒が特有の運動的有機的表出を有すとせば、吾人の情緒意識はそれ自身、表出運動及び之に伴ふ有機的狀態に依りて影響せられざるべからず。此の如くして、吾人の意識的感情の多くは、實際上感情の表出と稱せらるゝものより生ぜらるゝ第二的產物なり。吾人の悲哀は、思はず溢出する外部表出の種類に依りて、その情調を異にす。涙なき悲哀もあり。涙ある悲哀もあり。而して悲哀を構成しつゝある內部心的態度の重要なる部分は、疑もなく如何に吾人が自己を表出しつゝあるかの五官意識に依りて決定せらるゝものなり。此の表出法は大に吾人の遺傳的本能及び既得習慣に依りて決定せらるゝものとす。或方法に於て或外圍に反應するときは、吾人は茲に吾人の反應を感ず。自己の情調を語るに當て屢々いふことあり、『余の鼓動は靜止したり』『余は息の窒まるを覺えたり』或は『余は喘げり』と。詩人は常に此の如く彼等の表出法を記載することに依り、又此の表出法が如何に當事者に感ぜらるゝやを暗示することに依り、讀者に情調を追回せしめつゝあり。されば、『ベイアード、テイラー』(Bayard Taylor) 氏は『セバストポール』の塹壕に於ける兵士が『アンニー、ローリー』(Annie Laurie) を歌ひし時、如何に『兵士の頬上の或物が彈藥の汚を洗ひ去りし』かを告ぐ。外圍に對する第一的反應として本能的習慣的表出運動の此の如く重要なること、而して、情緒は、此の反應の第二的感覺經驗に外ならざることは、ゼームス敎授に依りて特に唱導せられたる所なり。

さりながら、此等內外の身體的感官の一切狀態の外に、純中樞的條件が情緒の調子及びその强度に大に關係することは、亦疑を容れざる所なり。最も輕症より最も重態に至るまでわらゆる程度の腦髓疲勞は、他には容易にその兆候を表はされども、情調の變化に於てはよく現はるゝが如し。腦病

の内には、情調の激變をその主要なる症候とせるものあり。例へば、鬱狂(Melancholia)及び躁暴狂(Mania)として知られたる極端なる神經衰弱の如き是なり。此の如き疾病及び他の事實は腦髓に於ける血液供給の現在條件が情緒狀態の直接原因なることを示すものなりとなす學者あり。

情緒生活の實際的方面

一三一、感情生活　特に之と觀念との結合より成れる所謂情緒生活の實際的方面は、極めて重要なり。其の生理學上の詳細なる說明如何は舍らく措き、如何なる場合に於ても感情及びその表出記號は一般に神經中樞全部の現在狀態の特に必要なる表示なりといふことを得べし。人の現在感情狀態は、その人が此の如き感情を養成或は抑制する如何なる機會を有せしやを豫め知悉する場合の外は、到底それのみによりて直ちにその人の品性及び經驗を判知せしむるものにあらず。瞬間的氣分に依りて人を判知するは、甚だ當を得たるものにあらざるなり。今激怒せる人も、通常は溫和なる自制の人なることあり。此の故に、人の品性はその人の生涯中に現はるゝ最も過激なる情緒或は最も薄弱、恐鈍なる氣分を觀察することに依りて

情緒的變化

最もよく知らるべしとなすは、極めて殘酷、不合理のことなりとす。此の如き判斷を爲すは、實に人を譏誣するものなりといふべし。さりながら、穩健なる觀察者に取りては、情緒的反應は之をその外界原因に照して考ふるときは、能く現在の一般神經狀態を表示するものにして、心理的診斷の上に頗る價値あるものなり。神經衰弱、精神過敏は、前にも述べたる如く、先づ情緒の變化に最もよく現はるゝものなり。是れ何人も等しく認むる所なりとす。さりながら、此の如き過敏の情緒的變化は必ずしも「陰鬱」或は不機嫌の傾向と同一ならず、却てその重態なる場合に於てすら比較的快活に或は溫和に見ゆることあるは、未だ世人の一般に認知せざる所なり。神經過敏の患者は數時間若くは或期間變態的に快活なることあり。是に於て以前の陰鬱發作を知れる彼の友人は思へらく、今や彼は常態に回復せるなり、然らざれば何ぞ此の如く進取的、活動的なるを得んやと。さりながら、情緒狀態の症候的價値はその快不快的外貌よりも、寧ろそれが個人的氣質の常軌より逸する度合に存するものなり。

情緒的「低調」

若し情緒的變化を以て神經過敏の必要なる表示なりとせば、人の常態的情緒の基礎をなせる恆常的通有性の一度發見せらるゝ時は、此の通有性は又その人の神經的素質の根本的範類に關する重要なる表示なりといふことを得べし。此の通有性は必ずしも單にその人の職業上或は運命上より來る優勢なる情緒を意味するものにあらず。それより尙一層根抵の深きものなり。或個人の情緒的低調(Emotional undertone)はその人の品性の最も興味ある特質の一なり。此の低調を發見せんとせば、著しく對照的なる多くの現在氣分に於て、而して特に此の如き氣分がその人に取りては寧ろ珍らしき事情に依りて決定せらるゝが如き場合に於て、彼を觀察せざるべからず。此の場合には不思議に運命より獨立したる低調を發見し得べし。根本的に快活なる人は、最も峻烈なる苦痛の最中に於てすら、又最も慘憺たる悲痛に喚叫せるときに於てすら、實際決して絕望せず、尙生活に對する一種の根本的滿足の情を有するものにして、此の情は單なる運命に依りて決して壓倒せられず、又單に重き腦病によりて排除せられざるなり。又人に依りては內部に深き深き人生の悲觀を抱けるものありて、此の悲痛は最も喜ばしき幸福の時に於ても決して彼を離れざるなり。彼等は堅忍不拔にして更に又英雄的なることあり、而かも決して己が內部狀態と完全なる調和を得ることと能はざるなり。

情緒の此の低調は一度之を發見するときは、恰も古きヴァイオリンの音質或は個人的聲音の性質の如き觀あり。此等は如何に異なりたる樂曲を奏し或は之を歌ふも、決して變らざる恆常的事實なり。ヴァイオリンの音質及び聲音の性質と等しく、此の情緒的低調は固より恆常的物理的體制の伴象なり。而して情緒的低調の場合に於ては、此の恆常的物理的體制は腦髓の遺傳的素質卽ち是なり。此の遺傳的素質は一度此の如く診斷せらるゝときは、その後は十分信憑せられ得る所の事實なり。此の情緒的低調は固より發育中殊に青年初期に於て大に變化を受け易きも、已に幼時に於ても屢々よく現はるゝことあり。

一三二、變態的情緒(Abnormal emotion)

極めて種々の形に於て現はる。